

仙台市文化財調査報告書第171集

富沢・泉崎浦・山口遺跡(5)

—富沢遺跡第78次・80～85次発掘調査報告書—

1993年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第171集

富沢・泉崎浦・山口遺跡(5)

——富沢遺跡第78次・80～85次発掘調査報告書——

1993年3月

仙台市教育委員会

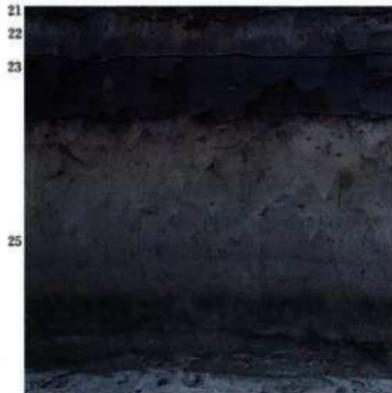


SR2

1
2
3
6
7
8
14
15
16
18



18
19
20
21



21
22
23
25

富沢遺跡第78次調査(Ⅲ区)基本層序



SD

1
5
7
11
12
18
19
20
21

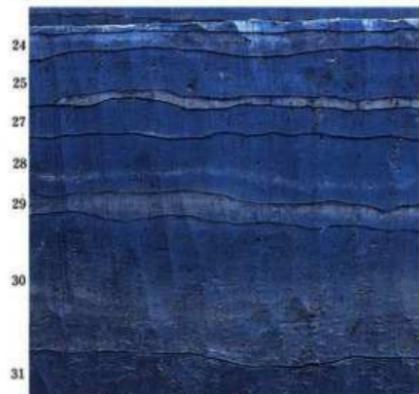
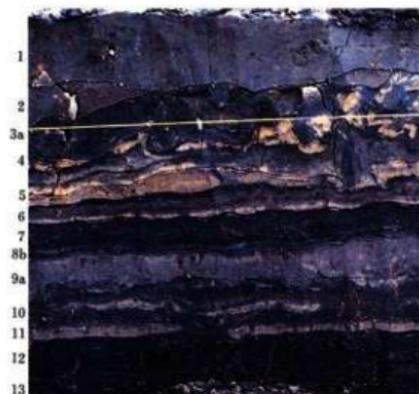
富沢遺跡第78次調査(Ⅰ区)基本層序



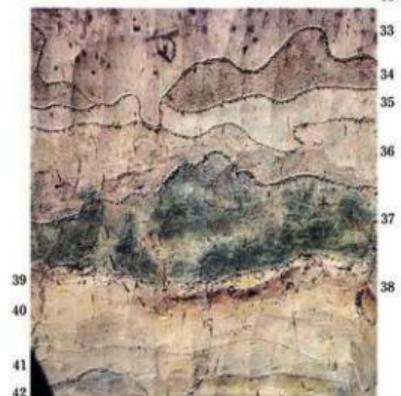
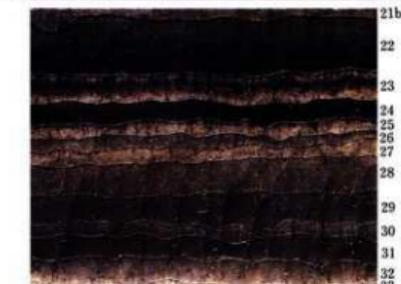
1
2
3
4
6
7
8
9
10



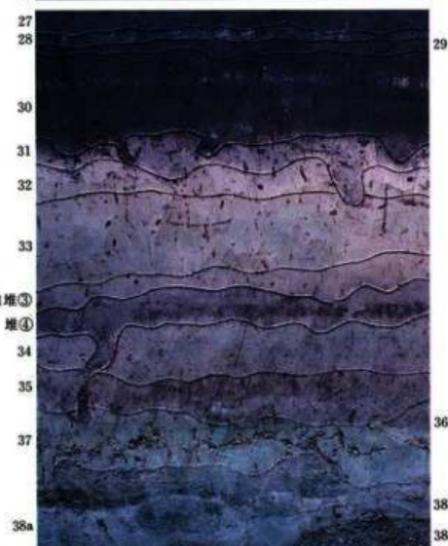
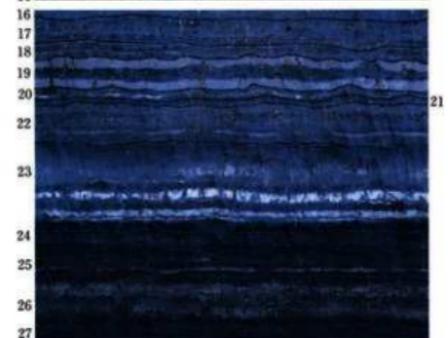
富沢遺跡第82次調査基本層序



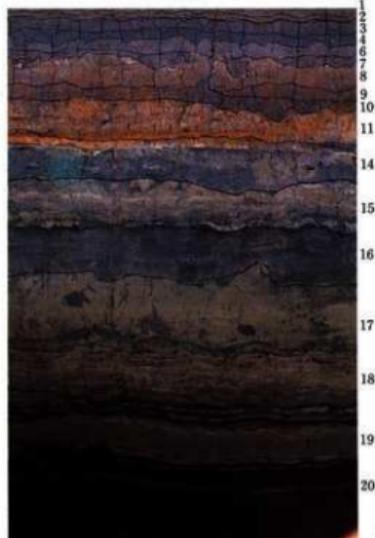
富沢遺跡第80次調査基本層序



富沢遺跡第81次調査基本層序



富沢遺跡第83次調査基本層序



富沢遺跡第84次調査基本層序



富沢遺跡第85次調査基本層序

SRI堆③
堆④

序 文

日頃、仙台市の文化財保護行政に対しましては、多大なるご理解とご協力をいただきまして、誠に感謝にたえません。

本市の南東部に位置します富沢地区は、かつては豊かな田園地帯でありました。ところが、昭和50年代の土地区画整理事業を契機といたしまして開発が急速に進んできました。特に昭和63年の地下鉄の開業以来、ますます都市化が進展してきております。

富沢遺跡は、このような開発に伴う事前調査で水田跡が発見されて以来、年毎に調査を行ってきました。昨年度までに行われた調査は、79箇所を数え、奈良時代を除く弥生時代から近世までの水田跡や、2万年以上前の氷河時代の森や人々の生活の跡の発見など貴重な成果をあげてきております。

このようなもとの、平成4年度は富沢地区で6箇所の調査を行い、本報告書はその調査成果をまとめたものです。今年度も弥生時代中ごろの水田跡が3箇所を確認され、富沢地区における初期水田の様子が判ってきました。

ご存知のように仙台市には、私たちの祖先が創造し、伝えてきた貴重な文化遺産が数多くあります。これら先人の残した文化遺産を保護し、活用しつつ後世に残していくことは、私たちに課せられた責務と考えております。教育委員会といたしましては、市民のみなさまや関係機関と共に手を携え、守り育てて生きたいと考えておりますので、今後ともみなさまのご協力をお願いいたします。

最後になりましたが、本書が社会教育や学術研究の場で多くの方々に活用され、お役に立つことを切望し、また、発掘調査や報告書の刊行に際しては、多くの方々のご協力、ご助言を頂きましたことを心から感謝申し上げます。

平成5年3月

仙台市教育委員会

教育長 東海林 恒 英

例 言

1. 本書は、富沢地区発掘調査受託事業である平成3年度富沢遺跡第78次調査（1次調査）、平成4年度富沢遺跡第78次調査（2次調査）、富沢遺跡第80次～85次調査の報告書である。
2. 報告書刊行のための整理作業は、文化財調査第二係 佐藤甲二・五十嵐康洋、調査第一係 佐藤淳が担当し、編集は五十嵐康洋・佐藤淳が担当した。
3. 各種分析については、花粉分析を守田益宗氏、プラント・オパール分析・C14による年代測定を古環境研究所に依頼した。
4. 本文の執筆分担は下記のとおりである。
守田益宗：第3章第1節
古環境研究所：第3章第2・3節
佐藤甲二：第2章第3・5節
五十嵐康洋：第1章、第2章第1・2・4・6・7節、第4章
5. 発掘調査および報告書作成にあたり、下記の方々に御指導、御助言をいただいた。（順不同、敬称略）
山田昌久、守田益宗、石本弘、酒井清治、藤原学

凡 例

1. 周辺の遺跡図は、国土地理院作成の1:25,000「仙台西南部・東南部」を使用した。
2. 土層註記などに記している土色は、「新版標準土色帖」（小山・竹原：1976）を使用した。
3. 調査区でのグリッド軸は任意方向のものであるが、同時に平面直角座標第X系による国上座標も記している。また図中の方位は全て真北をさしている。
4. 遺構名については以下のような遺構略号を使用した。
SD－溝跡 SK－土坑 SR－河川跡
5. 層位の表記は基本層位を算用数字、遺構内堆積土を○数字で表した。
6. 遺構内の傾斜面は「TT」で表現しているが、畦畔、自然流路については記していない。
7. 本文中での「灰白色火山灰」（庄子・山田：1980）の降下年代は、現在、10世紀前半頃と考えられている（白鳥：1980）。
8. 本文中の「擬似畦畔B」とは、水田畦畔の直下層（自然堆積層）上面に認められる畦畔状の高まりをさす。（斎野：1987）
9. 富沢地区の水田跡の認定基準に関しては、「水田跡の基本的理解—仙台市における水田跡の検出と認定—」（仙台農耕文化勉強会：1990）の認定基準に基づく。
10. 「泉崎浦遺跡」は、平成3年度以降は「富沢遺跡」に包括して調査・報告し、富沢遺跡の調査次数を与えている。なお、「泉崎浦遺跡」としての登録は従来通りである。

目 次

第1章 富沢・山口遺跡のあらまし	1
第2章 調査結果	7
第1節 富沢遺跡第78次調査	7
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. 遺構の所属年代とまとめ	
第2節 富沢遺跡第80次調査	30
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. 遺構の所属年代とまとめ	
第3節 富沢遺跡第81次調査	40
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. 遺構の所属年代とまとめ	
第4節 富沢遺跡第82次調査	53
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. 遺構の所属年代とまとめ	
第5節 富沢遺跡第83次調査	57
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. 遺構の所属年代とまとめ	
第6節 富沢遺跡第84次調査	77
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. 遺構の所属年代とまとめ	
第7節 富沢遺跡第85次調査	79
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. 遺構の所属年代とまとめ	
第3章 分析	
第1節 富沢遺跡第78次調査花粉分析	82
第2節 富沢遺跡第78次調査放射性炭素年代測定	84
第3節 富沢遺跡第78次、80次～85次調査プラント・オパール分析	85
第4章 まとめ	94

挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡	3	第9図 I・II区3層上面平面図・断面図	14
第2図 富沢・山口遺跡全体図	5・6	第10図 I・II区5層上面平面図・断面図	15
(富沢遺跡第78次調査)		第11図 III区5層七面平面図・断面図	16
第3図 調査区位置図・設定図	7	第12図 S D 4出土遺物	17
第4図 基本層序	8	第13図 S D 18出土遺物	17
第5図 I・II・III区土層柱状図	10	第14図 S R 2出土遺物	18
第6図 I・II区3層上面平面図・断面図	11	第15図 I区10層上面平面図・断面図	19
第7図 S D 3出土遺物	12	第16図 S D 28出土遺物	20
第8図 I・II区S K 1・2・3・4・5断面図	13	第17図 III区14・15層上面平面図・断面図	20
		第18図 I・II区18層上面平面図・断面図	21

第19図	S D 8 出土遺物	22
第20図	I・II区19層上面平面図・断面図	23
第21図	I・II区20層上面平面図・断面図	24
第22図	I区SR1断面図	25
第23図	出土遺物(1)	26
第24図	出土遺物(2)	27
第25図	出土遺物(3)	29

(富沢遺跡第80次調査)

第26図	調査区位置図・設定図	30
第27図	基本層序	33
第28図	調査区断面図(北・西・東・南壁)	31・32
第29図	2層上面平面図・断面図	34
第30図	3層上面平面図・断面図	35
第31図	9層水田跡平面図	36
第32図	出土遺物	38

(富沢遺跡第81次調査)

第33図	調査区位置図・設定図	40
第34図	基本層序	41
第35図	西壁断面図	43
第36図	東壁断面図	44
第37図	北壁・南壁断面図	45
第38図	SK1平面図・断面図	46
第39図	4層水田跡出土遺物	46
第40図	4層水田跡疑似畦畔B・SK1平面図	47
第41図	SD1平面図	48
第42図	11層水田跡平面図	49
第43図	14層上面樹木片集中地点平面図	51
第44図	出土遺物	51

(富沢遺跡82次調査)

第45図	調査区位置図・設定図	53
第46図	基本層序	54
第47図	SD1平面図・断面図	55
第48図	出土遺物	56

(富沢遺跡第83次調査)

第49図	調査区位置図・設定図	57
第50図	基本層序	58
第51図	調査区東壁断面図	60
第52図	調査区西壁断面図	61
第53図	調査区南壁・北壁断面図	62
第54図	3層水田跡平面図	64
第55図	3層水田跡水口詳細図	65
第56図	3層水田跡水口出土遺物	66
第57図	5層水田跡分布域及び 上面自然流路跡平面図	67
第58図	5層水田跡出土遺物	68
第59図	6層水田跡水田域	68
第60図	6層水田跡出土遺物	69
第61図	12層水田跡平面図	70
第62図	13層水田跡平面図	72
第63図	13層水田跡出土遺物	73
第64図	下層調査区西・南・東壁断面図	74
第65図	出土遺物	75

(富沢遺跡第84次調査)

第66図	調査区位置図・設定図	77
第67図	基本層序	78

(富沢遺跡第85次調査)

第68図	調査区位置図・設定図	79
第69図	基本層序	80
第70図	SK1・2平面図・断面図	81
第71図	イネのプラント・オパール の検出状況(1)	92
第72図	イネのプラント・オパール の検出状況(2)	93

表 目 次

第1表	遺跡地名表	2
第2表	平成4年度富沢遺跡調査要項	4
第3表	富沢遺跡第78次調査 3層上面土坑計画表	13
第4表	富沢遺跡第80次調査 9層水田跡計画表	37
第5表	富沢遺跡第78次調査 花粉・胞子出現表	83
第6表	プラント・オペール分析結果(1)	89
第7表	プラント・オペール分析結果(2)	90
第8表	各層におけるイネのプラント・オペール密度と稲作の可能性	91
第9表	富沢遺跡第78・80～85次調査出土遺物集計表	96

写真図版目次

遺 構

(富沢遺跡第78次調査)

写真1	I区北壁断面	103
写真2	Ⅲ区東壁断面	103
写真3	Ⅲ区南壁断面	103
写真4	I区SD8土師器出土状況	104
写真5	Ⅱ区SD11・13完掘状況	104
写真6	Ⅱ区SD3木製品出土状況	104
写真7	Ⅱ区SD4・18完掘状況	105
写真8	I区SR1樹木出土状況	105
写真9	I区SR1断面	105
写真10	Ⅲ区SD26検出状況	106
写真11	Ⅲ区SD26、SK12完掘状況	106
写真12	Ⅲ区SD28検出状況	106

(富沢遺跡第80次調査)

写真13	西壁断面	107
写真14	東壁断面(2段目)	107
写真15	SD2・4完掘状況	107
写真16	9層水田跡検出状況	108
写真17	9層水田跡検出状況	108
写真18	9層水田跡疑似畦畔B検出状況	108

(富沢遺跡第81次調査)

写真19	4層水田跡疑似畦畔B検出状況	109
写真20	SK1完掘状況	109
写真21	SD1完掘状況	109
写真22	11層水田跡検出状況	110
写真23	11層水田跡完掘状況	110
写真24	14層上面樹木集中状況	110
写真25	疑似畦畔B断面(北壁)	111
写真26	11層水田跡畦畔断面(北壁)	111
写真27	11層水田跡畦畔断面(西壁)	111
写真28	11層水田跡畦畔断面(西壁)	111
写真29	下層調査区断面(東壁)	112
写真30	下層調査区断面(北壁)	112
写真31	下層調査区断面(西壁)	112

(富沢遺跡第82次調査)

写真32	東壁断面	113
写真33	SD1完掘状況	113
写真34	15層遺物出土状況	113

(富沢遺跡第83次調査)

写真35	3層水田跡完掘状況	114
写真36	3層水田跡水口状況	114

写真37	5層分布域及び上面自然流路	114	(富沢遺跡第84次調査)		
写真38	6層分布域(8層上面)	115	写真58	北壁断面	121
写真39	6層分布域(9層上面)	115	写真59	西壁断面	121
写真40	12a層水田跡検出状況	115	写真60	南壁断面	121
写真41	12a層水田跡完掘状況	116			
写真42	13層水田跡大畦畔	116	(富沢遺跡第85次調査)		
写真43	13層水田跡小畦畔	116	写真61	北壁断面	122
写真44	13層水田跡完掘状況	117	写真62	東壁断面	122
写真45	13層水田跡完掘状況	117	写真63	S D I完掘状況	122
写真46	13層水田跡完掘状況	117			
写真47	3層水田跡段差断面(東壁)	118	遺物		
写真48	3層水田跡畦畔断面(東壁)	118	写真64	富沢遺跡第78次調査 出土遺物(1)	123
写真49	3層水田跡畦畔断面(西壁)	118	写真65	富沢遺跡第78次調査 出土遺物(2)	124
写真50	5・6層分布域断面(東壁)	118	写真66	富沢遺跡第78次調査 出土遺物(3)	125
写真51	12a・13層水田跡大畦畔断面(南壁)	119	写真67	富沢遺跡第80次調査 出土遺物	125
写真52	12a・13層水田跡大畦畔断面(西壁)	119	写真68	富沢遺跡第81次調査 出土遺物	126
写真53	13層水田跡小畦畔断面(北西コーナー)	119	写真69	富沢遺跡第82次調査 出土遺物	126
写真54	13層水田跡小畦畔断面(東壁)	119	写真70	富沢遺跡第83次調査 出土遺物(1)	127
写真55	下層調査区断面(東壁)	120	写真71	富沢遺跡第83次調査 出土遺物(2)	128
写真56	下層調査区断面(南壁)	120	写真72	富沢遺跡第84次調査 出土遺物	128
写真57	下層調査区断面(西壁)	120			

分析

写真73	プラント・オパール顕微鏡写真(1)	129
写真74	プラント・オパール顕微鏡写真(2)	130

第1章 富沢遺跡・山口遺跡のあらまし

富沢遺跡は、仙台市南部の仙台市太白区鹿野・長町南・富沢・泉崎等に所在する。遺跡は名取川と広瀬川に挟まれた沖積地（郡山低地）西部に位置し、北西部を丘陵、他を自然堤防で囲まれた後背湿地に広がっている。遺跡の総面積は、約90haに及んでいるが現在は土地区画整理事業による盛土のため旧地形は見る事ができない。盛土以前の標高は9～16mである。

昭和51年、本遺跡の南側の六反田遺跡で「アゼ状遺構」が検出され、その後、昭和57年には隣接する山口遺跡において仙台市では初めて水田跡が検出された。また、同時に富沢地区においても高速鉄道に関わる試掘調査、および本調査の結果から水田跡の存在が確認された。このため調査成果とともに地形的特徴を考慮して、昭和58年新たに「富沢水田遺跡」として登録された。その後、居住域等の検出によって昭和62年には「富沢遺跡」と改称され、平成2年には遺跡範囲の北東部が拡大されている。また、平成3年にはそれまで富沢遺跡の中央部微高地部分は「泉崎浦遺跡」として登録されていたが、共通する部分が多いところからその範囲を富沢遺跡に包括している。調査は昨年度まで79次の調査が実施され、その結果、奈良時代を除く弥生時代から近世までの水田跡が重層的に検出されている。さらに弥生時代の水田跡の2～3m下層では、旧石器時代、縄文時代の遺物も確認されている。今年度は第78次、80次～85次調査が行われ、そのうち第78次調査は昨年度からの継続調査である。

山口遺跡は富沢遺跡の南に隣接し、名取川旧支流荒川北岸の自然堤防上に位置している。遺跡の北側では、富沢遺跡から続く後背湿地部分をも含んでいる。遺跡の総面積は約16haである。自然堤防上部分では縄文時代・奈良時代・平安時代の集落跡が、また、後背湿地部分では弥生時代・古墳時代・平安時代・中世・近世の水田跡が検出されている。

なお、富沢遺跡・山口遺跡の歴史的環境及び地形と地質に関しては、富沢遺跡第15次調査報告書（斎野・豊嶋：1987）・第30次調査報告書（太田：1991）・山口2次調査報告書（田中：1984）に詳しい記載があるので、これを参照されたい。

№	遺跡名	立地	年 代	№	遺跡名	立地	年 代
1	野島屋中子跡	自然堤防	奈良・平安・近世	41	養厚古墳	後背塚地	古墳(後)
2	野島屋分見寺跡	自然堤防	奈良・平安・中世	42	山田遺跡	奈良堤防・後背塚地	縄文・中世
3	法福寺古墳	自然堤防	古墳(後)	43	富野赤木遺跡	自然堤防	奈良・平安
4	秋台草堂寺跡	沖積平野	奈良・平安	44	長町六丁目遺跡	自然堤防	奈良・平安
5	藤小倉遺跡	自然堤防・後背塚地	縄文~近世	45	天宮東遺跡	自然堤防	奈良・平安
6	遠見塚古墳	自然堤防	古墳(前)	46	養厚遺跡	自然堤防	古墳・平安
7	赤井城跡	自然堤防	古墳・中世・江戸	47	新田遺跡	自然堤防	奈良・平安
8	神野城跡	自然堤防	中世	48	北原東遺跡	自然堤防	奈良・平安
9	神野城跡	自然堤防	縄文・平安	49	長町赤木遺跡	自然堤防	奈良・平安
10	今宮遺跡	自然堤防	縄文(後)~近世	50	大野印古墳群	自然堤防	古墳(中・後)
11	日辺遺跡	自然堤防	室町	51	王ノ塚古墳	自然堤防	古墳
12	日辺遺跡	河川敷	古墳(中)	52	鳥飼塚古墳	自然堤防	古墳(後)
13	愛宕山横穴群	丘陵	古墳(前)・奈良	53	春日北古墳	自然堤防	古墳(後)
14	大年寺山横穴群	丘陵	古墳(中)	54	伊吉山遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
15	常守寺横穴群	河川沿岸	古墳(前)	55	下ノ内遺跡	自然堤防・後背塚地	奈良・平安
16	新保遺跡	河原段丘	縄文	56	下ノ内遺跡	自然堤防	縄文・奈良・古墳・平安
17	兜塚古墳	自然堤防	古墳(中)	57	六反田遺跡	自然堤防	縄文~江戸
18	茂ノ地城跡	丘陵	南北朝~室町	58	五反田古墳	自然堤防	古墳
19	西台保遺跡	自然堤防	縄文・奈良(中)・古墳	59	富武遺跡	自然堤防	戦国
20	葛山遺跡	自然堤防	古墳(前)・奈良・中世	60	龍ノ内遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
21	北谷城跡	自然堤防	室町・江戸	61	観音堂横穴遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
22	大ノ上1遺跡	自然堤防・後背塚地	古墳・奈良・平安	62	野島屋敷日遺跡	自然堤防・後背塚地	縄文・奈良・平安
23	鹿野屋敷遺跡	丘陵	古墳・奈良・平安	63	六本松遺跡	自然堤防・後背塚地	奈良・平安
24	一塚古墳	後背塚地	古墳(後)	64	舟ノ東遺跡	自然堤防・後背塚地	奈良・奈良・平安
25	鹿野・丁貝遺跡	河原段丘	縄文・奈良・奈良・平安	65	上野遺跡	河原段丘	縄文(中)・奈良・平安
26	二塚古墳	後背塚地	古墳	66	山田赤木遺跡	河原段丘	縄文・奈良・平安・江戸
27	神野屋敷遺跡	河原段丘	奈良・平安	67	船橋城遺跡	河原段丘	縄文・奈良・奈良・平安
28	神野古墳	河原段丘	古墳	68	清太郎遺跡	河原段丘	縄文・平安
29	舟ノ内遺跡	丘陵	縄文(前・前)・奈良・平安	69	西台遺跡	丘陵	古墳・奈良・平安
30	土手内遺跡	丘陵	縄文~平安	70	山田上ノ台遺跡	河原段丘	旧石器・縄文(前・中・後)・平安・江戸
31	土手内横穴群	丘陵	古墳・奈良	71	杉土子	丘陵	江戸
32	土手内西跡	丘陵	古墳・奈良	72	北宮遺跡	河原段丘	旧石器・縄文(前・前・中)・平安・江戸
33	吉野遺跡	丘陵	古墳・奈良・平安	73	御堂平遺跡	丘陵	縄文・平安・中世
34	三神家遺跡	丘陵	縄文(前・中)・平安	74	青葉山遺跡	丘陵	旧石器
35	金山遺跡	丘陵	古墳(中)	75	敷木遺跡	自然堤防	平安・中世・近世
36	金洗石古墳	河原段丘	古墳	76	船橋遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
37	裏町古墳	河原段丘	古墳(中)	77	車遺跡	自然堤防	奈良・古墳・奈良・平安
38	金岡八幡古墳	後背塚地	古墳(後)	78	安久東遺跡	自然堤防	奈良~近世
39	富武遺跡	後背塚地	旧石器~近世	79	長河原遺跡	自然堤防・後背塚地	旧石器・奈良・平安・中世
40	養厚城遺跡	自然堤防・後背塚地	縄文・古墳・平安・近世	80	大塚山古墳	河川敷	古墳

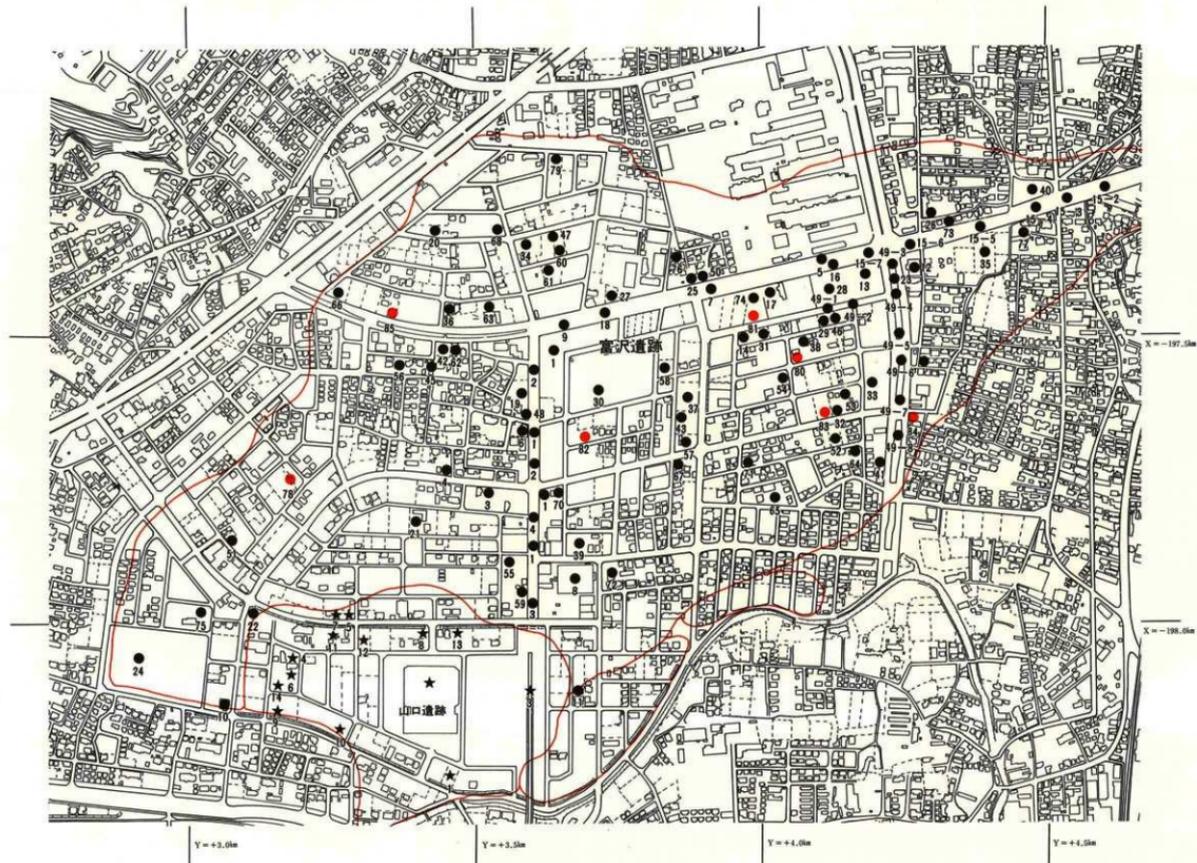
表1 遺跡地名表



第1図 周辺の遺跡

調査次数	所在地	調査期間	調査面積	立地	位置	株A座標	現況	堤防高	田階高	協力者	担当職員
當次第78次(平3)	東崎2丁目16	平成3年9月18日～12月18日	約395㎡	池高地縁辺	西部	X=-197,764.03 Y=3,184.15	水田	14.7m	14.7m	神崎建設工業	平岡亮輔
當次第78次(平4)		平成4年4月15日～6月10日	約295㎡								
當次第80次	長町南3丁目	平成4年6月17日～7月30日	約165㎡	後背湿地	東部	X=-197,536.30 Y=4,077.58	宅地	10.3m	8.65m	高橋 司	五十嵐 康洋
當次第81次		平成4年7月7日～8月25日	約175㎡								
當次第82次	長町南4丁目	平成4年8月3日～8月19日	約45㎡	後背湿地	中北部	X=-197,677.05 Y=3,703.59	宅地	11.5m	9.35m	砂通建設株式会社	五十嵐 康洋
當次第83次		平成4年9月22日～11月17日	約231㎡								
當次第84次	長町南1丁目210	平成4年9月18日～10月6日	約30㎡	後背湿地	東部	X=-197,652.38 Y=4,285.36	宅地	10.64m	9.06m	大内 啓三	五十嵐 康洋
當次第85次		平成4年10月13日～10月27日	約21㎡								
當次第86次	地野3丁目19			池高地縁辺	北西部	X=-197,455.95 Y=3,368.88	宅地	15.84m	14.38m	神佐藤俊孝	五十嵐 康洋

表2 平成4年度當次調査調査要項



第2図 富沢・山口道跡全体図

第2章 調査結果

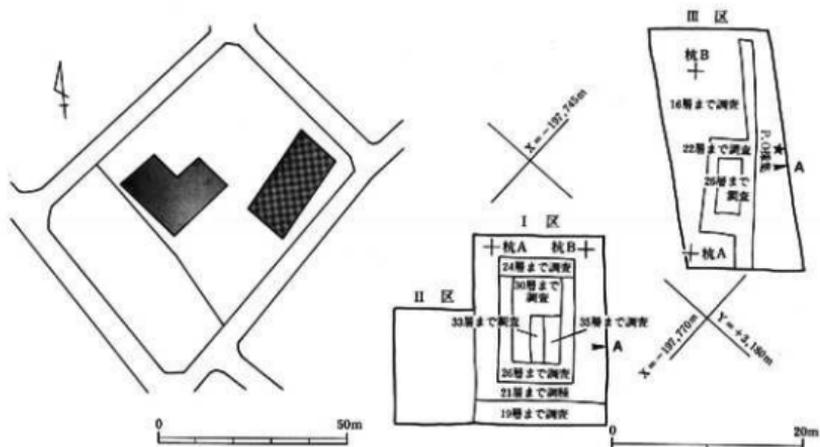
第1節 富沢遺跡第78次調査

1. 調査方法

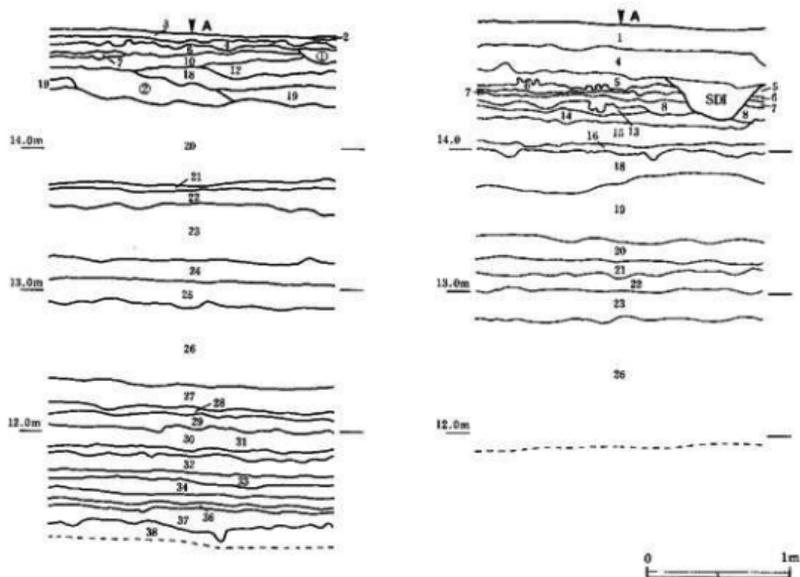
調査は2年間に渡って行われ、I・II区を平成3年度に、III区を平成4年度に実施している。それぞれの調査区の設定面積は合計約687㎡である（I・II区は約395㎡、III区は約292㎡）。調査は盛土及び1層中（旧水田耕作土）までを重機で排除し、以下は人力で行った。調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。I・II区では19層まで調査区全面の調査を実施し20層以下は14×20mの試掘区を設けて掘り下げた。（24層以下は、安全確保のため調査区を縮小して35層まで調査を実施している。最下層面では約2×5mである。）。III区では、16層まで調査区全面の調査を実施し、17層以下は14×20mの試掘区を設けて掘り下げた（23層から26層までは3×6mで実施している。）。遺構の測量は杭A・Bを基準にして実施している。なお、III区の基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺構内の正確な位置を把握している（III区杭A：X=-197,764.03m Y=+3,184.15m、杭B：X=-197,751.63m Y=+3,198.55m）。

2. 基本層序

調査方法にもあるように2年間の調査であり、担当者も違うことから現場での層位の確定は



第3図 調査区位置図・平面図



第4図 基本層序

できなかつたので、その後の整理事業によって共通した層序を作成している（基本層序表で特に記載のないものは、全面に認められる層位である。）。確認された層位は、全部で38層である。各層の土質は、20層より上では基本的にシルトである。21層から23層までは砂質であるがそれ以下は、粘土が主体となり植物遺体を含む層である。6～8層で灰白色火山灰が認められた。7層のものは8層上面のものが水田耕作によって巻き上げられたものと考えられる。現代のものを除く明確な水田土壌は確認できなかつたが、3・5・6・7・9・15・16層は水田土壌の可能性が考えられる（その後の分析によって、14層も水田土壌の可能性が指摘されている。）。各層の傾きであるが、西から東への下り傾斜が認められる。特にⅠ・Ⅱ区では西側に層が多くみられる特徴があり、西側から土砂の供給が多い地点であったと推察される。

3. 検出遺構と出土遺物

(1) 3層上面（第6・8・9図）

3号溝跡-SD3-

〈遺構状況〉Ⅰ・Ⅱ区に位置し、直線的に延びる溝で、方向はN-66°-Eである。幅は1.1

番号	色	調	土質	層序	層化形	断面形状	組入物	備考
1	10YR4/4	焼(1・2区)	粘土質シルト	15	糸状少量	○	マンガン粒・砂粒・炭化物微量	—
2	2.5Y3/2	焼(オリーブ調) (3区)	—	—	—	—	—	—
3	10YR4/2	灰黄陶(1・2区)	シルト	12	塊状少量	○	マンガン粒・砂粒・炭化物微量	—
4	10YR6/8	黄灰陶(3区)	—	—	—	—	—	—
5	2.5Y5/2	焼灰黄	シルト	12	塊状少量	?	マンガン粒・砂粒・炭化物微量	1・2区に分布
6	10YR	灰黄陶	細砂	20	—	—	—	3区に分布
7	10YR3/1	黒焼	粘土	6	塊状少量	?	マンガン粒・自然砂・砂粒	—
8	10YR4/1	焼灰	粘土質シルト	7	粒状少量	?	焼灰粒、マンガン粒、部分的に灰白色火山灰	—
9	10YR4/2	灰黄陶	砂質シルト	6	塊状少量	?	マンガン粒、灰白色火山灰・マンガン粒	3区以下層間に分布
10	10YR2/2	黒焼	シルト質粘土	12	—	—	マンガン粒少量	3区に分布
11	10YR3/3	焼黄	粘土質シルト	10	粒状少量	?	砂粒、陶片粒少量	1・2区に分布
12	10YR6/4	こぶい黄焼	細砂	12	粒状少量	—	陶片粒少量	1・2区に分布
13	10YR4/4	焼	砂	10	粒状少量	—	陶片粒少量	1・2区に分布
14	10YR3/3	焼黄	シルト	17	粒状少量	—	陶片粒少量	—
15	10YR3/4	焼黄	砂質シルト	6	—	—	φ1~3cmの焼灰粒	3区で部分的分布
16	10YR2/3	黒焼	粘土	7	粒状少量	?	層上部のマンガン粒	3区で部分的分布
17	10YR4/2	こぶい黄焼	粘土	20	塊状少量	?	層上部のマンガン粒	3区で部分的分布
18	10YR2/2	黒焼	シルト	8	塊状少量	?	マンガン粒、植物遺体	3区で部分的分布
19	10YR2/2	黒焼	砂質シルト	20	—	—	—	3区で部分的分布
20	2.5Y5/3	黄焼	シルト	35	層間・層状や中層	—	10~2~1cmの焼灰粒少量・1区東部から3区にかけて砂粒・植物遺体	—
21	10YR3/4	焼黄	粘土質シルト	20	—	—	砂粒、陶片粒少量	1・2区に分布
22	2.5Y6/3	こぶい黄	細砂	40	—	—	陶片粒・マンガン粒、砂粒、植物遺体	—
23	2.5Y3/1	黒焼	—	—	—	—	—	—
24	5Y4/1	灰	—	—	—	—	—	—
25	2.5G Y3/1	オリーブ灰	粘土質シルト、細砂	8	—	—	植物遺体	—
26	10YR6/2	こぶい黄焼	—	—	—	—	—	—
27	10YR3/3	こぶい黄焼	—	—	—	—	—	—
28	10YR2/1	黒	砂質シルト	15	管状少量	—	φ1cm程度の焼灰粒少量、植物遺体	—
29	7.5Y3/1	灰(1・2区)	砂質シルト	30	—	—	焼灰粒、植物遺体	—
30	7.5Y4/1	灰(3区)	—	—	—	—	—	—
31	5Y4/1	灰	粘土	15	—	—	植物遺体	—
32	5Y3/1	オリーブ灰	—	—	—	—	—	—
33	5Y2/1	黄	粘土	15	—	—	砂粒・マンガン粒、植物遺体	—
34	10Y5/1	灰(1・2区)	シルト質粘土	30	—	—	植物遺体	—
35	5GY3/1	灰(3区)	—	—	—	—	—	—
36	5Y5/1	灰	焼砂、シルト	8	—	—	—	1・2区で部分的分布
37	5Y4/1	灰	粘土	3	—	—	—	1・2区で部分的分布
38	5Y5/1	灰	粘土	10	—	—	—	1・2区で部分的分布
39	5Y2/1	黄	粘土	10	—	—	植物遺体	1・2区で部分的分布
40	5Y4/1	灰	砂質シルト、粘土	14	—	—	—	1・2区に分布
41	5Y3/1	オリーブ灰	—	—	—	—	—	—
42	2Y2/2	ナチーフ黄	粘土	6	—	—	植物遺体	1・2区に分布
43	5Y4/1	灰	粘土	13	—	—	植物遺体	1・2区に分布
44	5Y3/1	オリーブ灰	粘土	8	—	—	植物遺体	1・2区に分布
45	3Y4/1	灰	シルト質粘土	10	—	—	植物遺体	1・2区に分布
46	3Y3/1	オリーブ灰	粘土	6	—	—	植物遺体	1・2区に分布
47	2.5GY4/1	オリーブ灰	粘土質シルト	6	—	—	植物遺体	1・2区に分布
48	2.5Y3/1	黒焼	粘土	15	—	—	植物遺体	1・2区に分布
49	2.5GY5/1	ナチーフ灰	粘土質シルト	—	—	—	植物遺体	1・2区に分布

~2.4m、深さは約30cmである。堆積土は2層であるが、断面形状や堆積土の違いなどから新旧2時期の作り替えがなされたものと考えられる。また、SD3は、SK9・10と重複関係にあり、これら全てより新しい。枕を2本検出しているが、この溝に伴うものであるかどうかは不明である。

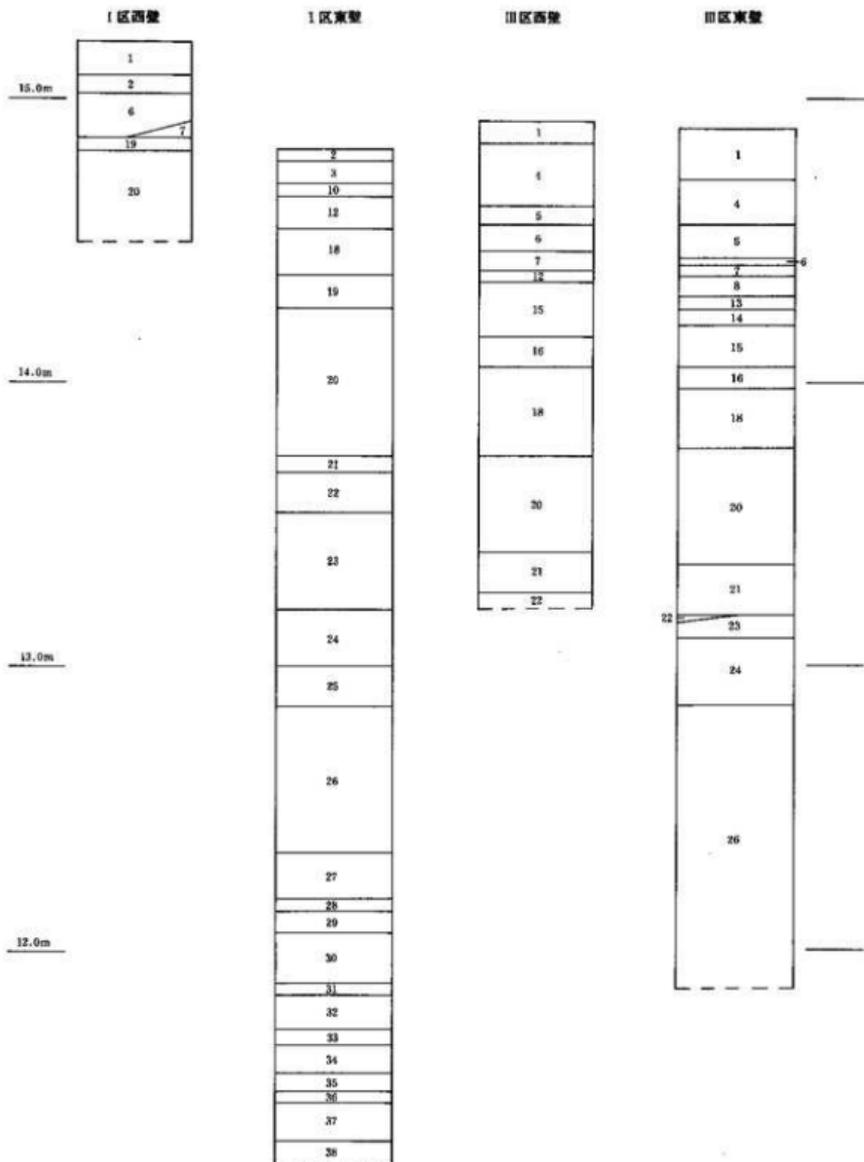
〈出土遺物〉遺物は堆積土中から陶器、木製品が出土している。(第7図)

陶器

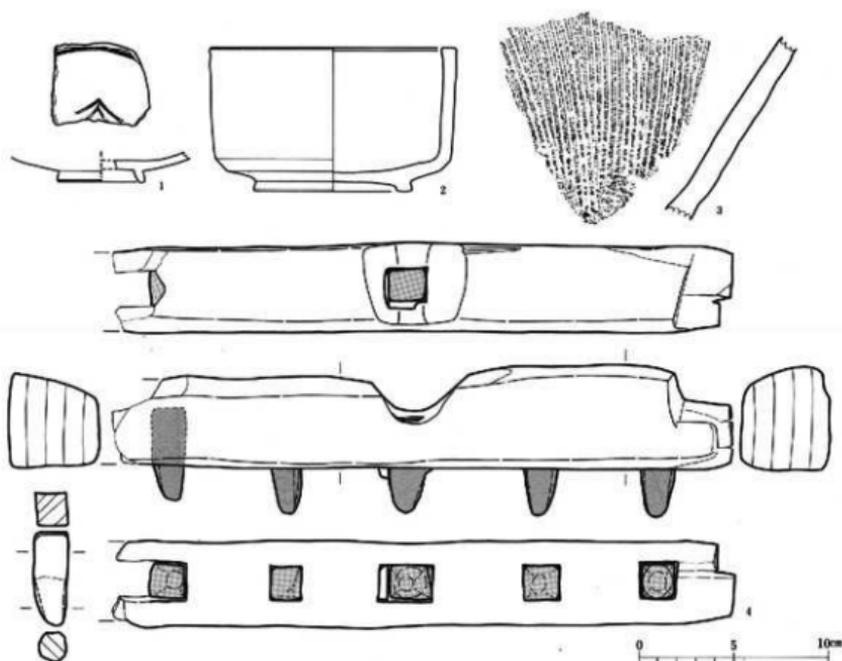
1は、相馬焼の灰釉皿である。見込みに印刻文、回線が認められる。時期は江戸時代後半以降と考えられる。

2は、埴焼のわら灰釉香炉である。時期は、江戸時代後半から末頃と考えられる。

第 1 册 常武铁路第 78 次调查



第 5 图 I · II · III 区土层柱状图



調査番号	図録番号	遺物・部位	種別	部	保存状況	口径cm	底径cm	高さcm	幅cm	内径cm	重量g	出所
図7図-1	写真04-12	SD-3	金属	豆	約1/4		4.6					稲葉、灰土、墨込に印文、銅線12世紀後半以来
-2	写真04-11	SD-3	金属	赤銅	約1/2	13.0	8.3	7.7				鎌倉、室町期、江戸後期～末期
-3	写真05-1	SD-3	金属	鋼鉄								鎌倉、鎌池、江戸後期～末期

調査番号	写真・図録番号	出土遺物・部位	種別	材質	遺物形状	最大遺存長	最大遺存幅	幅	柄	柄	柄	柄	柄	柄	柄
図7図-4	写真06-1	SD-3	農具	木	数片取	32.2cm	5.5cm	4.5cm	6.3cm	1.9~2.5cm	4.3~4.6cm	わらすこ			

第7図 S.D.3出土遺物

3は、坩堝の鉄軸挿鉢である。時期は、江戸時代後半から末頃と考えられる。

木製品

4は、木製農具で、底面から出土している。端部を一部欠損しているがほぼ完形と思われる。遺存する最大長は32.2cm、高さは5.5cm、幅は4.5cmである。上部に柄を取り付けるくぼみが認められる。下から歯を差し込む部分を約4.5cmの間隔でくりぬいてある。中心のくりぬきは、歯を止めるためにくさび状の木片を差し込んである。歯の先端は、腐食しておりこのままの形状で使われたかは不明である。形状や民俗例などから判断して藁を摺る農具（藁すぐり）と考えられる。

17号溝跡-S.D17-

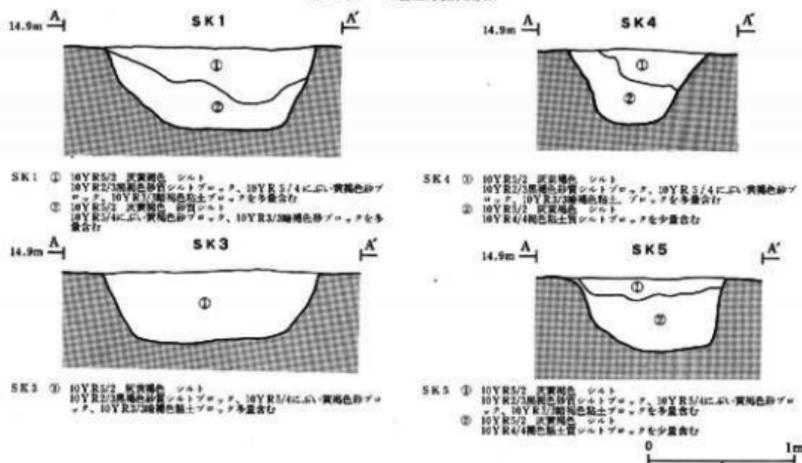
Ⅱ区に位置し、直線的に延びる溝で、方向はN-66°-Eである。幅は1.6~2.0m、深さ約

1 mである。堆積土は6層確認されるが、堆積土の違いや断面が2段に下がることなどからSD3同様に2時期の作り替えがなされたと考えられる。遺物は出土しなかった。

土坑は全部で8基検出されているが、平面形や深さなどに規格性は認められず、また、一度に埋め戻されたような堆積状況を呈している。遺物は8基とも出土していない。これらの土坑の性格については3層が水田跡の可能性も考えられるので、水田耕作に関係するものとも考えられるが、遺物も出土していないことなどから断定は控えたい。(第3表)

土坑名	地区	上端長軸(m)	上端短軸(m)	深さ(m)	平面形	断面形	備考
SK1	I	—	—	0.58	楕円形?	逆台形	遺物なし・調整区外
SK2	I	—	—	—	—	—	遺物なし・調整区外
SK3	I	2.0	1.5	0.5	不整形楕円形	逆台形	遺物なし
SK4	I	1.5	1.1	0.55	楕丸長方形	逆台形	遺物なし
SK5	I	1.6	1.2	0.50	楕丸長方形	逆台形	遺物なし
SK8	II	0.82	0.64	0.90	不整形楕円形	皿状	遺物なし
SK9	II	1.6以上	0.60	0.10	長楕円形	皿状	遺物なし
SK10	II	1.1以上	0.85	0.30	楕円形	逆三角形	遺物なし

第3表 3層土坑計測表

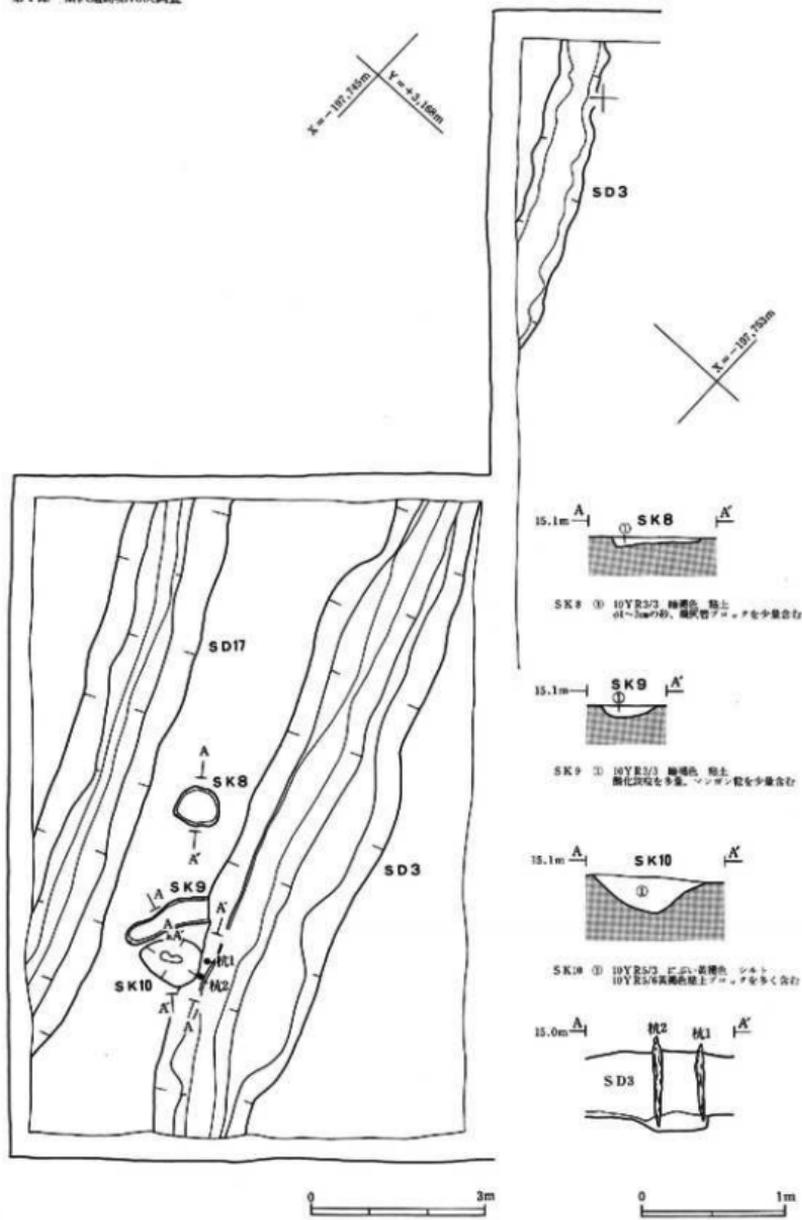


第8図 I・II区SK1・3・4・5断面図

(2) 5層上面(第10・11図)

1号溝跡-SD1-

I区に位置し、直線的に延びる溝で、方向はN-3°-Wである。検出長6.2m、幅22cm、深さは約9cmであるが、II区に近づくにつれ明瞭ではなくなり、II区では検出されていない。



第9図 I・II区3層上面平面図、SK8・9・10杭断面図

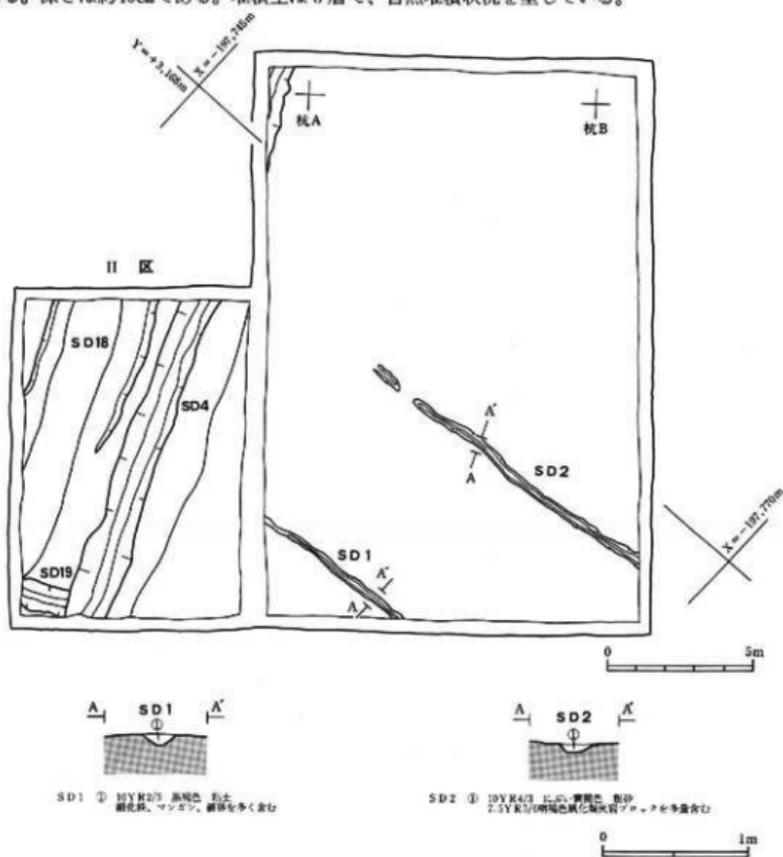
堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

2号溝跡-SD2-

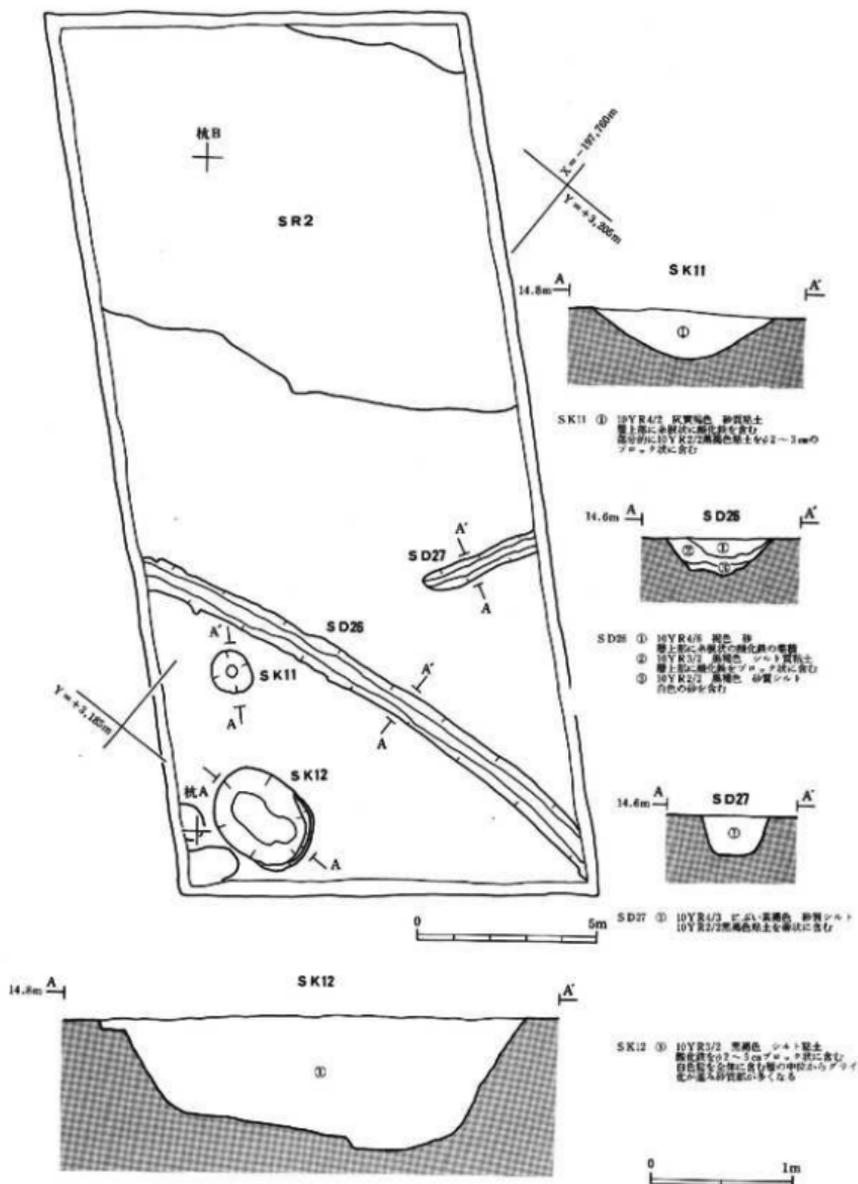
I区に位置し、直線的に延びる溝であるが、途中で途切れている。方向は $N-3^{\circ}-W$ である。検出長約10m、幅は約22cm、深さは約6cm、断面形は皿状である。堆積土は1層で、遺物は出土しなかった。

4号溝跡-SD4-

〈遺構状況〉I・II区に位置し、直線的に延びる溝で、方向は $N-70^{\circ}-E$ である。検出長約12m、検出された最大幅は1.7mであるが、SD3に切られているので全容は不明である。深さは約40cmである。堆積土は3層で、自然堆積状況を呈している。



第10図 I・II区5層上面平面図、SD1・2断面図

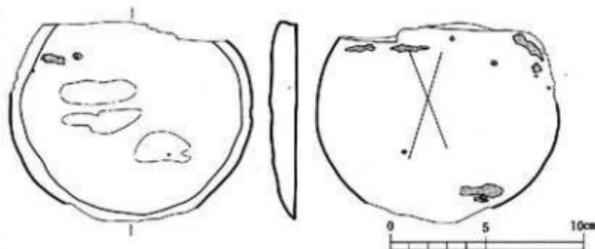


第11図 Ⅲ区5層上面平面図、SK11・12、SD26・27断面図

〈出土遺物〉遺物は堆積土中から木製品が出土している。(第12図)

木製品

約1/4を欠損している。残存する直径は約13cm、最大厚は1.3cmで、断面形は凸レンズ状である。



調査番号	図面番号	出土遺物	種別	位置	長さ	厚さ	重量	備考
第12図	平野01-2	SD-4		ふた?	12.6cm	1.4cm		ふた・遺構内(メタロートン部分)

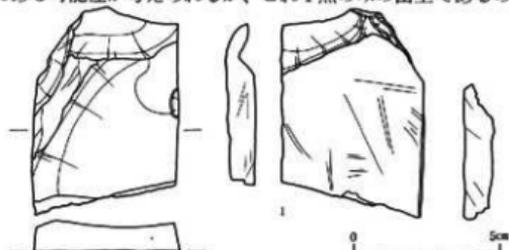
第12図 SD 4 出土遺物

両面に漆の皮膜が残存し

ているので、元々は全面塗りであった可能性が高い。平らな面に×状の刻みがみられる。この遺物の機能としては形状から蓋である可能性が考えられるが、これ1点のみの出土であるので類例の増加を待って判断したい。

18号溝跡-SD18-

〈遺構状況〉Ⅱ区に位置している。SD17と重複しており、そのほとんどが削平されているので全容は不明である。確認される上端幅は約3.5mである。



調査番号	図面番号	遺構・埋物	長さ	幅	厚さ	重量	材質	備考
第13図	平野01-9	SP18	62.3	47	9	23.4	石質	

第13図 SD 18 出土遺物

〈出土遺物〉遺物は堆積土中から石製品が1点出土している。(第13図)

石製品

砥石と考えられ、3面に擦痕が認められるが、方向はまちまちである。

19号溝跡-SD19-

Ⅱ区に位置している。SD 4・SD18と重複関係にありSD 4に切られているが、SD18との関係に付いては調査区外に延びており確認できない。検出長1.6m、幅は1.2mである。遺物は出土しなかった。

26号溝跡-SD26-

Ⅲ区に位置し、やや湾曲した溝で、直線部分での方向はN-7°-Wである。検出長5m、幅78cm、深さ約28cm、断面形は皿状である。堆積土は3層で自然堆積状況を呈している。遺物は出土しなかった。

27号溝跡-SD27-

Ⅲ区に位置し、直線的に延びる溝であるが部分的な検出である。検出長3.3m、幅47cm、深さ約30cm、断面形は逆台形である。堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

11号土坑-SK11-

Ⅲ区に位置している。上端平面形はほぼ円形で、直径約1.2m、深さ約30cm、断面形は播鉢状を呈している。堆積土は1層である。遺物は、土師器片が1点出土している。

12号土坑-SK12-

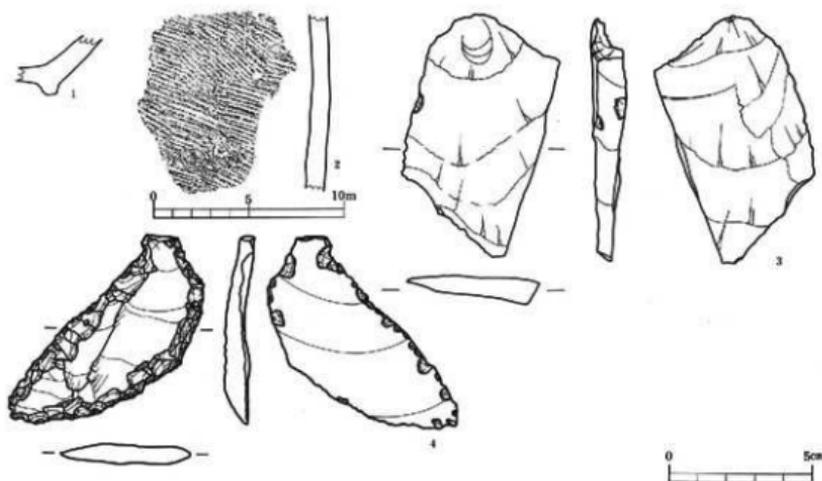
Ⅲ区に位置している。上端平面形は隅丸長方形で、上端長軸3m、短軸2.2m、深さ約90cm、断面形は逆台形である。堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

2号河川跡-SR2-

〈遺構状況〉Ⅲ区に位置している。検出面での上端幅は約12mである。確認面から約3m掘り下げたところで湧水が著しくなり、また、壁面の崩落がみられたので危険防止のために底面の検出は断念した。遺構の状況から人工的なものではなく自然流路と考えられる。

〈出土遺物〉堆積土中から土師器7点、須恵器10点、石製品2点、陶器7点が出土している。

(第14図)



図録番号	図録番号	遺構・層位	種別	形状	遺存度	寸法(cm)	重量(g)	器名	色澤			特徴	備考
									外	内	底		
第14図-1	学芸04-10	S R-2	須恵器	片断	---	---	---	---	灰	白	白	大川原?	
-2	学芸04-2	S R-2	須恵器	片断	---	---	---	---	灰	白	灰	外底一平打*** 内底一輪文***	
第14図-3	学芸05-6	S R-2	石	片断	64	43.3	8	17.8	褐色面				
-4	学芸05-7	S R-2	石	片断	64.5	39	5.5	16.8	褐色面				

第14図 SR2出土遺物

須恵器

- 1は、長頸瓶の底部である。福島県大戸窯に類例が求められ、時期は9世紀頃と考えられる。
2は、体部破片である。外面に平行タタキ痕、内面に無文オサエ痕が認められる。

石器

4はスクレーパーである。各測定値の最大値は長6.45cm、幅2.9cm、厚0.5cm、重10.8gである。石材は珪質頁岩である。

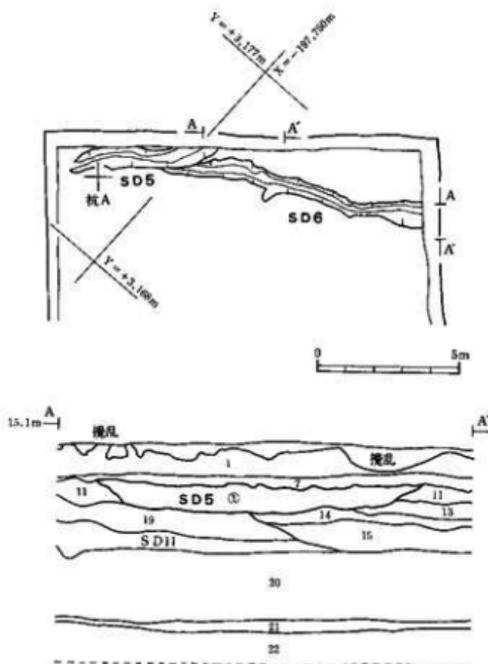
(3) 10層上面 (第15図)

5号溝跡-SD5-

I区に位置しているが、途中で検出できなくなり途切れる溝である。SD6を切っている。検出長約4.5m、幅70cm、深さ10cm、断面形は皿状である。堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

6号溝跡-SD6-

I区に位置し、やや直線的な溝であり、方向はN-40°-Wである。SD5に切られている。断面形は皿状で、深さは約15cmである。堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。



第15図 I区10層上面平面図

(4) 14・15層上面 (第17図)

28号溝跡-SD28-

〈遺構状況〉Ⅲ区に位置し、湾曲した溝である。検出長約12m、幅

1.1m、深さ10cm、断面形は皿状である。堆積土は1層である。

〈出土遺物〉堆積土中から須恵器が1点出土している。

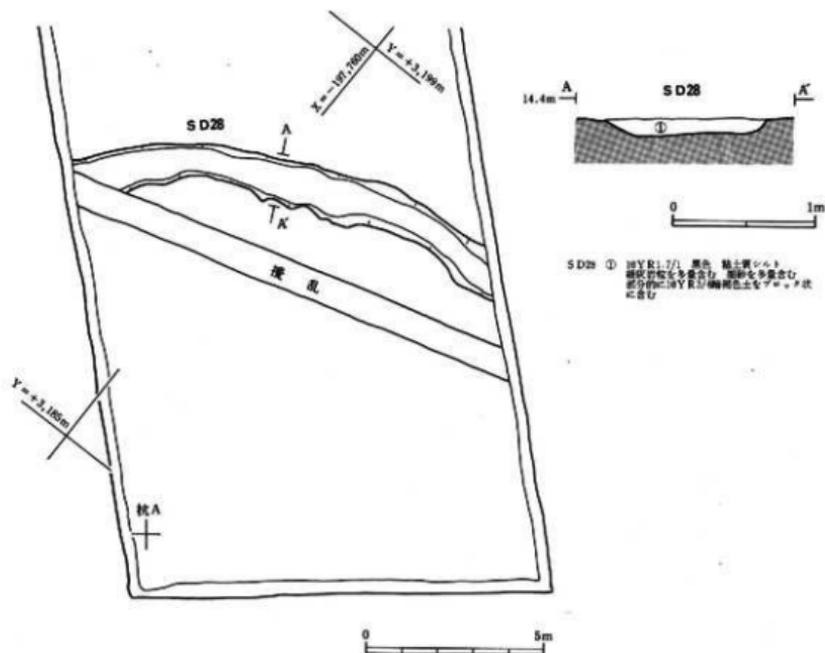
須恵器 (第16図)

器台の脚部と考えられる。調整は内外面ともロクロナデである。また、外面には隆帯が2条あり、これは周閉をくぼませることにより隆帯としていることが断面より観察できる。窯の特定はできなかったが在地のものである可能性が高い。時期は5世紀の後半頃に位置するものと考えられよう。



調査番号	調査地点	遺構・層位	種類	形状	遺存度	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	色		特徴
									内面	外面	
第16号	芋原4-3	S D-28	瓦片	筒台形	—	—	—	—	灰白・灰	灰白・灰	外壁にシラ・ナツ・緑帯・赤・門窓あり 内面にシラ・ナツ

第16図 S D 28出土遺物

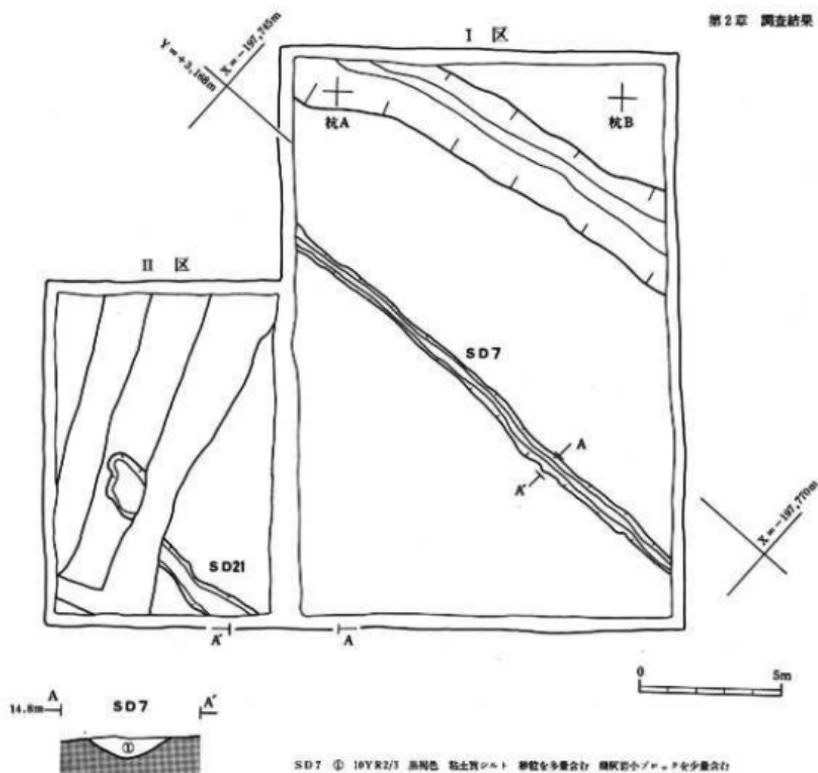


第17図 III区14・15層上層平面図, S D 28断面図

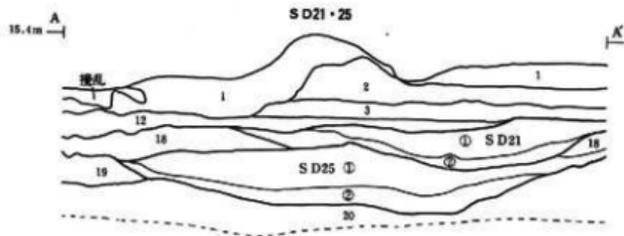
(5) 18層上面 (第18図)

7号溝跡-S D 7-

I区に位置し、直線的に延びる溝で、方向はほぼ真北である。検出長約18m、幅約60cm、深さ約15cm、断面形は皿状である。堆積土は1層である。遺物は、土師器片が2点出土している



SD7 ① 10YR2/3 黒褐色 粘土質シルト 砂粒を少量含む 腐敗不全ゾロニアを少量含む



SD21 ① 10YR5/4 紅褐色 腐粒 径1~5mmの小塊、腐敗不全ゾロニアを少量含む
 ② 10YR4/4 褐色 腐粒
 SD25 ① 7.5YR5/6 暗褐色 腐粒 径1~2mmの小塊、腐敗不全ゾロニアを少量含む
 ② 7.5YR3/6 暗褐色 腐粒 径1~2mmの小塊、腐敗不全ゾロニアを少量含む
 部分的に10YR3/3に近い黄褐色砂質シルトと互層になる



第18図 I・II区18層上面平面図，SD7・21・25断面図

が、細片であり図示できなかつた。

10号溝跡 - SD10-

I区に位置し、ほぼ直線的に延びる溝であり、方向はN-12°-Wである。検出長は約12m、幅は約3.5mである。遺物は、土師器片が3点出土しているが、細片であり図示できなかつた。SD10の下層にSD11が位置しており、SD11が埋没した跡の窪みを利用して作られたものと考えられる。

(6) 19層上面 (第20図)

8号溝跡 - SD8-

〈遺構状況〉I区に位置し、やや湾曲した溝である。検出長約13.5m、幅約1.2m、深さ10cm、断面形は逆台形であるが、底面は起伏が大きい。堆積土は1層である。

〈出土遺物〉遺物は堆積土中から須恵器片8点、土師器片55点、判別不明の土器片が多数出土している。土師器片は55点と多く出土しているが、細片が多くまた摩滅も著しいので復元・図化したのは1点だけである。

土師器 (第19図)

土師器は甕で、口縁部から体部にかけて約3/4遺存している。口縁部から頸部にかけて「く」字状にきつく外反し、口唇部は丸くおさまる。外面調整は口縁部はヨコナデ後ハケメで、体部はハケメである。内面調整はヨコナデ後ハケメである。時期は塩釜式期頃と考えられる。



図録番号	採取番号	産地・層位	器別	器種	高径比	口径 (cm)	底径 (cm)	胴径 (cm)	色	調整	特徴
第19図	第78回-1	SD-8	土師器	甕	0.63/1	19.2			褐色	ヨコナデ	口縁部はヨコナデ後ハケメ、体部はハケメ

第19図 SD8出土遺物

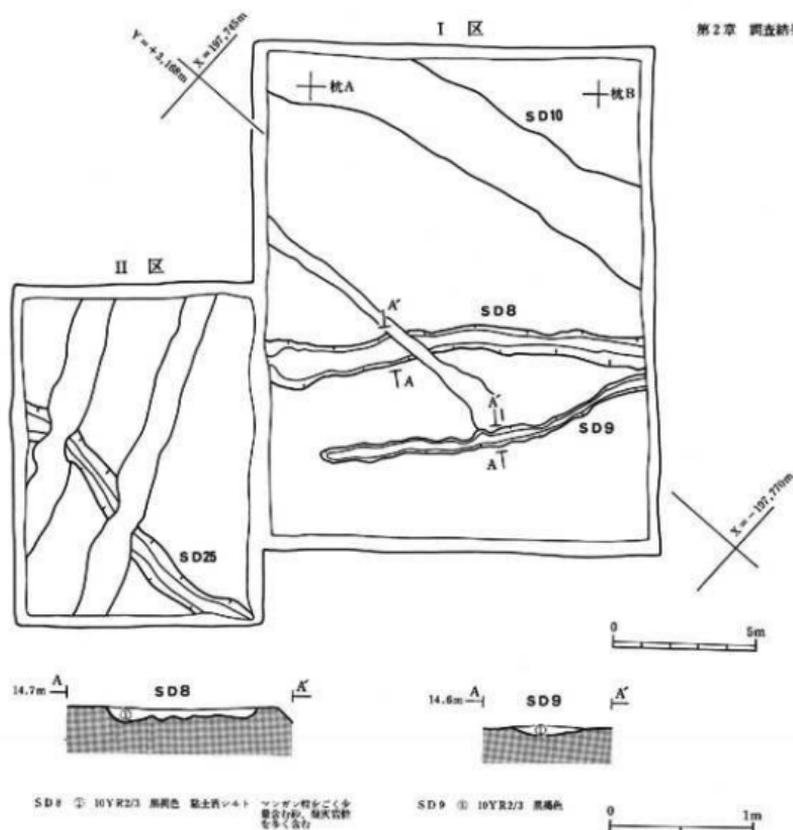
9号溝跡 - SD9-

I区に位置し、やや湾曲し途中で途切れる溝である。方向はN-48°-Wで、検出長約11.5m、幅約50cm、深さ約7cm、断面形は皿状である。堆積土は1層である。遺物は出土しなかつた。

(7) 20層上面 (第21図)

11号溝跡 - SD11-

I区に位置し、直線的に延びる溝で、方向はN-12°-Wである。SD12を切っている。検



第20図 I・II区19層上面平面図, SD8・9断面図

出長約12.4m、幅3m、深さ35cm、断面形は皿状である。堆積土は9層で自然堆積状況を呈している。遺物は、土師器片が3点出土している。

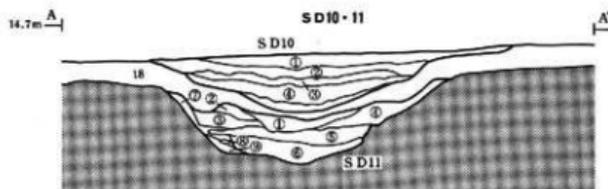
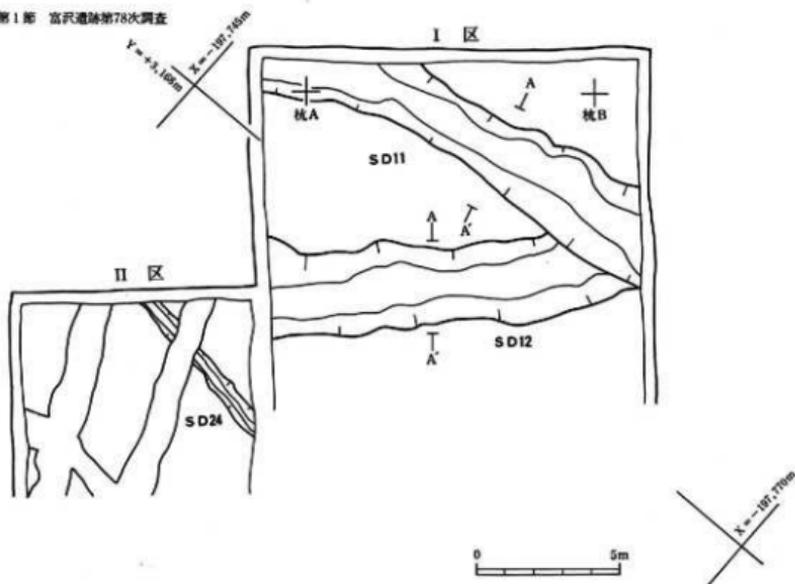
12号溝跡-SD12-

I区に位置し、やや湾曲した溝で、方向はN-45°-Wである。SD11に切られている。検出長約12m、幅約2.7m、深さ70cm、断面形は逆台形である。堆積土は5層で、自然堆積状況を呈している。遺物は出土しなかった。

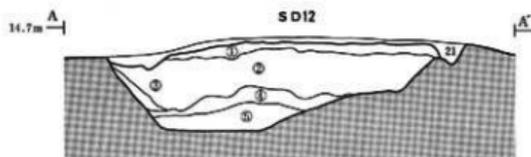
24号溝跡-SD24-

II区に位置し、ほぼ直線的に延びる溝で、方向はN-7°-Eであるが、I区では検出されていない。検出長約5m、幅約70cmである。遺物は出土しなかった。

第1期 富沢遺跡第78次調査



- | | | | | | |
|------|---|----------|------|--------|--------------------------------|
| SD10 | ① | 10YR2/3 | 暗褐色 | シルト質粘土 | 腐炭質、植物を含む。酸化鉄、マンガン鉄を少量含む |
| | ② | 10YR2/3 | 暗褐色 | 粘土 | 腐炭、腐炭質を含む。酸化鉄、マンガン鉄を少量含む |
| | ③ | 10YR2/3 | 暗褐色 | 粘土 | 腐炭質、マンガン鉄を少量含む |
| | ④ | 10YR5/2 | 灰黄褐色 | 粘土 | 腐炭質、マンガン鉄を少量含む |
| | ⑤ | 10YR2/1 | 黒色 | 粘土 | |
| | ⑥ | 10YR2/2 | 黒色 | シルト | 6.5~10cmの腐炭質ブロックを含む。植物遺体を少量含む |
| | ⑦ | 10YR2/3 | 暗褐色 | シルト | 腐炭を少量含む |
| | ⑧ | 10YR2/2 | 黒色 | 砂質シルト | 植物遺体を包含する |
| | ⑨ | 10YR2/2 | 黒色 | シルト | 6.5~10cmの腐炭質ブロックを若干含む |
| | ⑩ | 10YR5/2 | 灰黄褐色 | 砂 | |
| | ⑪ | 10YR5/2 | 灰黄褐色 | 砂 | |
| | ⑫ | 10YR2/3 | 暗褐色 | 砂質シルト | 6.1~5cmの塊、6.1~3cmの腐炭質ブロックを少量含む |
| | ⑬ | 10YR2/2 | 黒色 | シルト | 腐炭質を若干含む |
| | ⑭ | 2.5GY5/1 | 灰褐色 | シルト | |



- | | | | | | |
|------|---|----------|-----|----|----------------------|
| SD12 | ① | 10YR6/4 | 紅褐色 | 砂 | 10YR3/4暗褐色粘土ブロックを含む |
| | ② | 10YR6/6 | 暗褐色 | 粘土 | 6.1~2cmの腐炭質ブロックを少量含む |
| | ③ | 10YR5/6 | 黄褐色 | 砂 | 6.1~3cmの腐炭質ブロックを少量含む |
| | ④ | 10YR6/4 | 紅褐色 | 砂 | 6.1~2cmの腐炭質ブロックを少量含む |
| | ⑤ | 7.5YR5/5 | 明褐色 | 砂 | 6.1~3cmの腐炭質ブロックを少量含む |

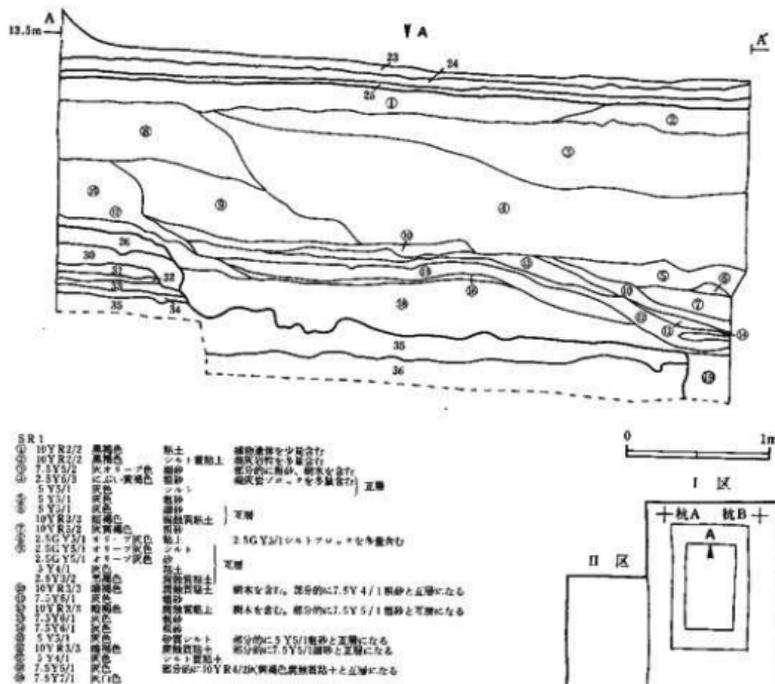
0 1m

第21図 I・II区20層上面平面図、SD10・11・12断面図

(8) 25層上面 (第22図)

1号河川跡-SR1-

I区に位置している。堆積土は19層確認されている。土質は基本的にはシルトから細砂であり、所々に腐食した植物遺体を含む層がみられる。また、10層・12層からは、樹木が検出されており放射性炭素による年代測定を行っている。その結果、B. P. 4540±100という値を得ていることから縄文時代後期頃の河川跡と考えられる (第3章第2節参照)。



第22図 I区1号河川跡断面図

(9) その他の出土遺物

基本層2～24層から土師器片、須恵器片、陶・磁器片、木製品、石製品等が200点余り出土しており、特にI・II区は後世の攪乱が著しく、接合、復元できた遺物の層位はまちまちである。そのうち図化できたものは以下のものである。(第23～25図)

木製品 (第23図)

杭である。上部を腐食し、縦方向に約半分が欠損している。III区9層上面から打ち込まれた

ものと考えられるが、上部に腐食がみられるので打ち込み層位は断定できない。9層は水田跡の可能性が考えられるので、水田耕作に関するものとも考えられるが、これのみの出土であるので詳細は不明である。

石器・石製品（第24図1・2）

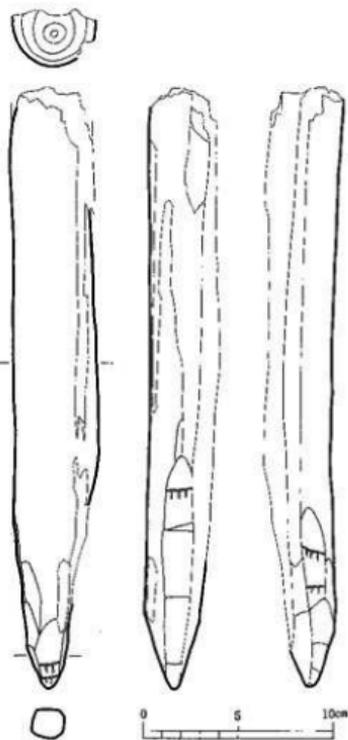
1は石匙である。両縁辺に微細剥離痕がみられる。石質は珪質頁岩である。2は、4面に擦痕が認められるので砥石と考えられる。

土師器（第24図3）

甕の口縁部である。調整は外面ロクロ、内面回転？ヘラミガキ・黒色処理である。時期は表杉ノ入式期頃と考えられる。

須恵器（第25図1～5）

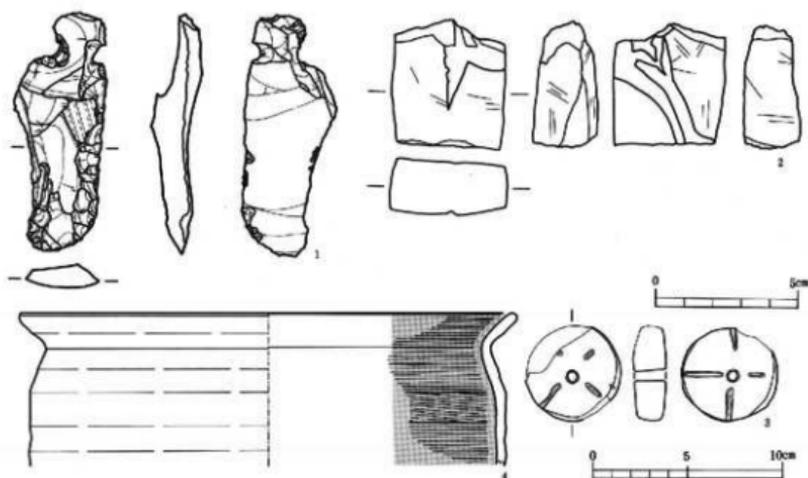
2は、甕の体部から口縁部である。体部から頸部にかけて「く」字状に外反し、口縁部にかけてさらに強く外反する。口縁部端部は丸く処理され、その下に張り付け隆帯を1条施す。頸部には波状沈線が2条施され、また頸部中央には凸線が見られ、これは上下をくぼませることによって作り出されている。体部には平行タタキが施され、その



No.	検出番号	図名番号	出土遺構・層位	種別	材質	原料	長さ	幅	重量	定規加工	尺取加工	備考
3	第27回	46-63-11	9層	鉢	—	丸光材	31.9cm	4.3cm	1.57kg			自然図にづく・相副成残部・約半分こぼれる

第23図 出土遺物①

後すり消されている。内面には全面にすり消した痕がみられるが、所々に無文あるいは同心円状のあて具を当てた痕跡が認められるところもある。3は、甕の体部から頸部である。口縁部が欠損しているが2と同じような形態を示すものと思われる。頸部に波状沈線が施され、体部は平行タタキ後すり消されている。4は、甕の体部から口縁部で、体部から頸部にかけて「く」字状に外反し、口縁部ではさらに強く外反している。口縁部端部に張り付け隆帯が1条施されている。体部外面に平行タタキ痕が認められる。胎土中に石英粒が多くみられる。



発掘番号	図録番号	遺物・部位	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	石質	備考						
第24回-1	字表55-5	11層	63	26	9.7	33	片貝質物	貝殻辺の骨髄刺痕あり						
-2	字表55-8	1層	41.5	38.5	16	20.3	磁器焼灰管	4面に施溝						
発掘番号	図録番号	遺物・部位	種類	器種	産存地	口径 mm	底径 mm	高さ mm	厚さ mm	内径 mm	外径 mm	重量 g	石質	備考
第24回-3	字表54-4	1層	土製物	壺	口縁約1/6	(16.2)				内径	外径			内径-口径 内径-口径(約) 黒色粘土
発掘番号	図録番号	遺物・部位	種類	器種	産存地	口径 mm	底径 mm	高さ mm	厚さ mm	内径 mm	外径 mm	重量 g	石質	備考
第24回-4	字表55-19	13層		物断草		5.1		1.9				0.6		

第24回 出土遺物②

4. 遺構の所属年代とまとめ

1. 検出された遺構は3層上面で、溝跡2条・土坑7基、5層上面で、溝跡7条・土坑2基・河川跡1条、10層上面で、溝跡2条、14・15層上面で溝跡1条、18層上面で溝跡2条、19層上面で溝跡2条、20層上面で、溝跡3条、25層上面で河川跡1条である。今回の調査では、現代のものを除く明確な水田跡は検出されなかったが、土層観察により3・5・6・7・9・15・16層が水田耕作土である可能性が高く、また、その後のプラント・オパール分析により14層でも水田耕作が行われた可能性が指摘されている（第3章第3節参照）。各遺構の所属年代であるが、前述したように後世の擾乱が大きく、遺構に伴う遺物も少ないことや、当調査地点周辺での調査例が少ないことなどから不確定な要素が大きく決定が困難である。しかし、これらの内、遺構に伴って遺物が出土し年代が確定できるものや、灰白色火山灰が検出できる層などから大まかに想定すると以下のようになる。

3層-江戸時代後半以降

5層-中世から近世

7層—平安時代頃から中世

19層—古墳時代前期（塩釜式期）頃

25層—縄文時代後期

2. 3層上面で検出した、SD3・SD17は、ほぼ平行し、また、どちらも作り直していることから水田に伴う水路、あるいは何らかの区画をしていた水路の可能性が考えられる。
3. 5層上面で検出された溝跡は、平行するものが多く水田に伴う水路の可能性や、土地を区画するための溝などの可能性も考えられるが、途中で確認できなくなるものや途切れるものがあり、また、底面も凹凸が多く傾斜が確認できないなど不確定の部分が多いのでこれらの溝跡の性格については可能性を指摘するにとどめたい。
4. 18層上面で検出されたSD10と19層上面で検出されたSD11は、SD11が埋没した跡の窪みを利用してSD10が作られており、継続して利用されたものと考えられる。その、性格としては水路の可能性が考えられる。
5. 今回の調査で検出された溝跡のうち、SD3・SD17やSD10・SD11のように同じところでの作り替えが行われており、土地利用の上で何らかの企画性があったと考えることができるが、周辺での調査例が少ないことから断定はできない。今後、調査例が増えることにより、全体的な土地利用の仕方が解明されてこよう。
6. 今回の調査では須恵器が比較的多く出土しているが、遺構に明確に伴ったものではない^(註1)。しかし、復元できた壺の器形の特徴から考えると5世紀中頃から後半に位置するものと思われる（TK216前後、中村編年I形式2段階～3段階頃）。富沢地区でいままで出土した須恵器の中では、近接する泉崎浦遺跡第4次調査（主浜：1988）で出土した6世紀初頃から前半頃とされている杯が最も古く^(註2)、今回出土した遺物は、それよりも古い時期のものと言えよう。このように古い段階の須恵器は、周辺の裏町古墳・大野田古墳群で出土しているが、しかし、出土層位が安定したものではないので今回は資料の紹介にとどめ、関連については今後の資料の増加を待ちたい。

(註1) 須恵器は、基本層1層～20層から出土したものや、溝の堆積土から出土したものが接合しており、本来の所属層位は不明である。

(註2) 報文中では5世紀代に遡る可能性も指摘されている。

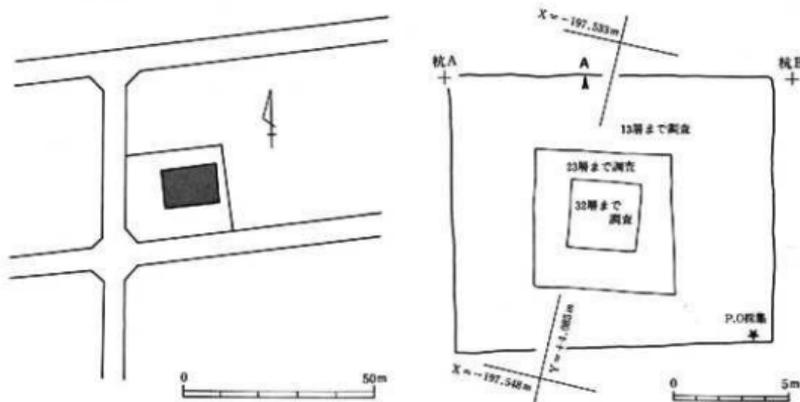
第2節 富沢遺跡第80次調査

1. 調査方法

調査区の設定面積は約 $14 \times 12\text{m}$ (168m^2)である。調査は盛土及び直下の1層(旧水田耕作土)上面まで重機で排除し、以下は人力で行った。なお、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。9層までは調査区全面の精査を行い10層以下は試掘区を設けて調査を行った。遺構の測量は、任意に設定した杭A・Bの平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺構内の正確な位置を把握している(杭A: $X = -197,536.30\text{m}$ $Y = +4,077.58\text{m}$ 杭B: $X = -197,532.86\text{m}$ $Y = +4,092.57\text{m}$)。

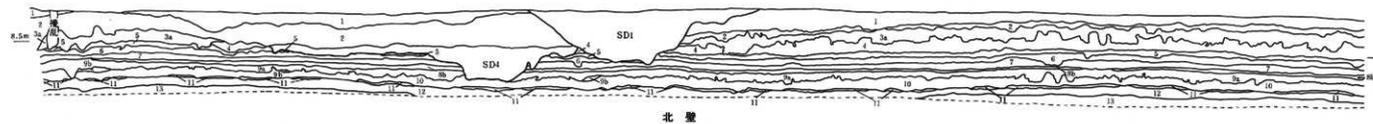
2. 基本層序

今回の調査では盛土下に大別32層、細別36層が確認された。各層の土質は、粘土であり特に6層以下は泥炭質の粘土である。現代のものをのぞく水田土壌は9 a層である。水田土壌の可能性のある層は、2層・3 a層・3 b層・8 b層である。2層中に灰白色火山灰が検出されているが、本来は下層にあったものが水田耕作によって巻き上げられたものと考えられる。全体的な層の傾きは南東方向へ緩やかに下り傾斜が認められる。(約 $8\text{cm}/10\text{m}$)なお、当調査区は第38次調査区、第54次調査区と隣接しており基本層序に対応関係が認められる。対応関係については後述する。

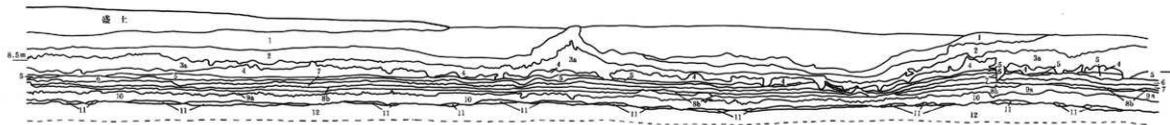


第26図 調査区位置図・設定図

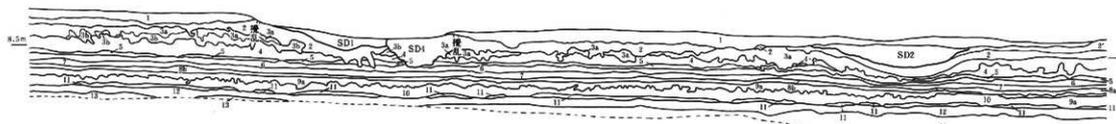
第2節 富沢遺跡層和次河表



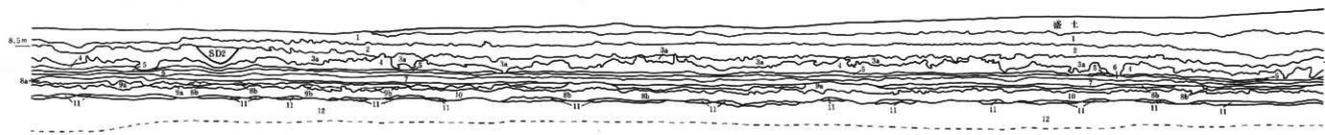
北壁



西壁



東壁



南壁

第28図 調査区断面図(北・西・東・南壁)



3. 検出遺構と出土遺物

(1) 2層上面

2号溝跡-SD2-(第29図・写真15)

北から南方向に直線的に延びる溝跡である。上端幅は25~70cm、下端幅15~30cm、深さは約20cmである。底面は平坦で南方向へ緩やかに傾斜している。堆積土は1層である。遺物の出土はみられなかった。

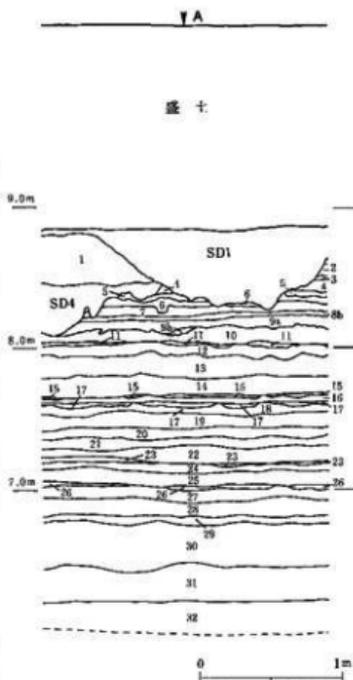
3号溝跡-SD3-(第29図)

西から東方向へ延びる溝跡である。上層の水田耕作によって所々依存状況が悪く途切れた状態で検出されている。上端幅は25~40cm、下端幅10~20cm、深さは約10cmである。底面には凸凹がみられ傾斜方向は不明である。堆積土は1層である。遺物の出土はみられなかった。

(2) 3層上面

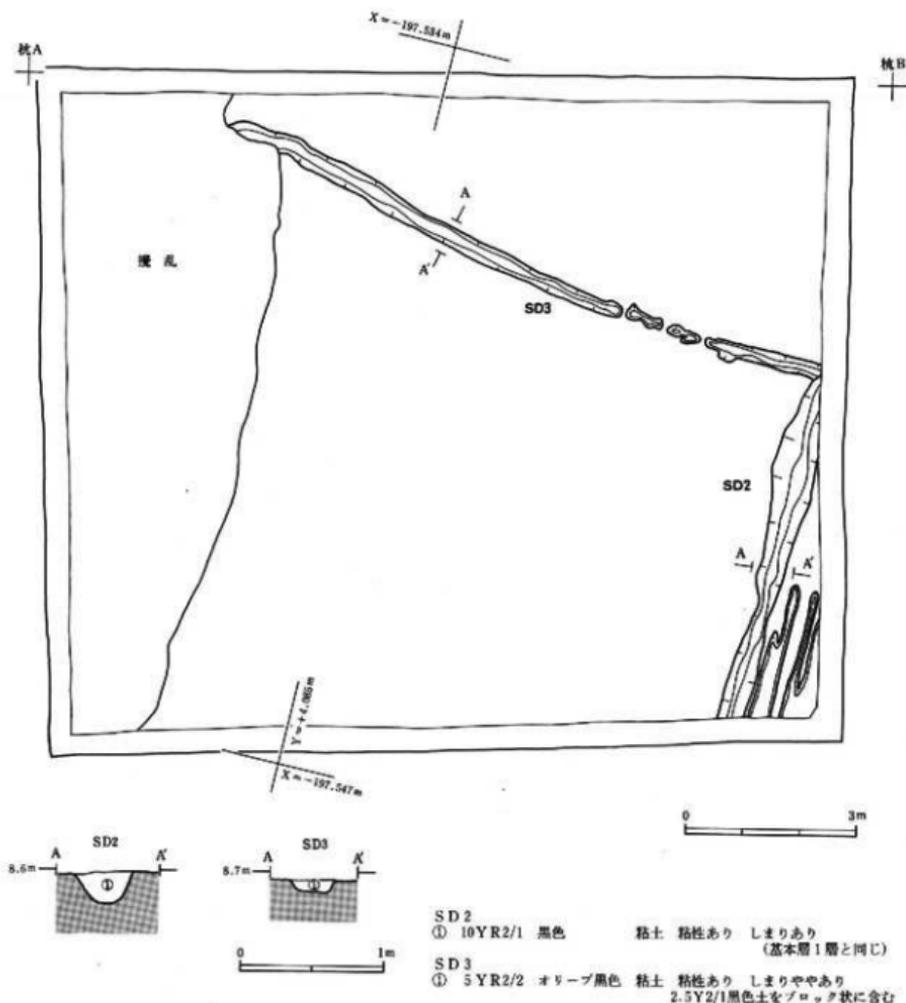
4号溝跡-SD4-(第30図・写真15)

〈遺構状況〉西から東方向へ直線的に延びる溝跡で



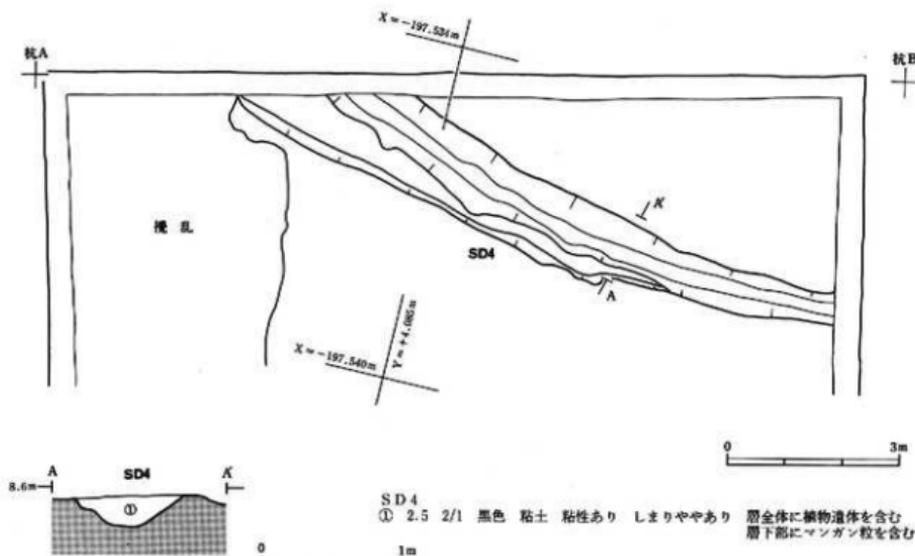
第27図 基本層序

層序	色	質	土質	厚	備考	発見品	遺人物	注目土器	備考
1	汎褐色	2.5Y2/2	粘土	15	赤褐色の溝跡	赤分製の雑物遺体	○	白土時代土	
2	赤アープ黄	5Y3/1	粘土	11	赤土状	赤分製の雑物遺体 灰白色土片	○		
3a	黄褐色	10Y3/2	粘土	15		赤分製の雑物遺体・4層セブ ム・ア状の土片	?		
3b	黄褐色	10Y3/2	粘土	5		4層セブム・ア状の土片	?		記号の分布
4	にんい・黄褐色	10Y3/4	粘土	15	赤土状				
5	黄褐色	10Y3/3	赤土	5	赤土状	雑物遺体			
6	汎褐色	10Y3/2	赤分製粘土	5		赤分製の雑物遺体 赤分製の雑物遺体			
7	黄	10Y3/1	赤分製粘土	5					
8	アープ黄	5Y2/1	粘土	5		雑物遺体	?		
8b	黄	10Y3/2	赤分製粘土	4		雑物遺体			5寸・瓦層
9	赤アープ黄	5Y2/2	粘土	12		雑物遺体・9層セブム・ア状	○		分層面に
9b	赤アープ黄	5Y2/2	粘土	4		雑物遺体			5寸・瓦層
10	黄	10Y3/1	赤分製粘土	12		赤分製の雑物遺体			
11	にんい・黄褐色	10Y3/3	赤分製粘土	3					
12	黄	10Y3/1	赤分製粘土	10		赤分製の雑物遺体			
13	黄	10Y3/2	赤分製粘土	12		赤分製の雑物遺体			
14	黄	10Y3/1	赤分製粘土	13					
15	黄褐色	10Y3/2	粘土	3		赤分製の雑物遺体			
16	黄	10Y3/1	赤分製粘土	6					
17	黄褐色	2.5Y2/2	粘土	3		赤分製の雑物遺体			
18	黄	2.5Y2/1	赤分製粘土	8					5.5Y3/2を赤分面に埋め
19	黄褐色	2.5Y2/1	赤分製粘土	10		雑物遺体			
20	黄	5Y2/1	赤分製粘土	20					
21	黄	10Y3/1	赤分製粘土	8					
22	赤アープ黄	5Y3/2	粘土	8		赤分製の雑物遺体			
23	アープ黄	5Y2/2	粘土	2		赤分製の雑物遺体			
24	黄	10Y3/2	赤分製粘土	6					5寸・瓦層
25	黄	10Y3/1	赤分製粘土	20					
26	にんい・黄褐色	10Y3/3	粘土	3		赤分製の雑物遺体			
27	黄	2.5Y2/1	赤分製粘土	2					層下面に10Y3/2を5寸・瓦層
28	黄	10Y3/1	赤分製粘土	15					10Y3/2の5寸・瓦層・赤分製の雑物・5寸・瓦層
29	黄褐色	10Y3/2	赤分製粘土	3					層下面に10Y3/2を埋め
30	黄	10Y3/1	赤分製粘土	30					
31	黄	5Y2/1	赤分製粘土	25					層下面に5寸・瓦層
32	黄褐色	2.5Y2/1	赤分製粘土	4					



第29図 2層上面平面図・SD2・3断面図

ある。上端幅は0.8~1.6m、下端幅20~35cm、深さは20cmである。底面は平坦で西方向へ緩やかに傾斜している。なお、SD4の上層には1層段階の溝跡が確認されている。



第30図 3層上面平面図・SD4断面図

〈出土遺物〉堆積土は1層である。遺物は陶磁器、種子等が出土しているが、図示できたのは1点だけである。

陶器 (第32図・写真67-1)

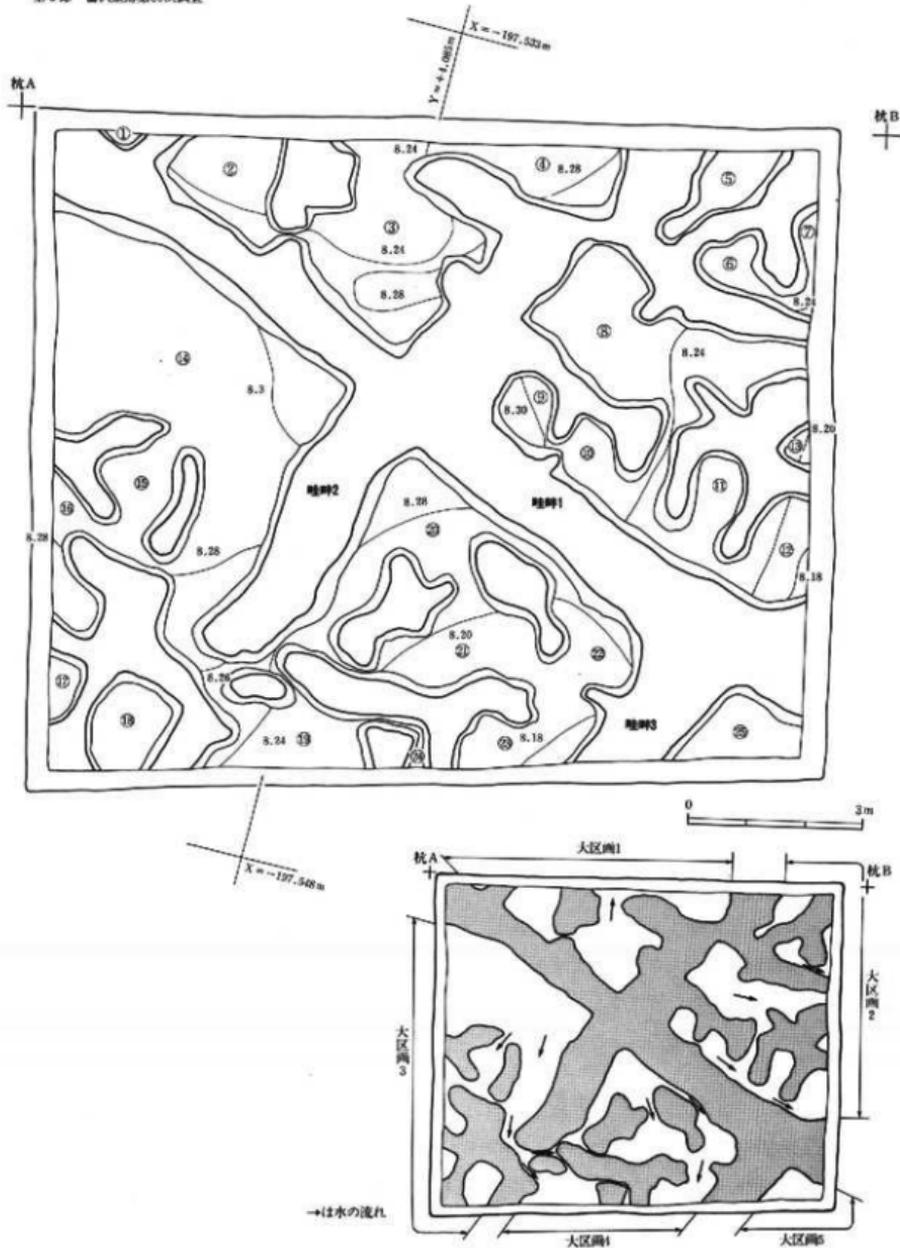
碗の底部であり、漆が断面に付着している。産地は唐津が考えられ、長石釉が施されている。時期は16世紀末から17世紀初頭の間の頃のものと思われる。

(3) 9層上面

9層水田跡 (第31図・写真17・18)

〈遺構状況〉9層上面で小区画に区画される水田跡を全面で検出した。水田跡は大区画を形成する大畦畔3条と、さらに大区画を細かく分割し、小区画を形成する小畦畔、水口等から構成されている。畦畔は直上の8a層下面で検出しているが、遺存状況に違いが認められ、一部良好でないところがある。遺物は大畦畔1中より樹木が出土しているが、他に遺物の出土はみられなかった。

〈耕作土〉耕作土は大畦畔1を境として分解の度合いに違いが認められ北側(大区画1・2)では分解が進んでおり、南側(大区画3~5)ではあまり分解が進まず層中に9b層、10層をブロック状に含んでいる。耕作土は主に直下の自然堆積層である9b層、10層を攪拌する事に



第31図 9層水田跡平面図

区画名	面積 (㎡)	標高 (m)	上面高低差 (m)	水口	備考
①	0.14	8.290~8.295	0.5	不明	一部検出
②	5.94	8.235~8.265	3.0	1	一部検出
③	6.05	8.225~8.280	5.5	2	全面検出
④	2.03	8.245~8.295	5.0	1?	一部検出
⑤	1.26	8.300~8.325	2.5	不明	一部検出
⑥	0.78	8.255~8.270	1.5	1	全面検出
⑦	0.47	8.255~8.265	1.0	1?	一部検出
⑧	6.46	8.200~8.275	7.5	2?	全面検出
⑨	0.85	8.275~8.265	1.0	1	全面検出
⑩	1.89	8.225~8.280	6.5	3	全面検出
⑪	1.45	8.205~8.220	1.5	2	全面検出
⑫	1.78	8.195~8.210	1.5	1?	一部検出
⑬	0.22	8.240~8.290	5.0	不明	一部検出
⑭	17.7	8.255~8.285	3.0	3?	一部検出
⑮	1.91	8.250~8.280	2.5	3	全面検出
⑯	1.35	8.250~8.280	2.5	1?	一部検出
⑰	0.44	8.250~8.255	0.5	不明	一部検出
⑱	1.64	8.240~8.260	2.0	不明	一部検出
⑲	2.43	8.200~8.225	2.5	3?	一部検出
⑳	3.89	8.210~8.240	3.0	3	全面検出
㉑	3.05	8.190~8.210	2.0	3	全面検出
㉒	1.83	8.185~8.200	1.5	2	全面検出
㉓	2.48	8.175~8.195	2.0	2?	一部検出
㉔	0.09	8.150~8.160	1.0	1?	一部検出
㉕	1.65	8.140~8.155	1.0	不明	一部検出

第4表 9層水田区画計測表

よって形成されたものと考えられる。耕作土の厚さは2~14cmであるが、大畦畔1の北側部分では平均9cm、南側部分では平均5cmであり分解度の差と同様に耕作深度にも違いが認められる。耕作土の下面は起伏が著しい。なお、大畦畔1の直下には擬似畦畔Bが認められ、1が安定した継続的な畦畔であったため、この部分だけが耕作により攪乱を免れて形成されたものと理解される。

〈畦畔の配列〉大畦畔1は直線的に延びており、方向はN-66°-Wで、調査区内での全体的な地形の傾斜とはほぼ直行する。大畦畔2・3は大畦畔1と直行方向(N-21°~23°-E)に延びている。大畦畔の交点は2箇所認められ、「+」字状、「T」字状のものがある。区画毎の小畦畔は水口によって断片的であったり、やや湾曲したものがみられるが、ほぼいずれかの大畦畔の方向をとっており連続性を示している。大畦畔に直行方向より平行方向に延びる畦畔のほうがより連続性を示している。

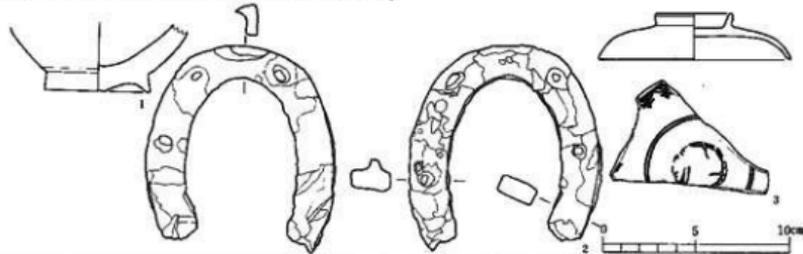
〈畦畔の規模〉畦畔は耕作土と同じ9a層を盛り上げて作られている。下端幅は大畦畔では160cm前後であり、耕作土上面からの高さは3~5cmである。小畦畔は画一性を欠くが、70cm前後のものが多くみられる。耕作土上面からの高さは約2cmである。

〈水田1区画の形状と規模〉大畦畔によって区画される水田区画が5区画検出されている。(大区画1～5)大区画はいずれも区画全体が検出されていないので明確な形状、規模は不明である。しかし、大畦畔の検出状況からみると大区画1・4では短辺の全長がほぼ検出できており、北西から南東を短辺(約5m)とする短冊形を基調とした区画の存在が想定できる。小区画は全部で25区画検出されているが、整形のものは少なく方形、三角形を基調とするものが多くみられる。(このうち全面が検出できたものは9区画であった。大1-1、大2-4、大3-1、大4-3、大5-0)1区画の面積には17㎡から1㎡を切るものまであり区画に規格性がみられない。

〈水口〉水口は大畦畔、小畦畔とも認められた。そのうち大畦畔2上で認められたものは大区画間のものと考えられ、その他のものは小畦畔間のものと考えられる。水口底面の標高は耕作土上面の高さとほぼ同じか、やや低い。設けられた水口は取り囲む畦畔の1箇所から3箇所認められるものがある。大区画2で大畦畔1と北側で接する畦畔との間には1方向へ水口が連続する傾向がみられるが、他の部分では明確な連続性は認められなかった。

(4) その他の出土遺物(第32図・写真67)

基本層2・3層から陶磁器片、土師質土器、鉄製品、銅製品等が出土している。このうち図示できたのは2点のみである。2は、蹄鉄である。接地面に釘打ち溝がないものである。3は、肥前産の蓋である。外面は菊文、内面は見込みに松竹梅文が染め付けられている。時期は明治以降頃の所産であろう。図示はできなかったが、そのほかに産地・年代などが確定できた陶磁器は5点である。2層からは、相馬産の灰釉・白濁釉碗が2点で、時期は18世紀後半頃のものであろう。3層からは、肥前産の染め付けのとっくり、相馬産白濁釉皿、瀬戸・美濃灰釉皿で、時期はいずれも18世紀後半頃のものであろう。



調査番号	図録番号	遺構・層位	種別	形状	寸法	口径	底径	高さ	重量		材質	備考
									質量	体積		
第32図-1	写真67-1	S層-4	陶器	碗	1/2	—	5.6	—	—	—	—	備註: 18世紀末~17世紀初、盛行器
調査番号	図録番号	遺構・層位	種別	形状	長さ	幅	厚さ	高さ	質量	体積	材質	備考
第32図-2	写真67-4	2層	鉄製品	蹄鉄	11.1	10.2	1.0 (平均厚さ)	—	180	—	—	備註なし
調査番号	図録番号	遺構・層位	種別	形状	寸法	口径	底径	高さ	質量	体積	材質	備考
第32図-3	写真67-2	2層	陶器	蓋	3/5	10.0	—	2.5 (平均高さ)	—	—	—	肥前、明治以降、全径(内径-見込、内径-見込除く)

第32図 出土遺物

4. 遺構の所属年代とまとめ

1. 今回検出された遺構は9層水田跡、SD 2・3・4である。また、水田土壌の可能性のある層としては、2・3 a・3 b・8 b層があげられ、SD 4は3層段階の水路、SD 2・3は2層段階の水路の可能性が考えられる。SD 4とほぼ流路を同じくして、1層段階の水路が確認されており、継続的に利用されていたものと考えられる。
2. 検出遺構と各層の所属年代であるが、今回の調査では時期を決定する資料に乏しく、層位の対応が可能である隣接の第38次調査（渡部：1989）・第54次調査（中富：1990）の結果を踏まえれば、以下のような所属年代の想定が可能であろう。
 - ・ 9層-弥生時代（樹形凹式期～十三塚式期）
 - ・ 3層-近世
 - ・ 2層-近世～現代以前
3. 検出された9層水田跡では、大畦畔3条と区画を細く区切る小畦畔とこれらによって区画される小区画の水田が25区画確認された（一部検出も含む。）。このような小区画の水田は、周閉の調査（富沢28・29・46・53次調査）でも多く検出されており、富沢地区（富沢遺跡北部A地区）でのこの時期（樹形凹式期～十三塚式）の特徴的な水田形態といえよう。また、大畦畔1を境として耕作土の分解の違いが見られる。これは、耕作深度あるいは耕作回数との差異と考えることもでき、同様に耕作土の分解の違いの認められる水田跡は、でも検出されている。しかし、小区画水田が検出された地点全てがこのような状態ではないので、どのような原因が考えられるかについては不明であり今後の調査において検証されていくことであろう。

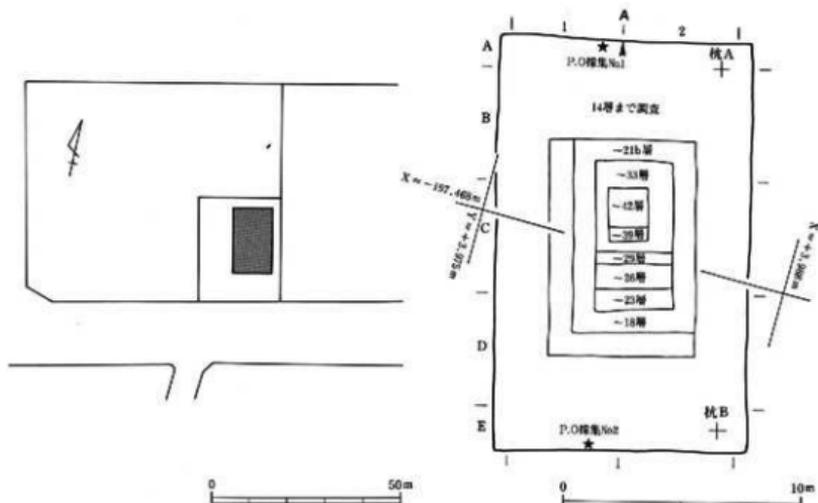
第3節 富沢遺跡第81次調査

1. 調査方法

調査区の設定面積は約 $17 \times 10\text{m}$ (177 m^2)である。調査は、盛土及び直下の1層(旧水田耕作土)下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けている。調査は14層上面までは、調査区全面の精査を実施し、14層以下は、約 $9 \times 6\text{m}$ の試掘区を設けて掘り下げた(最下層面では約 $1.6 \times 1.6\text{m}$)。遺構の測量は、任意に設定した $5 \times 5\text{m}$ グリッド(南北軸A~E、東西軸1~2)を基準として実施した。なお、グリッド基準杭(杭A・B)の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している(杭A : X = -197459.676m、Y = +3983.081m 杭B : X = -197474.217m、Y = +3986.816m)。

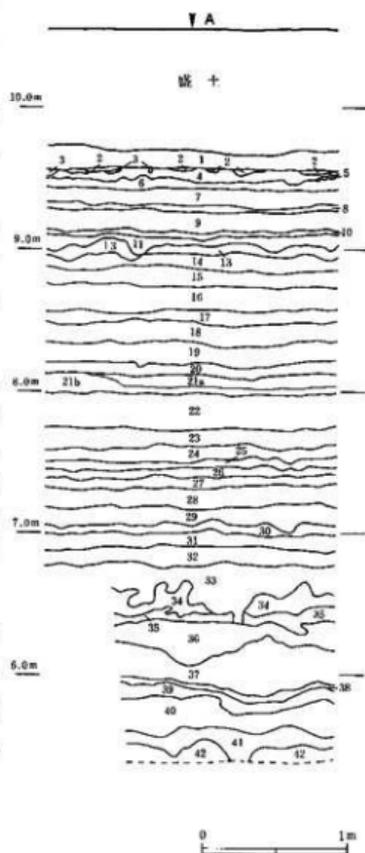
2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に大別42層、細別では43層が確認された。各層の土質は、5層までが粘土、6層から22層までは泥炭土あるいは泥炭質粘土、23層から31層までは粘土、32層から40



第33図 調査区位置図・設定図

層までは砂層を介する粘土、41層以下は砂質シルト及び砂となる。34層以下の各層は、堅くしまっており、特に35～39層までの各層では著しい。グライ化は、32層以下から漸時進み、33層以下では顕著である。3・4・30層からは、火山灰が検出されている。この内3・4層中のものは灰白色火山灰である。3層中の火山灰は、4層中に入っていたものが、後の3層の攪乱により3層中に巻き上げられたものである。また、30層中のものは、第28次調査29層中検出のものと同--のものと考えられる。39層からは、腐植した小枝等の樹木片が少量出土した。この層は第30次調査25・26層に対応する可能性がある。現代のものを除く明確な水田土壌は3・4・5・11層の各層であるが、2層も水田土壌の可能性はある。遺物出土層は1・2・3・4・5・8・33層である。各層の傾きとしては、1～14層までは南西・北東方向へのごく緩やかな下り傾斜と東・北西方向の緩やかな上り傾斜を示す。15層以下では調査区が狭く全体的な傾向性はつかめないが、ほぼ水平である。ただし、34層以下では層の起伏が著しい。なお、当調査区の基本層序の内、1～14層の各層は、富沢遺跡北部A地区基本層序(佐藤：1992)と対応関係が認められる。



第34図 基本層序

3. 検出遺構と出土遺物

3層・4層・5層・11層で水田跡が検出された。ただし、3・5層に関しては耕作土のみの検出である。また、4層上面では土坑1基(SK1)、7層上面では溝跡1条(SD1)、14層上面では樹木片の集中が1箇所検出された。

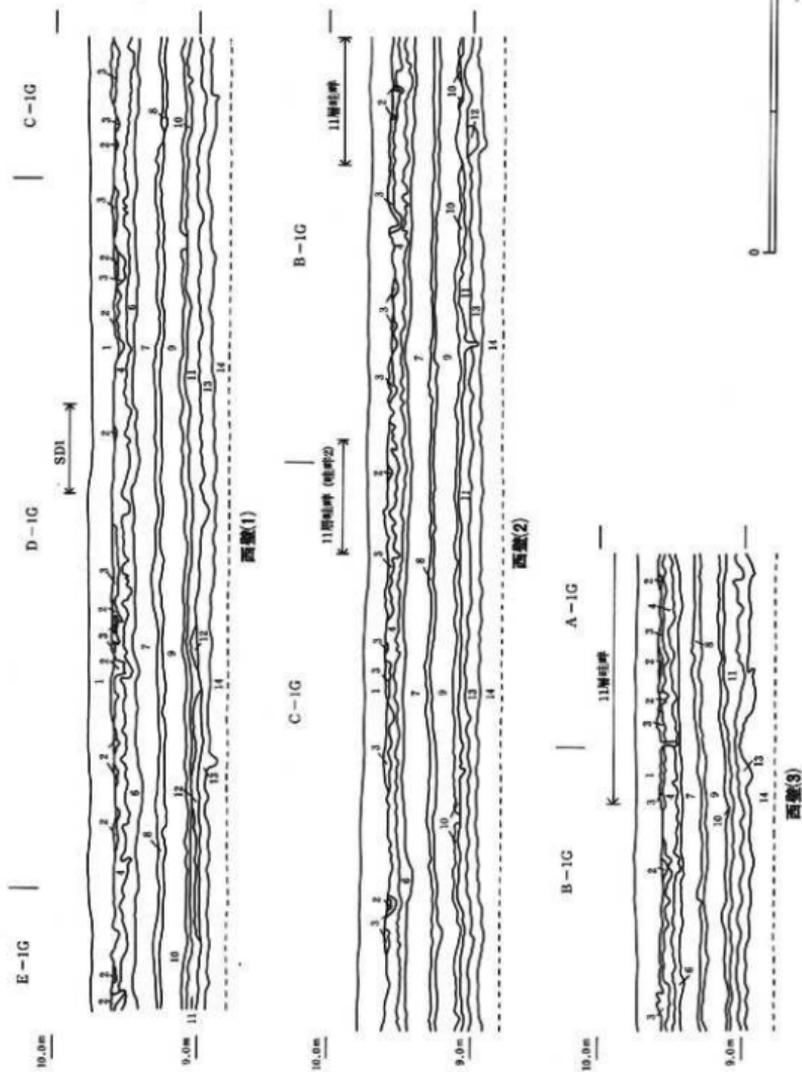
(1) 4層上面

1号土坑-SK1-(第38・40・写真20)

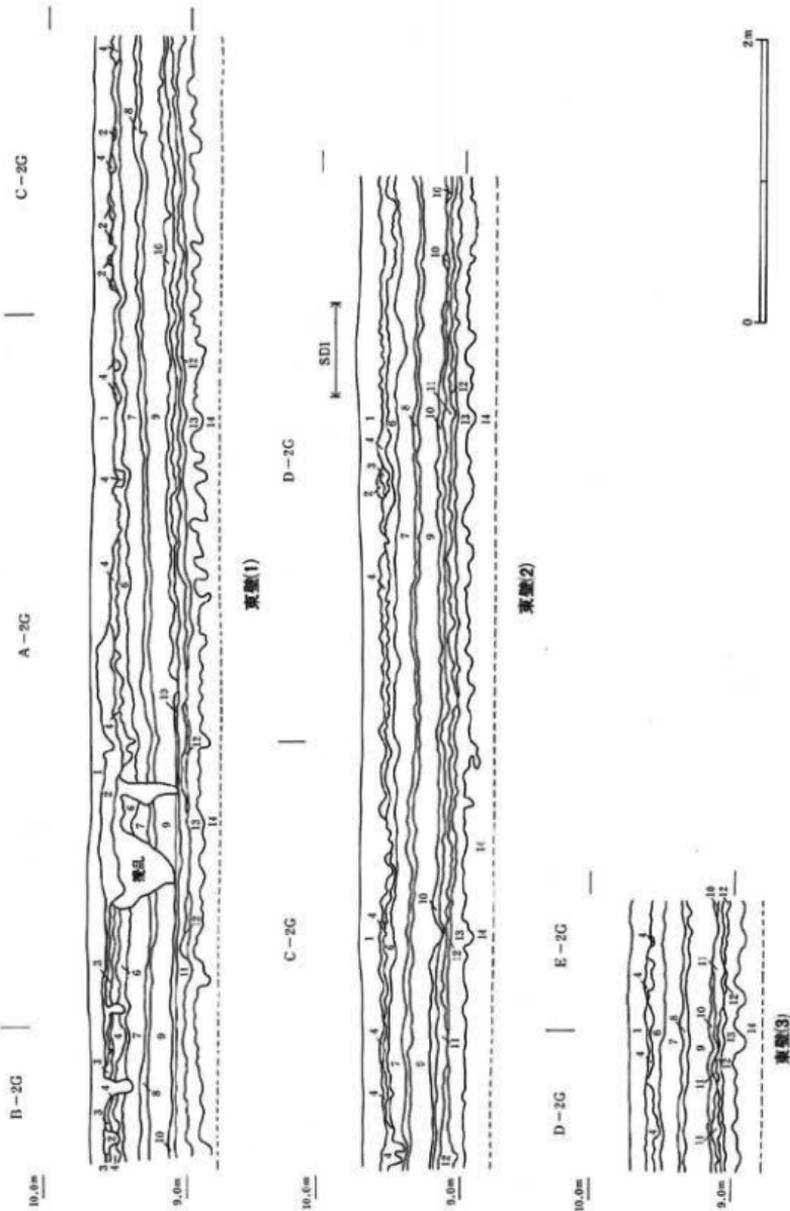
〈遺構状況〉調査区の南側、D-1・2グリッドに位置する。検出地点は、1層下、直接4層あるいは6層となり、土坑本来の掘り込み層位は不明である。上端・下端平面形とも楕円形を

第3節 富戸遺跡第81次調査

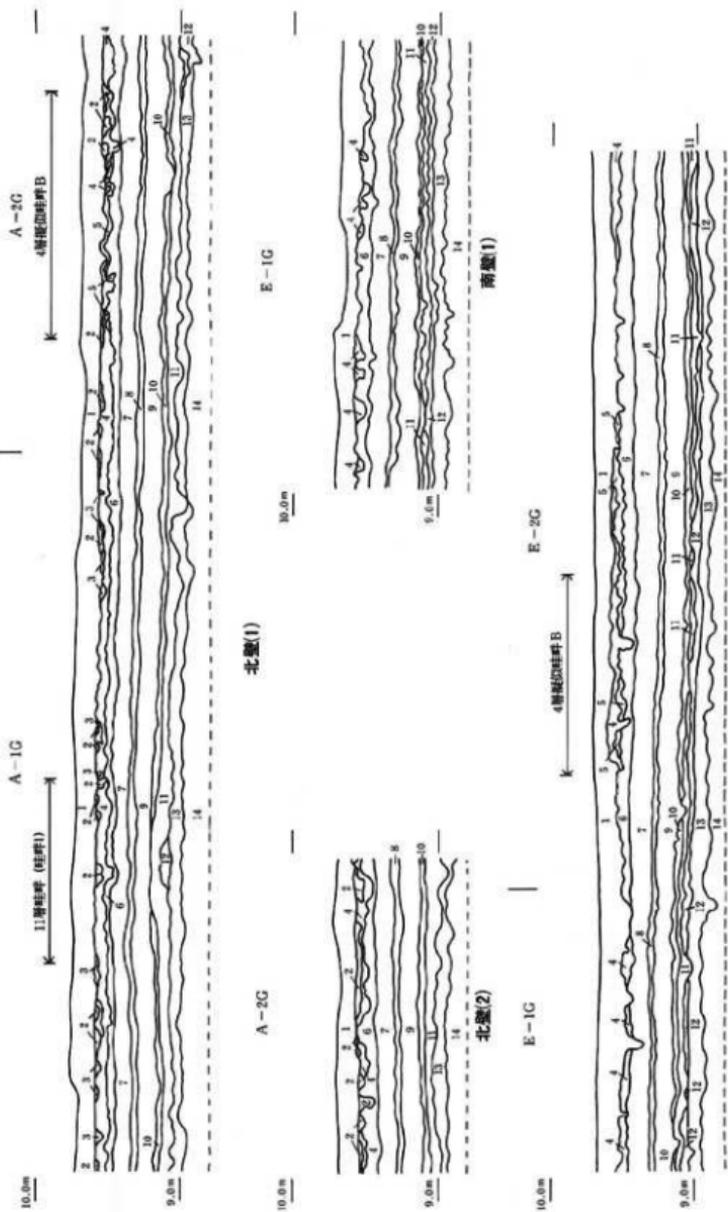
番号	色	層	土質	層厚[m]	顔色別	混入物	水回り	備 考
1	黒褐色	10Y R3/1	粘土	6~20	下部に紫鉄	磁粒	○	---
2	灰黄褐色	10Y R4/2	砂質シルト	1~15	骨管状腐紋	磁粒	?	部分的な分布
3	黒	10Y R2/1	粘土	2~9	骨管状腐紋	灰白色火山灰・ブロッコ少量・下層ブロッコ	○	部分的な分布・下部腐化
4	黒褐色	10Y R3/2	粘土	2~10	骨管状腐紋	灰白色火山灰・ブロッコ部分的に多量・下部に下層ブロッコ	○	下部腐化
5	黒褐色	10Y R3/1	粘土	1~7	骨管状腐紋	植物遺存少量・下層ブロッコ	○	部分の分布・下部腐化
6	黒褐色	7.5Y R3/4	灰泥土	2~16	骨管状腐紋	---	---	互層
	にぶい・黄褐色	10Y R5/4	灰泥質粘土					
7	灰黄褐色	10Y R4/2	灰泥質粘土上					
	黒褐色	10Y R2/1	灰泥土	1~20	骨管状腐紋	---	---	互層
	にぶい・灰褐色	10Y R5/4	灰泥質粘土					
8	灰黄褐色	10Y R4/2	灰泥質粘土上	2~10	骨管状腐紋	---	---	部分の分布・にぶい・黄褐色の互層あり
9	褐色	7.5Y R 4/3	灰泥土	10~21	骨管状腐紋	---	---	互層・上部褐色中ににぶい・黄褐色の腐化粘土
	黒	10Y R2/1	灰泥土					
10	黒	10Y R1.7/1	灰泥土					
	にぶい・黄褐色	10Y R5/4	灰泥質粘土上	2~13	骨管状腐紋	---	---	互層・下部の灰黄色のみに互層の場合あり
	灰黄褐色	10Y R4/2	灰泥質粘土上					
11	黒褐色	10Y R3/1	灰泥質粘土上	2~18	---	植物遺存多量・下層ブロッコ多量	○	下部腐化
	黒	10Y R2/1	灰泥土					
12	黒褐色	10Y R3/2	灰泥土	1~13	---	---	---	互層・下部のにぶい・黄褐色の一部に認められる
	にぶい・黄褐色	10Y R5/4	灰泥質粘土					
13	黒	10Y R1.7/1	灰泥土	2~18	---	---	---	下部腐化
14	黒褐色	10Y R3/2	灰泥土	4~15	---	---	---	下部腐化
15	黒	10Y R2/1	灰泥土	5~15	---	---	---	---
16	黒褐色	10Y R3/2	灰泥土	15~24	---	---	---	互層・上部・下部ににぶい・黄褐色
	にぶい・黄褐色	10Y R5/4	灰泥質粘土					
17	黒	10Y R2/1	灰泥質粘土上	4~14	---	---	---	---
18	灰黄褐色	10Y R4/2	灰泥質粘土上	10~20	---	---	---	部分的に黒色とにぶい・黄褐色の互層・下部は泥質
19	黒	10Y R1.7/1	灰泥質粘土上	12~21	---	上半植物遺存多量	---	下半黒色色し
20	灰黄褐色	10Y R4/2	灰泥質粘土上	5~11	---	---	---	部分的に黒色と互層
21	にぶい・黄褐色	10Y R5/4	灰泥土	2~22	---	---	---	21bが最もカサブタしたもの
21b	黒褐色	10Y R3/4	灰泥土	2~16	---	---	---	部分的に黒色とにぶい・黄褐色との互層
22	黒	10Y R2/1	灰泥質粘土上	14~28	---	下部の黒色粘土にも植物遺存	---	互層・上半はにぶい・黄褐色粘土との互層
	黒	10Y R1.7/1	灰泥土					
23	にぶい・黄褐色	10Y R5/3	粘土	9~17	---	植物遺存	---	点層
	黒	10Y R1.7/1	粘土					
24	黒褐色	10Y R3/1	粘土	5~13	---	植物遺存	---	互層
	黒色	10Y R1.7/1	粘土					
25	にぶい・黄褐色	10Y R5/3	粘土	2~13	---	植物遺存	---	褐色色の粘土の層すく多量
26	褐色	10Y R4/1	粘土	3~8	---	植物遺存	---	---
27	にぶい・黄褐色	10Y R5/3	粘土	3~10	---	植物遺存	---	---
28	褐色	10Y R4/1	粘土	5~19	---	植物遺存	---	---
29	黒褐色	10Y R3/1	粘土	7~20	---	植物遺存	---	---
30	褐色	10Y R5/1	粘土	2~10	---	植物遺存・ $\phi 3\text{mm}$ の灰白色の火山灰・ブロッコ多量	---	---
31	黒褐色	10Y R3/1	粘土	7~13	---	---	---	---
32	褐色	10Y R5/1	粘土	8~19	---	磁砂	---	$\phi 2\text{mm}$ の黒色粘土点多量・グライ化
33	明褐色	10G Y7/1	粘土	2~80	---	磁砂	---	$\phi 2\text{mm}$ の黒色粘土点多量・グライ化
34	灰褐色	10G Y6/1	砂	3~24	---	磁砂	---	しまりぬ・グライ化・起伏顕著
	緑灰色	5G 5/1	砂					
35	灰褐色	10G 6/1	粘土	2~19	---	---	---	しまりぬ・グライ化・起伏顕著
36	緑灰色	5G 5/1	砂質	5~21	---	磁砂	---	しまりぬ・グライ化・起伏顕著
37	緑灰褐色	5G 4/1	粘土	4~43	---	磁砂(緑色)多量	---	しまりぬ・グライ化・起伏顕著
38	緑灰色	7.5G Y6/1	粘土	2~36	---	---	---	しまりぬ・グライ化・起伏顕著
39	灰褐色	7.5Y R4/2	粘土	3~24	---	小粒径の樹皮を少量	---	黄褐色土層・しまりぬ・グライ化・起伏顕著
40	緑灰色	10G Y3/1	粘土	10~29	---	---	---	しまりぬ・グライ化・起伏顕著
41	緑灰色	7.5G Y6/1	砂質シルト	5~20	---	磁砂多量	---	しまりぬ・グライ化・起伏顕著
42	緑灰色	7.5G Y5/1	砂	5~16	---	磁砂	---	しまりぬ・グライ化・起伏顕著



第35図 西線断面図



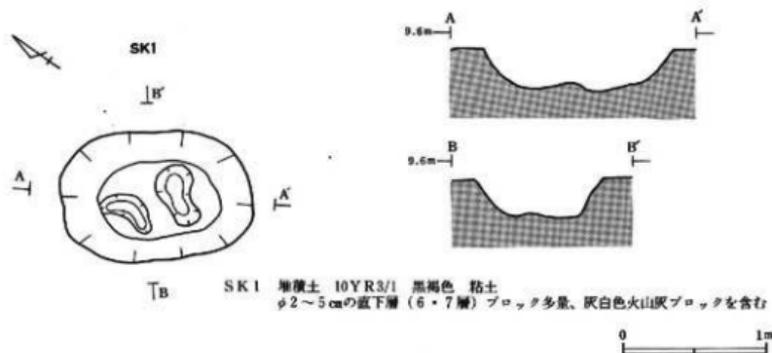
第36図 東壁断面図



第37図 北壁・南壁断面図

呈す。上端規模約130×90cm、下端規模約85×55cmで、深さは約30cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸が認められる。堆積土は単層である。堆積土中には、検出層以下の基本層ブロックが多量に含まれており、短時間に人為的に埋め戻された様相を呈す。土坑の性格は不明である。

〈出土遺物〉堆積土の上部より磁器の破片資料が1点出土したのみである。この磁器（写真68-2）は、肥前産の染付の碗で、製作年代は江戸時代後半頃と考えられる。

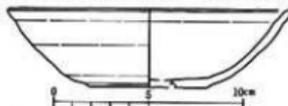


第38図 SK1平面図・断面図

4層水田跡 (第37・39・40図・写真19・25・68)

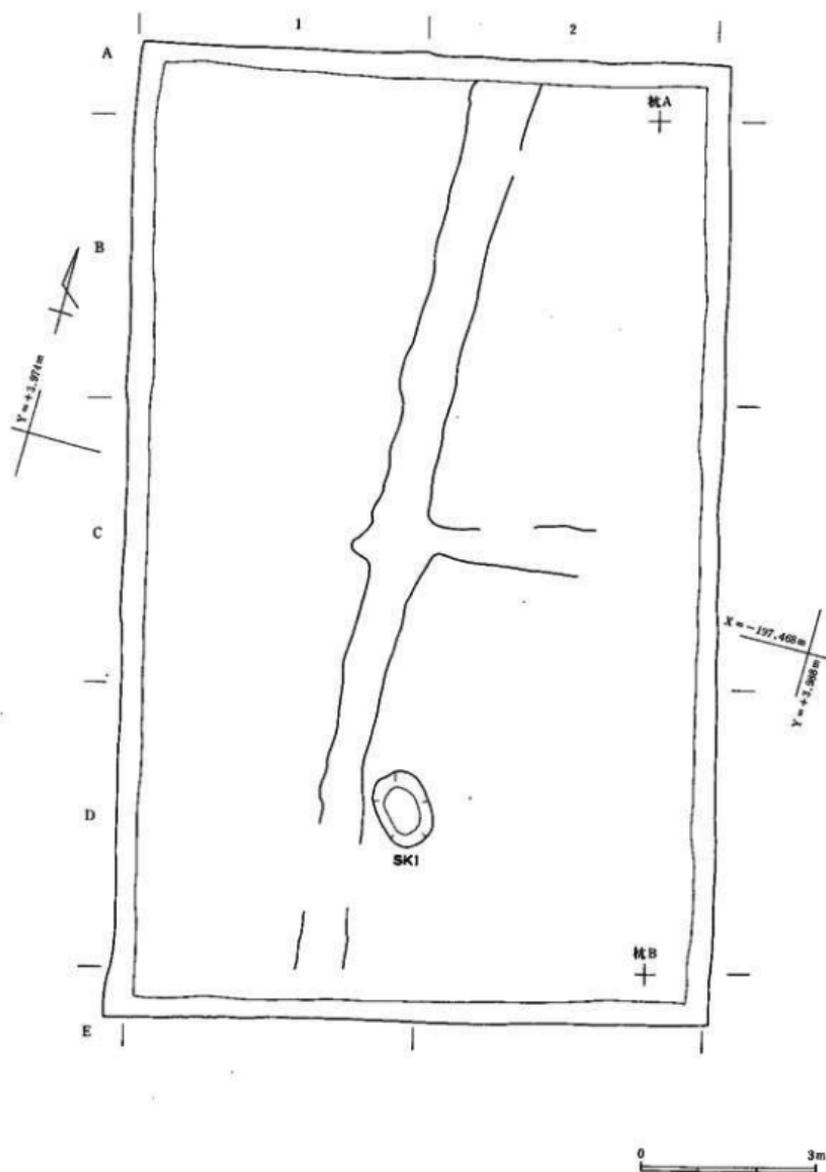
〈遺構状況〉4層上面及び少し4層を下げた段階で、帯状に延びる5層の若干の高まりが検出された。これは5層水田跡に伴う畦畔の可能性もあるが、5層が帯状部分にしか存在しない点(第37図, 写真25)より、4層水田跡に伴う擬似畦畔Bと考えられる。擬似畦畔Bは、ほぼ真北方向に直線的に延びるものとこれにほぼ直角に交わる2条が検出されている。両畦畔の交わり方は「T字」状で、方形を呈する3区画の水田の存在が推定される。擬似畦畔Bの幅は約70~100cmで水口の有無は不明である。耕作土の土質は粘土で、下面の起伏は顕著である。厚さは上層の攪乱でかなり削平されており、平均で8cm程である。耕作土中には、部分的に灰白色火山灰の小ブロックを多量に含む箇所が認められ、下部には下層ブロックを含む。なお、耕作土下面には鉄分の集積層は認められない。

〈出土遺物〉土師器片1点と須恵器片4点が出土している。土師器片は甕の体部資料であるが、小破片のため図化不可能であった。また、内外面摩滅しており調整も不明である。4点の須恵器片及び2・3層出土の須恵器片は全て同一個体であった。1/2程復元できる坏(第39図)で、底部は回転糸切りの後無調整のものである。



第39図 4層水田跡出土遺物

探検番号	図記番号	遺構・部位	層	形状	遺存率	口径 ㎜	底径 ㎜	器高 ㎜	物	数
第39図	写真68-1	4層	須恵器	坏	約1/2	14.8	6.2	6.2	底部切り廻し一回転糸切物調整物	

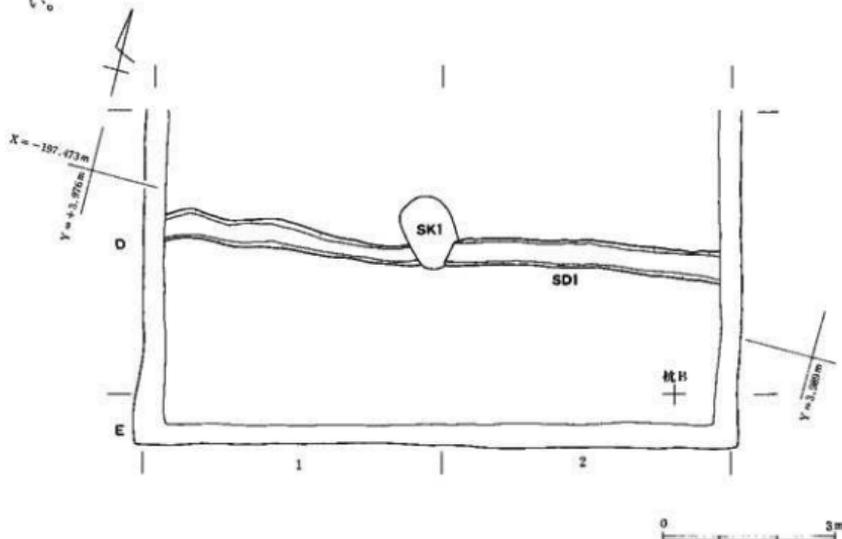


第40図 4層水田跡疑似畦畔B・SK1平面図

(2) 7層上面

1号溝跡-SD1-(第35・36・41図・写真21)

調査区の南側、D-1・2グリッドに位置し、調査区を東西方向に横切る小規模な溝跡である。一部をSK1に切られる。上端幅40cm前後、深さ5cm前後で、断面形は「U」状を呈する。堆積土は上層の6層が入り込みこの溝跡の堆積土となっている。出土遺物は無い。溝跡の性格であるが、人為的な溝というよりは、その規模、堆積土状況から自然流路跡の可能性が高い。



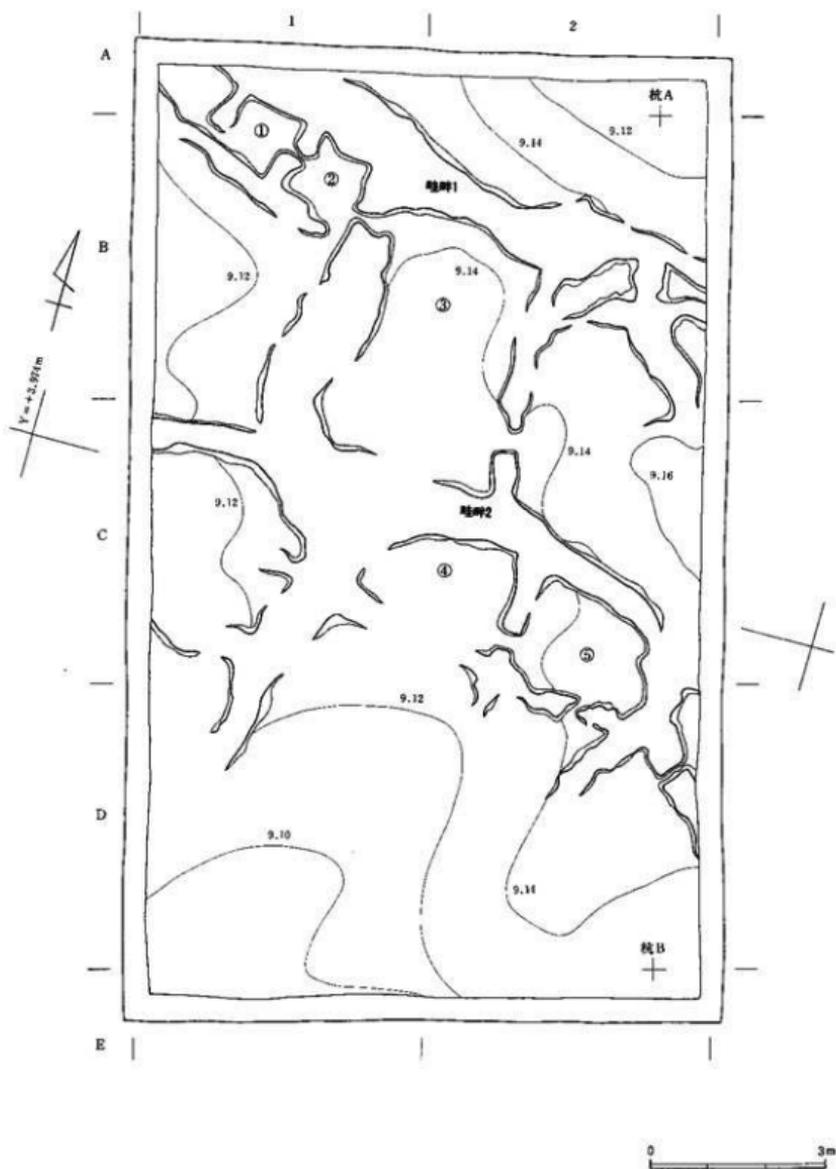
第41図 SD1平面図

(3) 11層上面

11層水田跡(第35・37・42図・写真22・23・26~28)

小区画の水田が10区画以上検出された。畦畔の検出面は9層下面から10層上面である。水田跡に伴う出土遺物は無かった。

〈畦畔の規模〉畦畔は耕作土と同一土壌-11層-を盛り上げて作られている。畦畔には、畦畔1のように下端幅1~1.5mの広いものと、30~50cmの狭いものの両者が認められる。下端幅の広いものの内、畦畔1は直下層に擬似畦畔Bが形成されていることより大畦畔と考えられる(第37図)。下端幅が狭いものは大畦畔に対しての小畦畔とみられる。畦畔1を除く下端幅の広いものは、擬似畦畔Bの存在が明確でないことより、大畦畔なのか小畦畔が崩れて広がったものなのか判別できない。耕作土上面からの高さは大畦畔(畦畔1)が8cm前後、小畦畔が2~4cmである。



第42圖 11層水田跡平面図

〈畦畔の配列〉大畦畔である畦畔1の方向性(N-75°-W)に対し、他の畦畔はほぼ平行か直交方向を取る。畦畔1と同一方向のものは直線的で無いにしろ連続性が認められるが、直交方向のものは連続性に欠ける。畦畔の交わり方は「+」状・「T」字状の両者がみられる。

〈水田1区画の形状と規模〉明確に区画の形状と面積が判るものあるいは推定できるものは5区画である(区画①~⑤)。これらの区画の形状は、畦畔が直線的でないために不整形ではあるが、ほぼ方形を基調としている。区画面積は大・中・小の3つに分けられる。大は区画③がこれに相当し、10㎡前後のもの。中は区画④・⑤がこれに相当し、3㎡前後のもの。小は区画①・②がこれに相当し、1㎡前後のものである。不明確な区画の内、区画④・⑤の南側・西側・東側の区画は、畦畔の残存状況より中の区画面積とも考えられる。その場合、中の区画面積のものは、全て畦畔2の南側に位置したことになる。区画①の西側の区画は、小の区画面積と考えられ、大畦畔の南側に沿って小の区画面積のものが並らべている。区画③の東側にも大畦畔の南側に位置する小の規模の区画らしきものが2区画認められるが、この2区画に関しては、畦畔上の窪の可能性もあり、積極的に区画として認定できない。

〈耕作土と耕作域〉12層あるいは13層上部までを攪拌し、泥炭質粘土の耕作土としているが、全体的に母材となった層の攪拌状況は悪い。Dライン以南になるとその状況はさらに悪くなり、また、耕作土も薄く、12層も厚く残存しており、畦畔が途切れる以南は、非耕作域となっていた可能性もある。耕作土の厚さは下面の起伏が顕著で安定していないが、平均で8cm前後、最大で18cmである。下面には鉄分の集積層は認められない。

〈水田面の傾斜〉全体の水田面の標高は9.10~9.16mで、北側方向・南側方向に緩やかな下り傾斜、北西側方向・東側方向に緩やかな上り傾斜となり、全体的な一方向への傾斜は認められない。各区画内の耕作土上面の比高差は、区画面積が大のものが約4cm(区画⑤4.1cm)、区画面積が中のものが約2.5cm(区画③2.4cm、区画④2.7cm)、区画面積が小のものが約1.5cm(区画①1.3cm、区画②1.7cm)で、いずれも5cm以下であった。

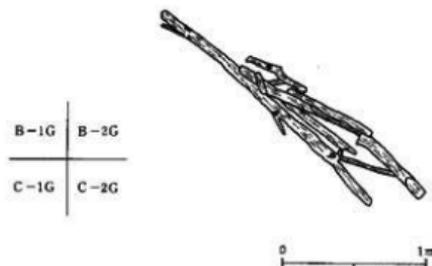
〈水口〉水口は大畦畔には認められなかったが、小畦畔として認識できるもの全てに認められた。水口底面のレベルは、耕作土上面よりやや高いものとほぼ同じものがある。水口が取り付く位置には傾向性は見られないが、区画②のように3辺の畦畔に水口を設けるものも認められた。

(4) 14層上面

樹木片集中箇所(第43図・写真24)

B-2グリッド南西コーナー付近で、樹木片がまとまって出土した。全て直径10cm以下の自然の樹木で、最長のものは約2mを測る。人工的な切断面、加工面は持たない。また、火を受けた痕跡も樹木及び周辺の14層には認められなかった。出土地点の14層上面が窪地状になって

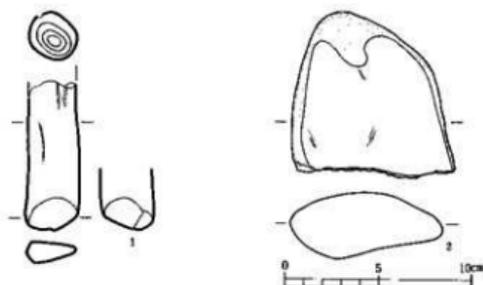
いたことより、流木がこの部分に集中したものと考えられる。



第43図 14層上面樹木片集中地点平面図

(5) その他の出土遺物 (第44図・写真68)

基本層1・2・3・8・33層から土師器片・赤焼土器片・須恵器片・土師質土器片・陶器片・磁器片・礫石器・杭が合計10点出土した。この内、礫石器と杭を除くものは、細片で、図化不可能であった。土師器片は1層より、赤焼土器片は3層より各1点の出土である。須恵器片は、2・3層より各1点出土したが、これらは4層水田跡出土の坏と同一のものである。土師質土器片・陶器片・磁器片は全て1層出土で、この内、陶器・磁器は全て近世以降のものである。杭は8層下面で1点出土している(第44図1)。直径約3cmの丸木を素材とした細いものである。出土地点はD-2グリッドの北側で、南西方向に斜めに打たれており、先端は9層上部に達している。大半が欠失しており、正確な打ち込み層位は不明である。礫石器は33層上面より1点出土している(第44図2)。この礫石器は、1面のみに擦痕を持つやや扁平な磨石である。



第44図 出土遺物

検出番号	図面番号	遺物・層位	種類	材質	遺物形状	長さ	直径	先端部下	上面加工	備	考
第44図-1	写真68-4	3層下面	杭	丸木材	丸木材	8.2cm	2.8cm	3方向	---	縦定	一部欠失
検出番号	図面番号	遺物・層位	長さ	幅	厚さ	重量	材質	表面	備考		
第44図-2	写真68-3	33層上面	108	140	35	340	石灰岩山石	断面1次、断面方向不明			

4. 遺構の所属年代とまとめ

1. 検出遺構としては、SK1、SD1、3層・4層・5層・11層の4期の水田跡が検出された。また、水田跡の可能性のある層としては、基本層2層が上げられる。

2. 4層上面検出のSK1は、掘り込み層位が不明な土坑であるが、その出土遺物より3層以降の可能性が高い。

3. 7層上面検出のSD1は、小規模な溝跡であるが、自然の水の流れによって形成された自然流路跡と考えられる。

4. 4期の水田跡の内、3層・5層の各水田跡は耕作土のみの検出である。しかし、両層は富沢遺跡北部A地区基本層序（佐藤：1992）の3a層・5層に対応し、この基本層序に包括される第5・7・14次調査区等で畦畔が検出されていることより水田跡と認定した。

5. 検出水田跡の所属年代であるが、出土遺物が皆無、あるいは数量的に乏しいことより、出土遺物からの時代決定は困難であるが、4層中に灰白色火山灰が混じること、富沢遺跡北部A地区基本層序との層の対応関係が可能であったことより、以下のような所属年代が想定される。

- ・3層水田跡—近世
- ・4層水田跡—平安時代（灰白色火山灰降下以降）
- ・5層水田跡—古墳時代以降、平安時代（灰白色火山灰降下以前）以前
- ・11層水田跡—弥生時代（埴形Ⅲ式期）

6. 基本層1層から14層までは、富沢遺跡北部A地区基本層序との対応関係が認められる。その対応関係は以下のとおりである。

- | | | |
|----------------------|------------|---------------|
| ・1層（富沢遺跡北部A地区基本層序1層） | ・2層（同2層） | ・3層（同3a層） |
| ・4層（同4a層） | ・5層（同5層） | ・6層（同7層） |
| ・7層（同8b層） | ・8層（同9b層） | ・9層（同10a層） |
| ・10層（同10c・e層） | ・11層（同11層） | ・12層（同12a・b層） |
| ・13層（同13層） | ・14層（同14層） | |

7. 基本層32層から42層までは、富沢遺跡第30次調査下層基本層序（太田：1991）と対応する可能性がある。その対応関係は、以下のとおりである。

- | | | |
|---------------------|------------|---------------|
| ・33層（富沢遺跡第30次調査16層） | ・34層（同17層） | ・35層（同18層） |
| ・36層（同19層） | ・37層（同19層） | ・38層（同19・20層） |
| ・39層（同25・26層） | ・40層（同27層） | ・41層（同28層） |
| ・42層（同28層） | | |

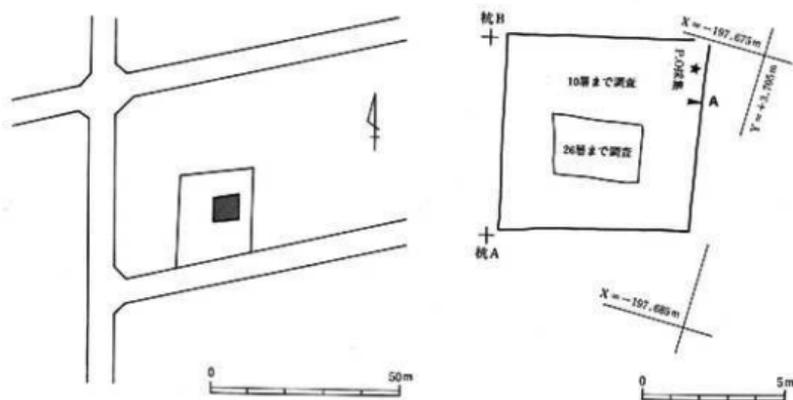
第4節 富沢遺跡第82次調査

1. 調査方法

調査区の設定面積は約 $6.7 \times 7.1\text{m}$ (43.31m^2)である。調査は、盛土及び直下の1層(旧水田耕作土)までを重機で排除し、以下は人力により行った。調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。9層までは調査区全面の精査を実施し、10層以下は約 $2 \times 3\text{m}$ の試掘区を設けて掘り下げた。遺構の測量は、杭A・Bを基準にして実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している(杭A: $X = -197,677.05\text{m}$ $Y = +3,703.59\text{m}$ 杭B: $X = -197,683.81\text{m}$ $Y = +3,705.46\text{m}$)。

2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に大別26層、細別28層が確認された。各層の土質は粘土が主体であるが6層～15層は泥炭質粘土となっている。16層から以下はグライ化が進み、砂、粘土が交互に堆積している。現代のものをのぞく水田土壌の可能性のあるのは、3・4・5・7・9層である。2～4層中から灰白色火山灰を検出しているが、下層からの巻き上げと考えられる。全体的な層の傾きは東側にごく緩やかに下がっている。なお、当調査区の約50m北側に第30次調査区があり基本層序に対応関係が認められる。対応関係については後述する。



第45図 調査区位置図・設定図

3. 検出遺構と出土遺物

(1) 5層上面

1号溝跡-SD1-(第47図)

北西から南東方向へ直線的に延びる溝跡である。上端幅約65cm、下端幅30~38cm、深さ約24cmである。底面は平坦で南東へわずかに下がる程度である。堆積土は1層で、層下部に植物遺体を若干含んでいる。遺物は出土しなかった。

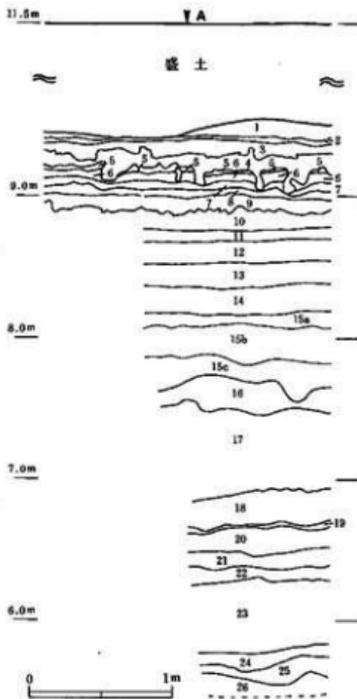
(2) その他の出土遺物 (第48図)

14層、15a層から磨石が1点づつ出土している。

(1、2) 磨面は片面にのみ認められ非常に滑らかである。

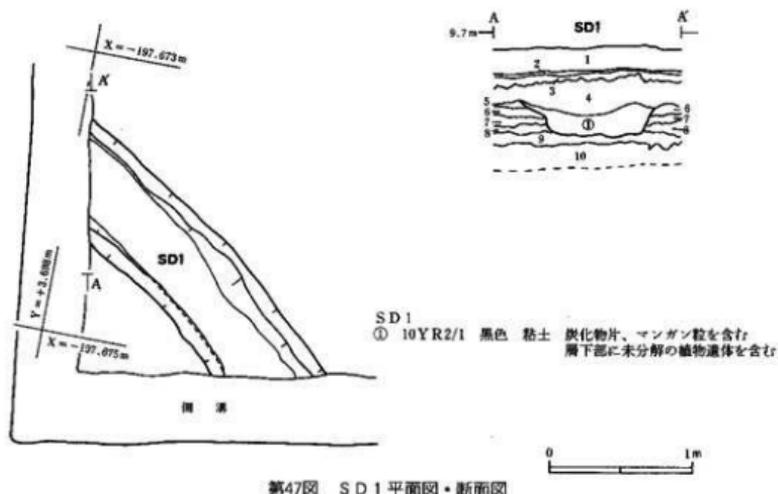
(3) は1層下部より出土しており脚か台の破片と考えられるが、類例がなく器形の特定が困難である。時期は江戸以降と考えられる。今後の資料の増加を待たたい。

他には4層から須恵器片が出土しているが図示は困難である。



層序	色	層	土質	層厚cm	陶化率	出土物	水田土層	備	考
1	黒褐色	2.5Y3/1	シルト質粘土	16	----	炭化物等	○	----	----
2	黒褐色	2.5Y3/2	粘土	4	----	炭化物・灰白色火山灰	?	下遊置しく凸凹	----
3	黒	10YR2/1	粘土	8	半炭状	炭化物・灰白色火山灰	?	下遊置しく凸凹	----
4	黒	2.5Y2/1	粘土	16	層上部炭状	灰(口色)山灰・層中に5層・6層の上とセグメント状に含む	?	-----	-----
5	黒	5 Y2/1	粘土	4	----	植物遺体	?	-----	-----
6	黒	10YR1.7/1	炭灰質粘土	6	----	半分解の植物遺体	?	-----	-----
7	黒	2.5Y2/1	炭灰質粘土	6	半炭状	-----	?	-----	-----
8	黒褐色	2.5Y3/1	炭灰質粘土	6	----	半分解の植物遺体(少量)	?	-----	-----
9	黒	5 Y2/1	炭灰質粘土	12	----	半分解の植物遺体(少量)	?	-----	-----
10	黒	10YR1.7/1	炭灰質粘土	20	----	半分解の植物遺体(少量)	?	下凹に凸凹	-----
11	黒	5 Y2/1	炭灰質粘土	8	----	-----	?	-----	-----
12	黒	10YR1.7/1	炭灰質粘土	14	----	-----	?	-----	層下部に黒褐色粘土(2.5Y3/26)部分的に含む
13	黒	2.5Y2/1	炭灰質粘土	16	----	-----	?	-----	層下部には黒褐色2.5Y3/1
14	黒	10YR1.7/1	炭灰質粘土	18	----	-----	?	-----	-----
15a	黒	5 Y2/1	炭灰質粘土	12	----	-----	?	-----	-----
15b	黒褐色	2.5Y3/1	炭灰質粘土	20	----	-----	?	-----	-----
15c	灰褐色	5 Y5/1	粘土	15	----	半分解の植物遺体	?	-----	-----
15c	オリーブ灰褐色	5 G Y5/1	粘土	15	----	半分解の植物遺体・炭化物	?	グライ化	-----
16	緑灰色	10G Y6/1	細砂	22	----	半分解の植物遺体	?	グライ化	-----
17	オリーブ灰褐色	2.5G Y5/1	細砂	14	----	-----	?	グライ化	-----
17	緑灰色	10G Y6/1	粘土	55	----	半分解の植物遺体・炭化物	?	-----	層中部に5 G5/1(セグメント)状に含む・グライ化
18	黄褐色	10B G6/1	砂質粘土	22	----	-----	?	グライ化	-----
19	緑灰色	5 G4/1	粘土	3	----	炭化物	?	-----	層下部は緑灰色(10G5/1)グライ化
20	緑灰色	10C5/1	細砂	16	----	炭化物	?	-----	層下部粘土と砂のうすい混層グライ化
21	緑灰色	10G6/1	粘土	11	----	-----	?	グライ化	-----
22	緑灰色	5 G4/1	細砂	9	----	-----	?	グライ化	粘土の粒の透り砂の混層・グライ化
23	黄褐色	10B G4/1	細砂	50	----	-----	?	グライ化	砂、粘土のうすい混層・グライ化
24	緑灰色	5 G5/1	砂質粘土	8	----	-----	?	グライ化	-----
25	緑灰色	10C5/1	粘土	8	----	-----	?	グライ化	-----
26	オリーブ灰褐色	5 G Y5/1	粘土	8	----	-----	?	グライ化	-----
27	緑灰色	5 G4/1	砂	12	----	-----	?	グライ化	-----

第46図 基本層序



第47図 SD1 平面図・断面図

(3) 下層の調査

旧石器時代に相当する層の調査は、 1×1 mの調査区を設定し26層まで実施した。富沢遺跡で旧石器時代の植物遺体などを出土する層（腐食粘土層^(註1)）の確認につとめたが、当調査地点では検出されなかった。

4. 所属年代とまとめ

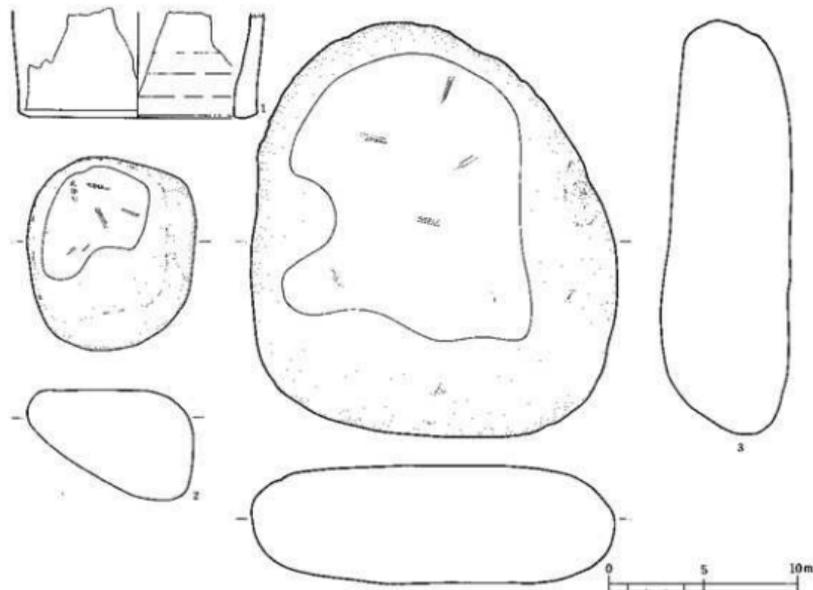
1. 検出遺構は5層上面で溝跡が1条検出されたのみであるが、その性格については不明である。3・4・5・7・9層の各層は、その層相観察より水田土壌の可能性が高い。
2. 各層の所属年代であるが、隣接する第30次調査区との対応より以下の所属年代が想定されるが、出土遺物が少なく、また、遺構の検出も少ないので確定的なものではなく幅のあるものであると考えられる。

82次調査区	30次調査区	所属年代
3層	4・5層	中世～
4層	6・7層	平安時代（灰白色火山灰降下以降）
5層	8 a層	古墳時代
6層	8 d層	弥生時代～古墳時代
7層	9層	

第4回 富沢遺跡第32次調査

8層	10層	弥生時代
9層	11層	
10層	12層	
14・15層	13・14・15層	縄文時代
16層	17層	
17層	19層	

3. 第30次調査との関連から、16層以下は旧石器時代に含まれる層の可能性が考えられるが、第30次調査で確認された旧石器時代の樹木を含む腐食粘土層が当調査地点では認められず、水性堆積を示す層が厚く堆積していることが確認された。このことにより第30次調査の南西側では、当時の人々が生活できる環境ではなく水性堆積作用を受ける環境にあった可能性が考えられる。さらに周辺の地域の調査が進むことによってより詳しい環境復元が可能となろう。



編年番号	発掘番号	遺構・遺物	種類	形状	通存数	口径φ		底径φ		高さ		材質	備考
						1層	2層	1層	2層	1層	2層		
第48回-1	-	1層	陶器	不明		112.81						紀伊橋	上層-腐食粘土層 下層-水性堆積層
第48回-2	富沢跡-1	15a層	土器	不明	108	99.5	61	590				石巻山石	
-3	富沢跡-2	15b層	土器	不明	210	206	68	4.845				安山岩	

第48回 出土遺物

(註1) 腐食粘土層については富沢遺跡第57次調査(佐藤他:1991)を参照

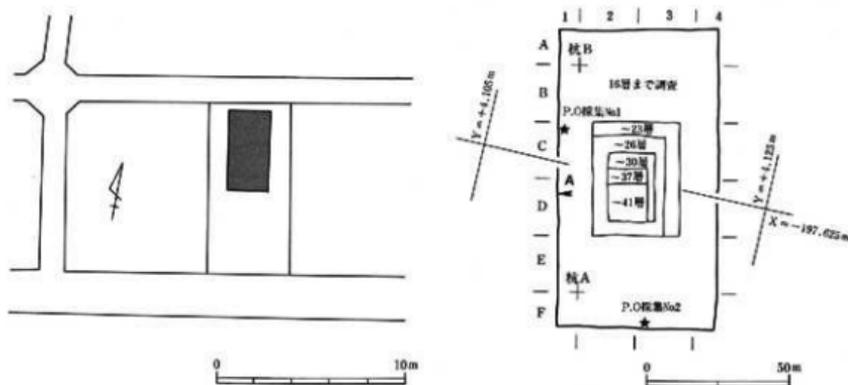
第5節 富沢遺跡第83次調査

1. 調査方法

調査区の設定面積は約 $21 \times 11\text{m}$ (231m^2)である。調査は、盛土及び直下の1層(旧水田耕作土)下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けている。調査は16層上面までは、調査区全面の精査を実施し、16層以下は、約 $8 \times 6\text{m}$ の試掘区を設けて掘り下げた(最下層面では約 $2.8 \times 2.6\text{m}$)。遺構の測量は、任意に設定した $4 \times 4\text{m}$ グリッド(南北軸A~F、東西軸1~4)を基準として実施した。なお、グリッド基準杭(杭A・B)の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している(杭A: $X = -197633.599\text{m}$, $Y = +4113.633\text{m}$ 杭B: $X = -197617.996\text{m}$, $Y = +4110.113\text{m}$)。

2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に大別38層、細別では40層が確認された。各層の土質は、7層までが粘土、8層から25層までは主として泥炭土あるいは泥炭質粘土、26層から35層までは粘土、36層以下は粘土層を若干介するが砂となる。35層以下の各層は、堅くしまっており、特に37層以下では著しい。グライ化は、31層以下から漸時進み、32層以下では顕著である。3・4・5・29層からは、火山灰が検出されている。この内3・4・5層中のものは灰白色火山灰である。3・4層中の火山灰は、5層中に入っていたものが、後の3・4層の攪乱により3・4層中に巻



第49図 調査区位置図・設定図

き上げられたものである。また、29層中のものは、第28次調査29層中検出のものと同じのものと考えられる。現代のものを除く明確な水田土壌は3・5・6・12a・13層の各層であるが、2・4・7層の各層も水田土壌の可能性はある。遺物出土層は1・2・3・4・5・6・8・12層である。各層の傾きとしては、1～17層までは南方へのややきつい下り傾斜（勾配約1%）を傾斜を示す。18層以下では、調査区が狭く全体的な傾向性はつかめないが、19層以下では傾斜方向が変化し、東方への緩やかな下り傾斜となる。ただし、31層以下では、層が不安定となり、傾斜方向の傾向性は認められない。なお、当調査区の基本層序の内、1～17層の各層は、富沢遺跡北部A地区基本層序（佐藤：1991）と対応関係が認められる。

3. 検出遺構と出土遺物

3層・5層・6層・12a層・13層で水田跡が検出された。ただし、5・6層に関しては耕作土のみの検出である。また、5水田跡上面では自然流路跡が、34層上面では河川跡が1流路（SR1）が検出された。

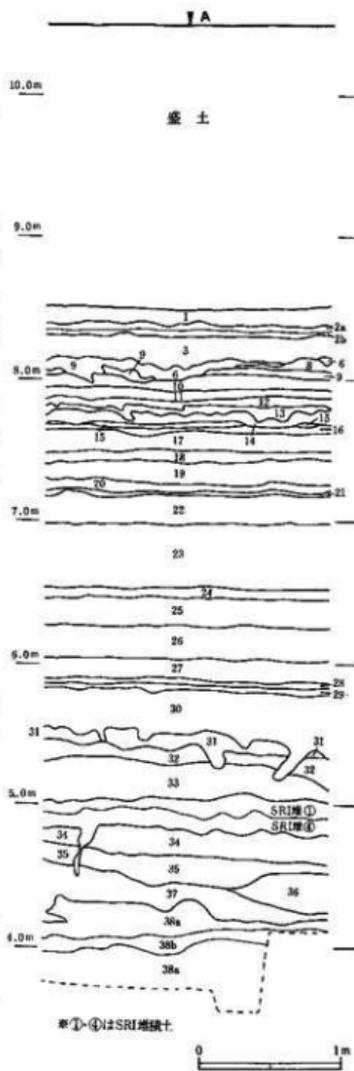
(1) 3層上面

3層水田跡

（第54～56図・写真35・36・47～49・70・71）

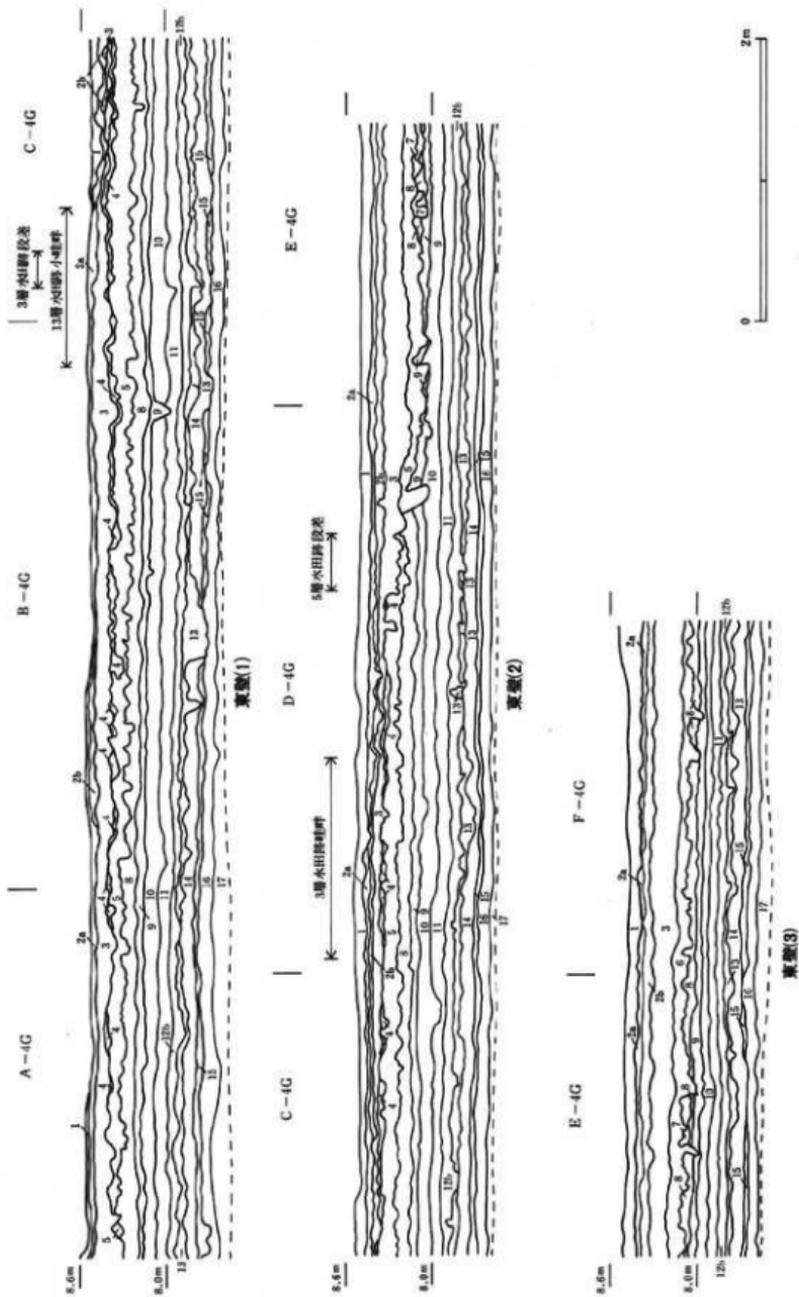
ほぼ真北方向をとる畦畔とほぼこれに直行方向に交わる畦畔と段差による、5区画の水田跡が検出された。畦畔の検出面は2層中である。直上層の攪乱により、本来の水田面は保持していない。このため南北畦畔・東西畦畔とも遺存状態が悪く、断片的な検出である。

〈畦畔と区画〉畦畔は、耕作土と同一土壌－3層－を盛り上げて作られている。南北畦畔、東

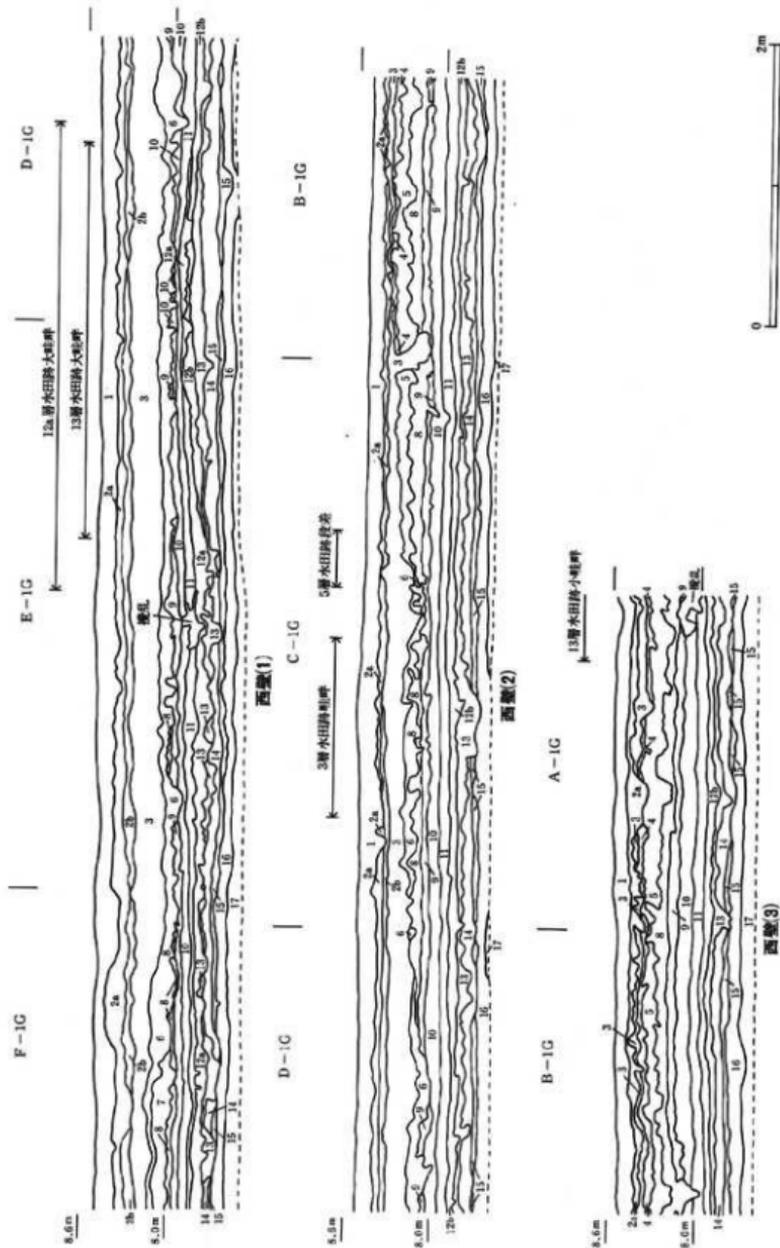


第50図 基本層序

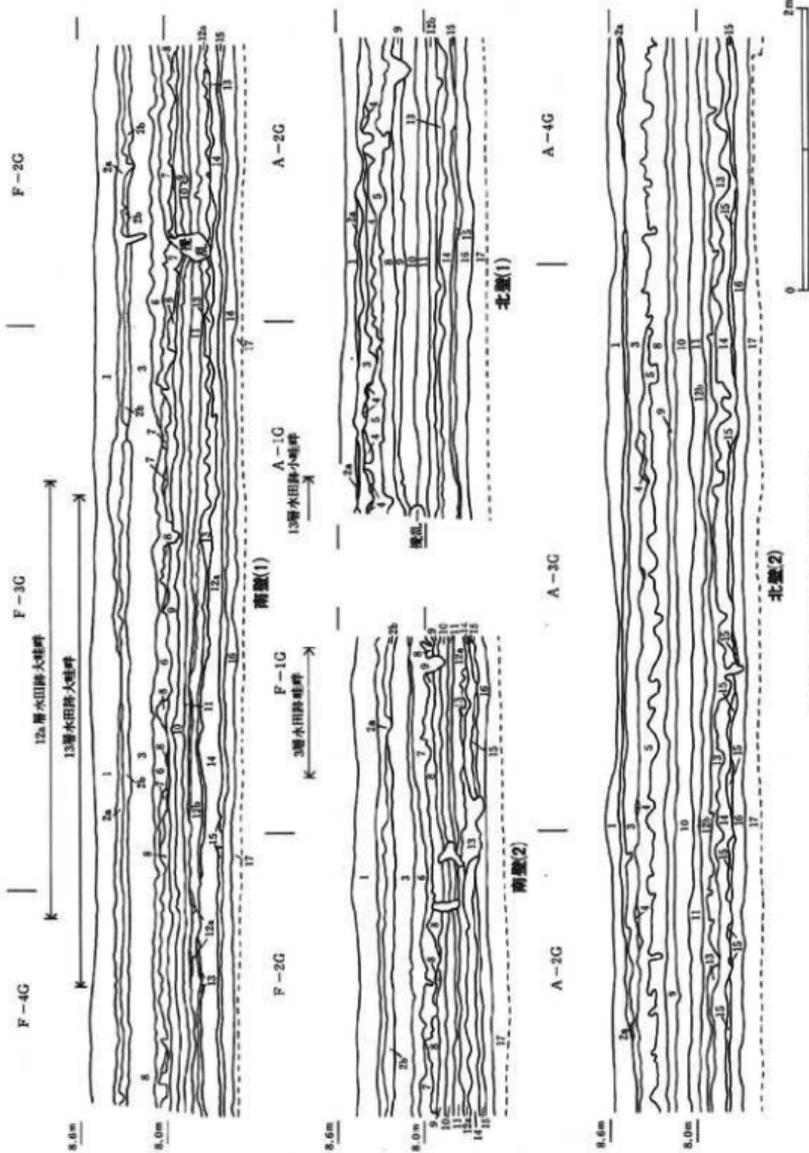
群号	色	顔	土質	厚層[m]	堆化部	混入物	水向上層	備考
1	オリーブ褐色	5.0Y2/1	粘土	2~22	管状試採取	---	○	ホレアライ化
2	オリーブ褐色	5.0Y2/1	シルト質粘土	3~13	管状試採取少量	植物少量	?	ホレアライ化
2b	黒	2.5G Y2/1	シルト	2~9	管状試採取	植物	?	---
3	黒褐色	10Y R3/1	粘土	2~20	管状試採取	マンゴシ根群・下部に下部ブロッコ・灰白色 火山灰状少量	○	---
4	黒	10Y R2/1	粘土	2~8	管状試採取	マンゴシ根群・下部に下部ブロッコ・灰白色 火山灰状少量	?	---
5	黒褐色	10Y4/1	粘土	2~16	管状試採取	マンゴシ根群・下部に下部ブロッコ・灰白色 火山灰状少量	○	---
6	黒	10Y R2/1	粘土	2~17	管状試採取	マンゴシ根群・下部に下部ブロッコ	○	---
7	黒褐色	10Y4/1	粘土	2~14	管状試採取	マンゴシ根群・下部に下部ブロッコ	?	---
8	にぶい黄褐色 黒褐色	10Y R1.7/1 10Y R6/3 10Y R3/1	灰砂土 粘土 泥炭質粘土	2~20	管状試採取	---	---	互層
9	灰黄褐色 黒	10Y R5/2 10Y R2/1 10Y R4/2	粘土 泥炭土 粘土	2~11	管状試採取	---	---	互層
10	紅赤褐色 にぶい黄褐色 黒	10Y R1.7/1 10Y R5/2 10Y R1.7/1	泥炭土 泥炭土 灰砂土	2~13	---	---	---	互層
11	黒褐色 にぶい黄褐色 黒	10Y R4/1 10Y R6/3 10Y R1.7/1	泥炭質粘土 粘土 泥炭土	2~13	---	---	---	互層
12a	暗赤褐色	2.5Y4/2	泥炭質粘土	2~14	---	12b層のブロッコ堆	○	大粒層上は暗赤色のよこれた色調
12b	灰黄褐色 灰黄褐色 にぶい黄褐色	10Y R2/2 10Y R4/2 10Y R5/2	粘土 粘土 泥炭質粘土	2~11	---	植物遺体	---	互層
13	黒褐色	10Y R2/2	泥炭質粘土	2~15	---	植物遺体少量 (植物部分鑑定)	○	---
14	黒褐色 にぶい黄褐色 黒	10Y R2/2 10Y R1.7/1 10Y R6/3	泥炭土 泥炭土 粘土	2~15	---	---	---	互層
15	灰黄褐色	10Y R3/2	粘土	2~8	---	植物遺体	---	部分のなす物
16	黒	10Y R1.7/1	泥炭土	2~15	---	植物遺体少量	---	---
17	黒褐色 黒褐色	10Y R2/1 10Y R3/1	泥炭土 砂土	11~20	---	植物遺体少量	---	互層
18	黒 にぶい黄褐色	10Y R2/1 10Y R6/3	泥炭土 粘土	8~15	---	---	---	互層
19	にぶい黄褐色 黒	10Y R3/3 10Y R1.7/1	粘土 泥炭土	9~18	---	---	---	互層
20	黒 にぶい黄褐色	10Y R1.7/1 10Y R6/3	泥炭土 粘土	2~9	---	---	---	互層・互層が不明瞭になる部分あり
21	黒 黒褐色	10Y R2/1 10Y R2/2	泥炭土 泥炭土	2~7	---	---	---	---
22	黒褐色 にぶい黄褐色	10Y R2/2 10Y R6/3	泥炭土 粘土	17~24	---	上部に植物遺体少量	---	互層
23	黒褐色 灰色 黒	10Y R3/1 7.5Y6/1 10Y R1.7/1	粘土 粘土 粘土	42~49	---	植物遺体	---	互層
24	黒褐色 黒 黒褐色	10Y R3/1 10Y R1.7/1 10Y R3/1	粘土 粘土 粘土	5~9	---	植物遺体	---	互層
25	にぶい黄褐色 黒	10Y R6/3 10Y R1.7/1	粘土 泥炭土	16~22	---	植物遺体少量	---	互層
26	灰黄褐色 紅褐色 黒	10Y R3/2 10Y R4/1 10Y R2/1	粘土 粘土 粘土	23~28	---	植物遺体少量	---	互層
27	黒褐色 黒	10Y R3/1 10Y R1.7/1	粘土 粘土	12~20	---	植物遺体少量	---	互層
28	灰色 黒	10Y 5/1 10Y R1.7/1	粘土 泥炭土	2~5	---	植物遺体	---	互層
29	黒	2.5Y2/1	粘土	3~6	---	植物遺体少量・層の中間に0.3cmの灰白色火山灰ブロッコ	---	---
30	黒褐色 黒 灰色	10Y R3/1 10Y R1.7/1 10Y 5/1	粘土 粘土 粘土	25~66	---	植物遺体少量	---	互層
31	灰色 緑褐色	10Y 6/1 7.5G Y3/1	粘土 シルト	4~22 3~23	---	0.2~3.0cmの黒色粒上層 0.2~3.0cmの黒色粗上層	---	アライ化 アライ化顕著
32	緑褐色	2.5G Y3/1	シルト	12~55	---	0.5mmの黒色粒・0.2~3.0cmの黒色粗上層	---	アライ化顕著
33	緑褐色	2.5G Y3/1	シルト	2~21	---	0.5mmの黒色粒・植物遺体少量	---	河原切り込み層・アライ化顕著
34	暗オリーブ灰色	2.5G Y4/1	砂	2~21	---	0.5mmの黒色粒・植物遺体少量	---	河原切り込み層・アライ化顕著
35	オリーブ灰色	5GY3/1	砂	2~20	---	植物遺体少量	---	粗砂・間に粘土層あり・しまり有・アライ化顕著
37	緑褐色	5G6/1	粘土	4~55	---	植物遺体少量	---	しまり有・アライ化顕著
38a	緑褐色	5G5/1	砂	4~66	---	---	---	しまり有・下にいくと硬い砂の成分が感じられる
38b	緑褐色	5G6/1	粘土	2~25	---	植物遺体少量	---	しまり有・砂層中に介在



第51図 調査区東断断面図



第52图 調査区西壁断面図



第53図 調査区南壁・北壁断面図

西畦畔とも下端幅が1m前後であるが、南北畦畔は、D-2グリッド南半以南は60cm前後と狭くなる。畦畔の耕作土上面からの高さは、遺存状態の良い場所で約5cmである。両畦畔の交わり方は「+」状で、南北畦畔の北側は、東西方向の段差に取り付いている。また、南北畦畔の南側は、F-1グリッドで完結しているが、調査区南側には畦畔の続きが認められており(第53図)、この部分に水口が取り付けられていた可能性がある。段差は、ほぼ直線的に伸びる比高差が2~5cm程の低いものである。本来は、段上に畦畔が取り付けいていたものと考えられる。また、段上では、南北畦畔が更に北方へ延びていた可能性等もあり、区画①は、本来の区画面積を示しているかどうかは不明である。1区画全体が検出されたものはないが、各区画の形状は、方形を基調としている。区画1辺の長さが判るものは、区画②・③でそれぞれ4.7~5.5m・3.6~4.1mである。

〈耕作土〉耕作土の土質は粘土である。下面の起伏は顕著で、下部に下層ブロックを含む。耕作土の厚さは東西畦畔を境として南側は厚く平均で20cm、北側は薄く10cm以下の部分が多く、耕作土が認められない箇所もある。この差は、水田面の傾斜と上層の攪乱深度の差に起因する。耕作土下面には鉄分の集積層は認められない。

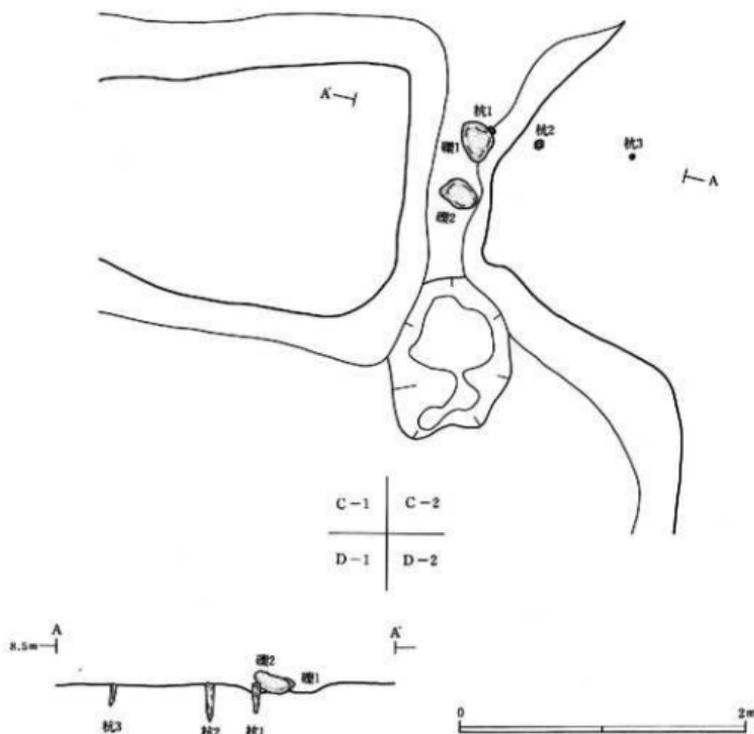
〈水田面の標高と傾斜〉水田面の標高は8.20~8.50mの間である。水田面は、南下がりのややきつい傾斜となっており、当然の結果として、南側の区画ほど水田面が低くなっている。

〈水口〉明確な水口は、区画②と区画④の間の東西畦畔で検出されている。南北畦畔との交点付近に位置しており、底面には10cm大の偏平な円礫が2点(礫1・2)南北方向に並んで置かれ、礫2の東脇に杭が1本(杭1)そして東側の畦畔上に杭2本(杭2・3)が直線状に打たれている。杭の間隔は杭1と杭2が約15cm、杭2と杭3が約35cmである。また、水口南側前面(区画④内)には、深さ5cm程の小さな窪が検出された(第55図)。礫は1面(礫2)或は両面(礫1)に磨痕を持つもので(第56図1・2)、杭は直径2cm前後の丸木を素材とした細いもので、大半を欠失している(第56図3・5)。これら礫及び杭の配列は、この水口における水利施設の存在を想定させるものと言える。水口の底面は、区画②と区画④の水田面の高低差に合わせて区画④方向に下がっている。また、底面の高さは、いずれの水田面よりやや低かったと推定される。なお、水口南側前面の窪は、区画②より流れ落ちてきた水の影響によってできたものと考えられる。

〈出土遺物〉水口で出土した礫・杭を除く出土遺物は、土師器・赤焼土器・須恵器・陶器等で27点出土している。全て図化不能な小破片資料である。陶器は鉄釉のものが1点出土しているが、器種、産地、製作年代は不明である。



第54圖 3層水田跡平面図

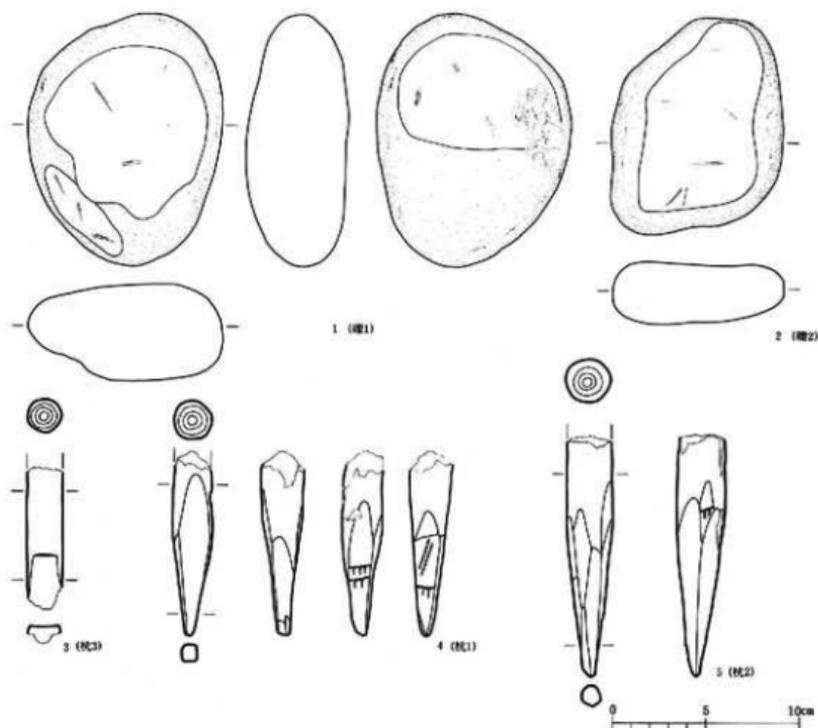


第55図 3層水田跡水口詳細図

(2) 5層上面

5層水田跡 (第51・52・57・58図・写真37・50・70)

〈遺構状況〉5層水田跡は、耕作土のみの検出である。耕作土も調査区全面に広がっておらず、北半のみの分布で、南半は3層下が直接6層上面となる。6層上面との境界はほぼ直線的で、10 cm程の段差となっている(第57図:段上が5層水田跡)。境界ラインは、3層水田跡東西畦畔の南側約1 mに位置しており、段差の形成及び段差南側の耕作土消失原因は、3層水田跡によるものと考えられる。従って、本来は、段差南側にも耕作土が広がっていたものと想定される。事実、段差南側の3層中には、5層ブロックが多量に含まれ、さらに、後述する5層水田跡上面の自然流路痕が、段差で途切れるといったことは、これらを傍証するものと考えられる。耕作土の土質は粘土で、下面の起伏は顕著である。厚さは上層の攪乱でかなり削平されており、

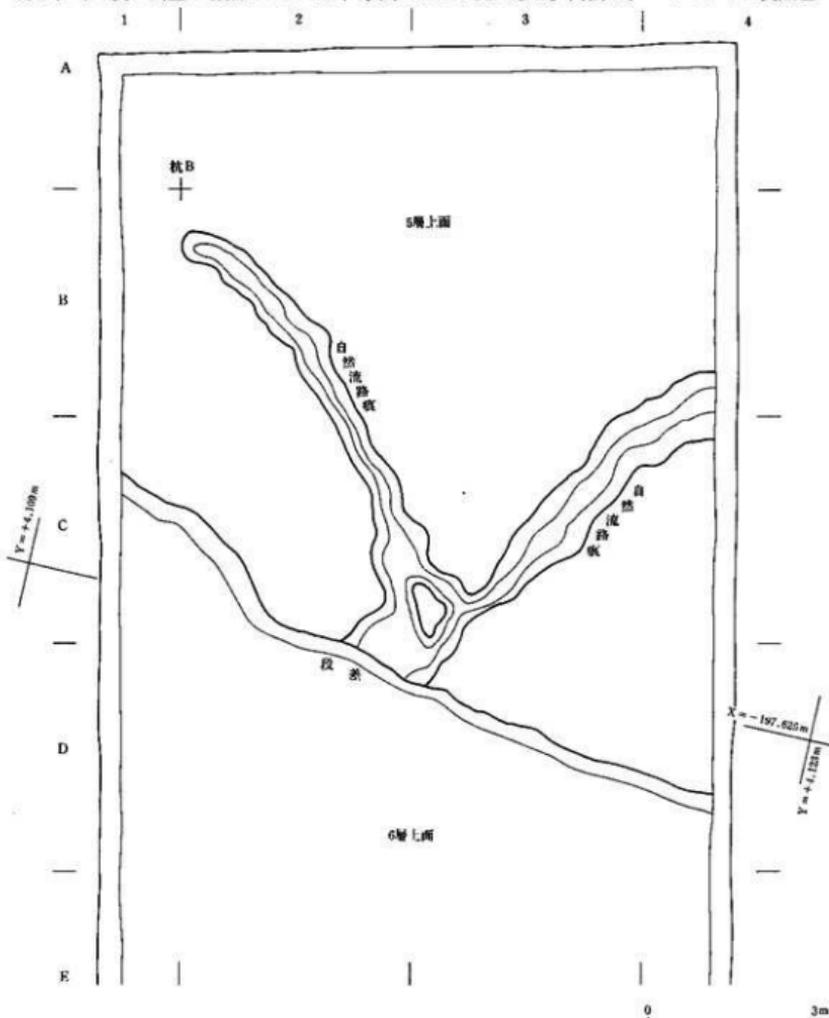


発掘層	図記番号	流通・用途	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	高さ 寸	材質	備	
第56区-1	字記79-6	3層水田跡水口	117.5	104	5.8	070	安山岩	磨面2面・磨研方向不明	
-2	字記79-7	3層水田跡水口	129	99	54	665	*	磨面1面・磨研方向不明	
図記番号	図記番号	出土遺構・層位	類別	材質	形状	長さ	幅	用途加工	備
第56区-2	字記71-1	3層水田跡水口	枕	丸木柱	7.7cm	1.9cm	1方向	磨研文様・先端文様	*
-4	字記71-2	3層水田跡水口	枕	丸木柱	10.0cm	2.1cm	3方向	磨研文様・両こぼれ一面にあり・発端磨削して尖頭・口っかかりあり	
-6	字記71-3	3層水田跡水口	枕	丸木柱	13.1cm	2.6cm	3方向	磨研文様・先端文様・口っかかりあり	

第56図 3層水田跡水口出土遺物

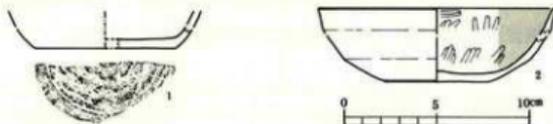
平均で10cm程である。耕作土中には、部分的に灰白色火山灰の小ブロックを多量に含む箇所が認められ、また、下部では下層ブロックを含む。なお、耕作土下面には鉄分の集積層は認められない。水田面の標高は、8.3~8.4mの間で、水田面の傾斜は、南方向への緩やかな下り傾斜をとる。なお、5層水田跡上面で、流水によるものと考えられる複数の自然流路跡が検出されている。上端幅50~100cm、深さ5~10cmの上端幅、底面とも不安定な、蛇行する小規模な2流路で、南側で合流する。検出層位は、5層上面であるが、実際の切り込み層位が、4層上面であるか5層上面であるかは不明である。

〈出土遺物〉土師器が10点、須恵器が2点、剥片が2点出土した。土師器は全て破片資料で、1点の調整不明のものを除けば、全てロクロ使用である。ロクロ使用のもの内4点と4層出土の破片資料2点が接合した。坏の口縁部から底部までの資料で（第58図2）、底部は回転糸切り、その後の調整の有無については、摩滅のため不明である。内面は、ヘラミガキの後黒色



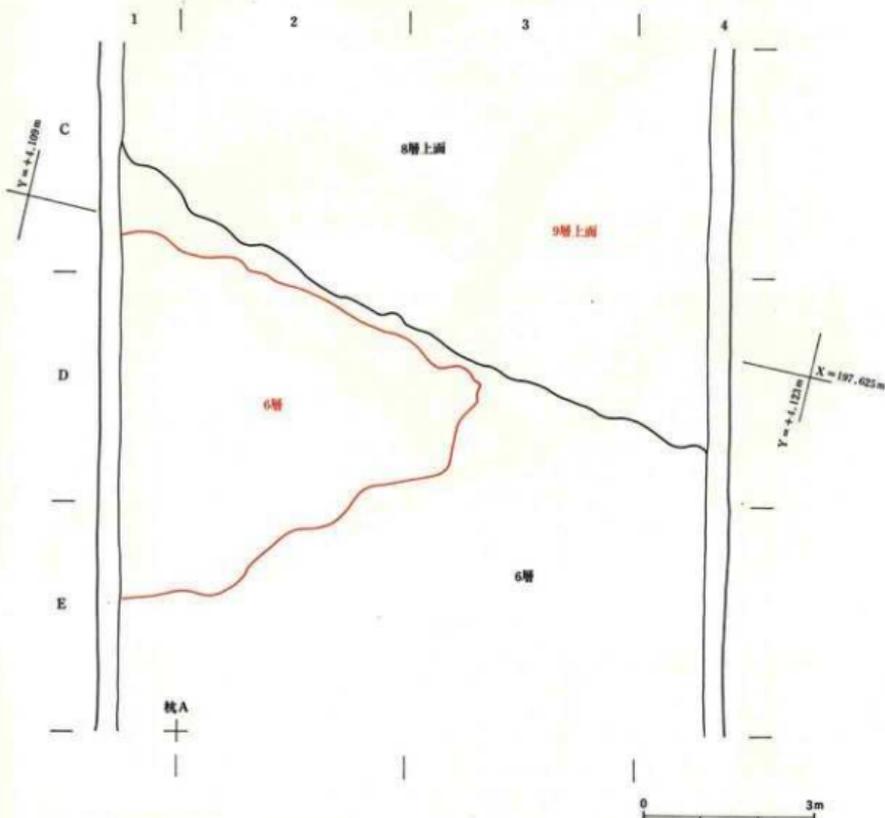
第57図 5層水田跡分布域及び上面自然流路度平面図

処理が施されている。須恵器はいずれも坏の破片資料で、この内1点が図化可能であった。体部下端から底部にかけての資料で（第58図1）、底部は回転ヘラ切りの後無調整である。



発見番号	図面番号	遺構・層位	類別	部	量	保存状況	口径φ	底径φ	器高φ	土質		特	備
										外面	内面		
第83図-1	写真70-1	5層水田跡	須恵器	坏	底部1/2	—	(7.6)	—	灰白	灰白	外面—ワタシ 内面—ワタシ		
-2	写真70-4	5層水田跡	土器類	坏	2/3	—	(5.4)	—	灰白	黒	外面—磨滅している、ワタシ 内面—ワタシのみ、黒色磨滅		底面—回転ヘラ切り、ほとんど磨滅している

第58図 5層水田跡出土遺物



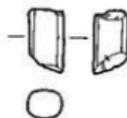
第59図 6層水田跡水田域

(3) 6層上面

6層水田跡 (第59・60図・写真38・39・50・70)

〈遺構状況〉6層水田跡も耕作土のみの検出である。耕作土は、5層水田跡と反対に5層水田跡段差部分より北側には分布せず、調査区南半のみに広がる。調査区北半は5層直下が8層となっており、耕作域が調査区北半にも及んでいたかは不明であるが、北半の5層中に6層ブロックが認められないことを考慮すれば、非耕作域であった可能性もある。6層水田跡は、耕作土を徐々に掘り下げて行くと、9層が現れる部分と耕作土が残る部分に別れる(第59図赤ライン)。9層と耕作土残存部分の境界ラインは、8層上面と南側の耕作土との境界ラインとはほぼ直交方向をとっている。この9層上面の耕作土残存部分は、区画間における耕作深度の差を反映しているものと考えられ、6層水田跡には、2区画の水田が存在したことが想定される。耕作土の土質は粘土で、下面の起伏は顕著である。厚さは上層の攪乱でかなり削平されており、平均で12cm程である。耕作土の下部には下層ブロックを含み、下面には鉄分の集積層は認められない。水田面の標高は、8.05~8.25mの間で、水田面の傾斜は、南方向へのややきついドリ傾斜をとる。

〈出土遺物〉土師器が3点、土製品が1点出土した。土師器は全て凶化不能な細片で、調整等も不明である。土製品は細い棒状のもので(第60図)、両端を欠損している。土器類の突起の可能性もある。



検出番号	図面番号	遺構・層位	検出	長さmm	幅mm	厚さmm	備
第0014	写真70	6層水田跡	土製品	2.3	1.2	0.8	両端欠損・土器突起?

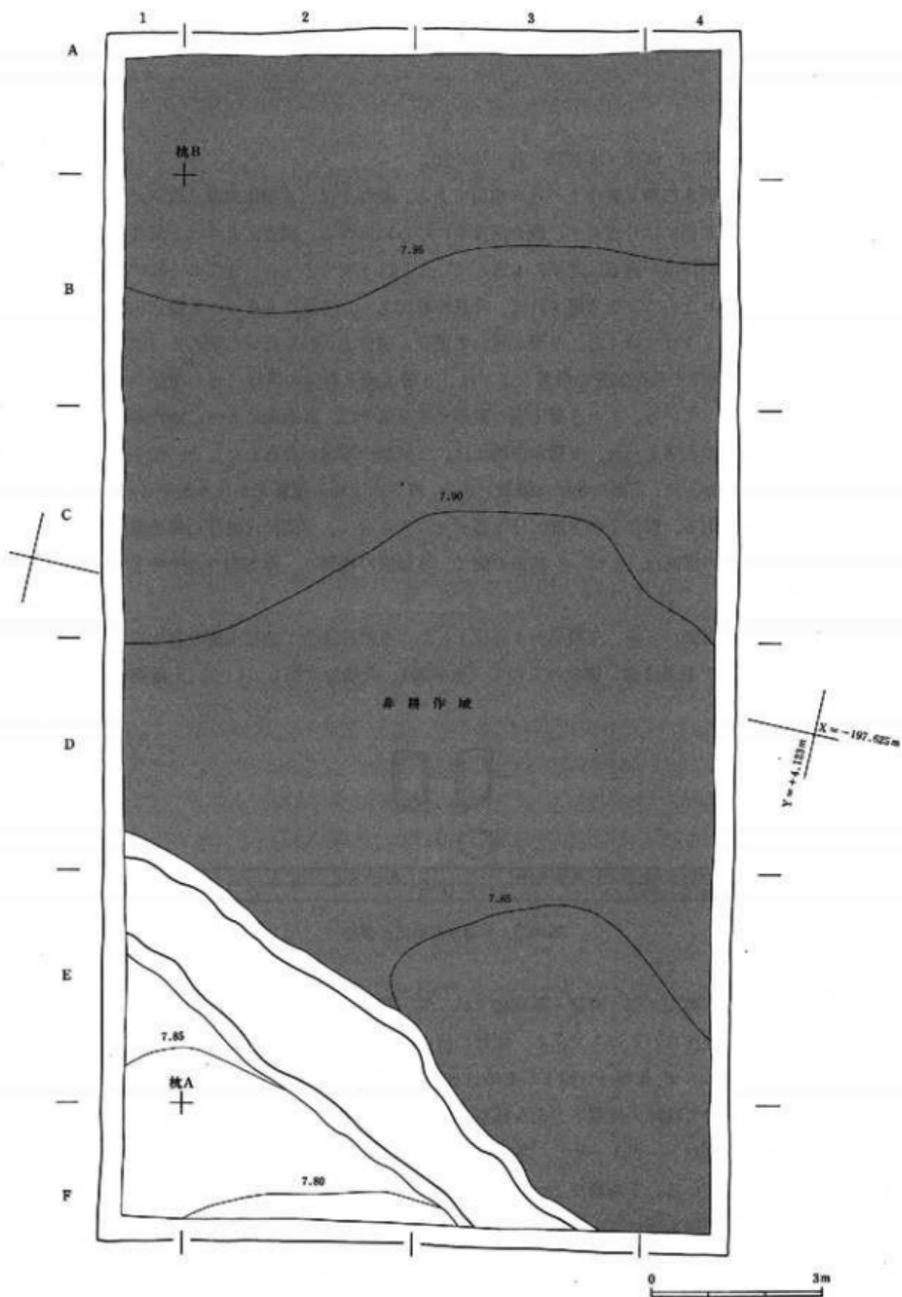
第60図 6層水田跡出土遺物

(4) 12層上面

12a層水田跡 (第52・53・61図・写真40・41・51・52)

大畦畔が1条検出されたのみである。畦畔の検出面は11層上面である。耕作域は、畦畔の北側には広がっておらず、北側は11層下が直接11b層となる非耕作域である。また、この大畦畔は、下層の13層水田跡大畦畔の位置・方向を踏襲したものである。なお、出土遺物は皆無であった。

〈畦畔〉畦畔方向はN-68°-Wで、直線的に延びる。畦畔は耕作土と同一土壌-12a層-を盛り上げ作られている。下端幅は2m前後で、耕作土上面からの高さは、良好な部分で15cmである。畦畔の直下層上面には、擬似畦畔Bが形成されている。なお、畦畔上には水口は検出されなかった。



第61圖 12層水田跡平面図

〈耕作土〉耕作土の土質は泥炭質粘土で、粘土と泥炭質粘土の互層である12b層及び13層水田跡耕作土を攪拌し、耕作土-12a層-としている。耕作土の分解の度合いは、層中に母材のブロックを多量に含み、余り進んでいない。耕作土の厚さは、下面の起伏が顕著で安定していないが、最大で14cmを測る。耕作土の下面には鉄分の集積層は認められない。

〈水田面の標高と傾斜〉非耕作域を含めた水田面の標高は、7.75～8.00mの間である。水田面の傾斜は、南東方向へのややきつい下り傾斜をとる。

(5) 13層上面

13層水田跡 (第62・63図・写真42～46・51～54・71)

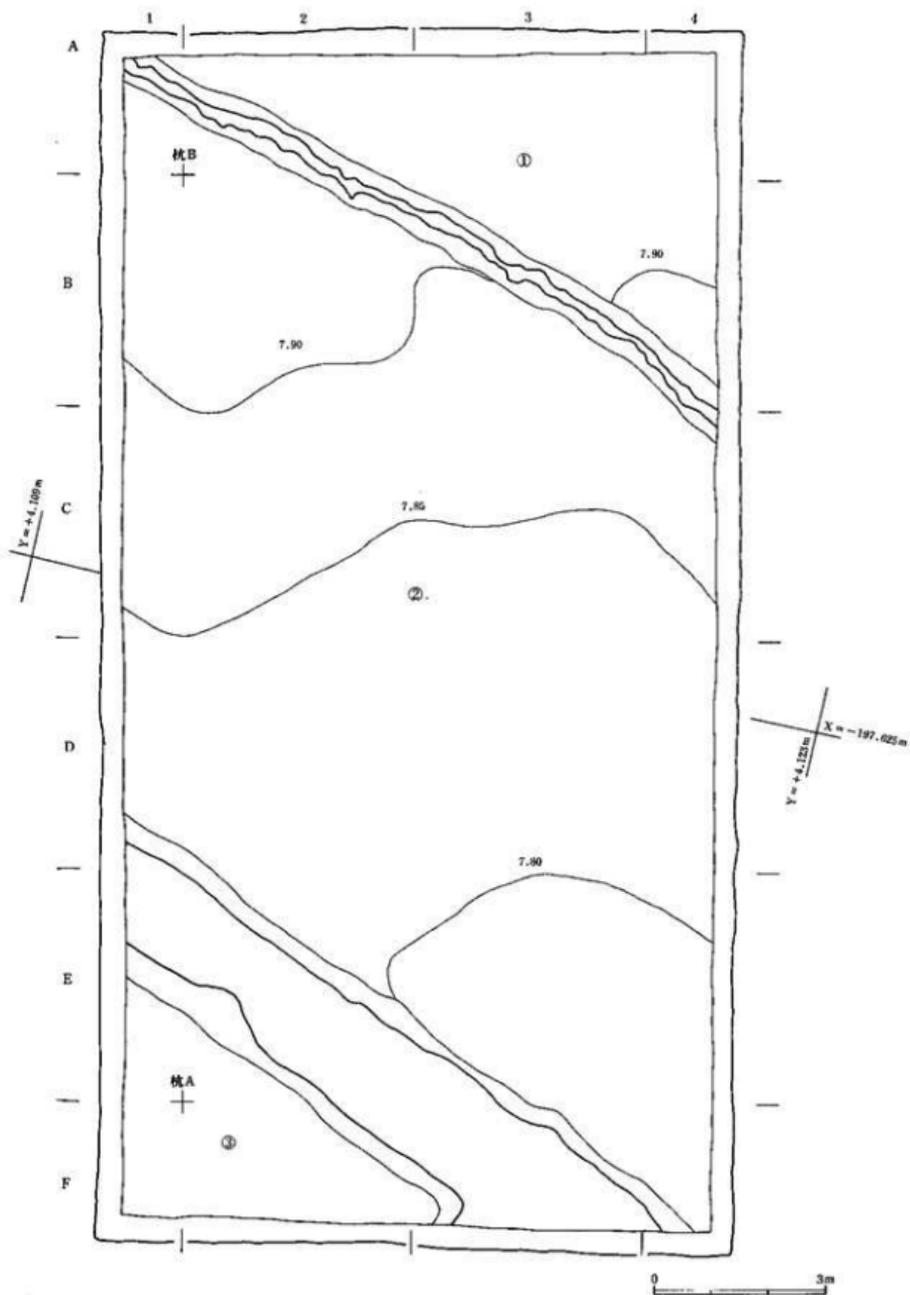
大畦畔2条と小畦畔1条からなる3区画(区画①～③)の水田跡が検出された。検出面は、大畦畔が12a層中、小畦畔が12b下面である。なお、いずれの畦畔上にもは水口は検出されなかった。

〈畦畔〉大畦畔の方向は、上層12a層水田跡大畦畔と同様の東西方向(N-68°-W)のものと、これに直交すると考えられる南北方向のものがある。小畦畔の方向は、大畦畔の東西方向のものとはほぼ同一方向をとる。東西方向の大畦畔・小畦畔ともほぼ直線的に延びる。大畦畔と小畦畔とも耕作土と同一土壌-13層-を盛り上げ作られている。大畦畔・小畦畔の下端幅は2.5m前後・70cm前後で、耕作土上面からの高さは、10cm前後・1～4cmである。大畦畔の直下層上面には、擬似畦畔Bが形成されているが、小畦畔には認められない。2条の大畦畔は「T字」状にF-3グリッドで交わっている。この北側の耕作土上面は他に比べ盛り上がり、南北畦畔が東西畦畔の北側にも延びていた可能性もある。

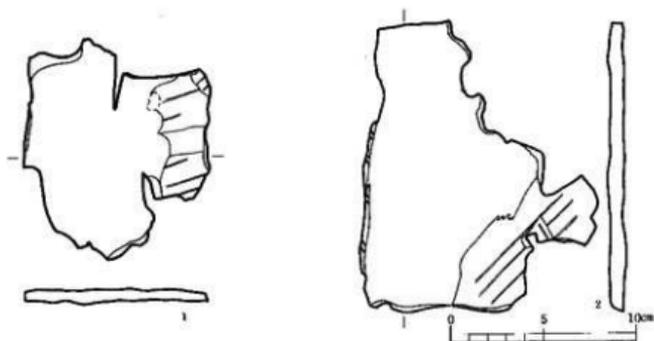
〈耕作土〉耕作土の土質は泥炭質粘土で、粘土と泥炭土の互層である14層を攪拌し、耕作土-13層-としている。耕作土の分解の度合いは、層中に母材のブロックを多量に含み、余り進んでいない。耕作土の厚さは、下面の起伏が顕著で安定していないが、最大で15cmを測る。なお、区画③では、12a層水田跡の耕作によって、耕作土が僅かに残存するのみである。耕作土の下面には鉄分の集積層は認められない。

〈水田面の標高と傾斜〉削平されていない区画①・②の水田面の標高は、7.75～7.95mの間である。水田面の傾斜は、南東方向へのややきつい下り傾斜をとる。区画②の耕作土上面の比高差は最大で19cmあり、この比高差では稲の成育は困難で(藤原他:1989)、当区画内に複数的小畦畔が存在したものと考えられる。従って、今回検出された区画は、最終区画段階のものではないと推定される。

〈出土遺物〉東西方向の大畦畔上部より樹皮製品の可能性のある樹皮が出土している。第63図1・2は、同一のものであるが、接合面が認められない。ともに厚さ2～5mmの樹皮で破損している。1は樹皮外面、2は樹皮内面の一部に加工痕が認められる。さらに、2は作り出され



第62図 13層水田跡平面図



検出番号	図号番号	出土遺物・層位	輪径	材質	素材形状	最大径	最大幅	最大厚さ	備	考
63-1	写真71-4	13層水田跡陶器片	—	—	楕円	12.1cm	10.1cm	0.7cm	片割の一部分加工痕	
63-2	写真71-5	13層水田跡陶器片	—	—	楕円	15.9cm	12.5cm	0.9cm	片割あり・内面の一部加工痕	

第63図 13層水田跡出土遺物

た側面が一部残っている。

(6) 34層上面

1号河川跡-SR1-(第64図・写真55~57)

34層上面では河川跡が一流路検出された。調査区狭く、平面的な調査が実施できず、断面観察を主とする調査となった。下層調査区西壁セクション(第64図1)の堆積土①層北端部から約1m北側の地点で、河川跡の肩部分が発出されている。流路方向は北西-南東方向と思われる。深さは約1.5mで、上端幅は不明である。堆積土は6層からなり、堆積土②・④・⑤層からは多量の植物遺体が発出している。特に堆積土④層は、植物遺体が詰まった腐植土層で、直径10cmを越える樹木片、枝、種子、昆虫等が多量に出土した。

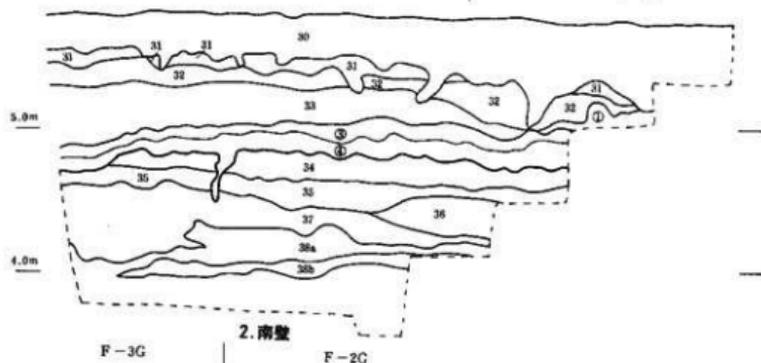
(7) その他の出土遺物(第65図・写真70・71)

基本層1・2・4・8層から土師器片・赤焼土器片・須恵器片・土師質土器片・陶器片・磁器片・瓦片・剥片・石製品・銅製品等が発出した。これらの多数は、細片で図化不可能なものである。1層からは35点出土したが、大半は陶器・磁器である。須恵器2点を除けば全て近世以降のものである。2層からは12点出土した。この内8点までが陶器で、その中には鎌倉時代後半頃の在産の甕、16世紀末頃の唐津産の鉢(第65図3)、江戸時代初期の可能性のある播鉢(第65図2)、江戸時代末以降の相馬産の碗等がある。銅製品は2点出土しており、この内1点は古銭である。腐食のため識別はできないが、近代以降のものと思われる。4層からは土師器が4点のみ出土した。この内2点は、5層水田跡出土の坏と同一のものである。8層か

1. 西壁

D-1G

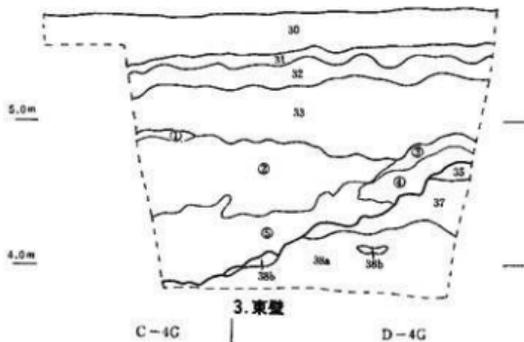
C-1G



2. 南壁

F-3G

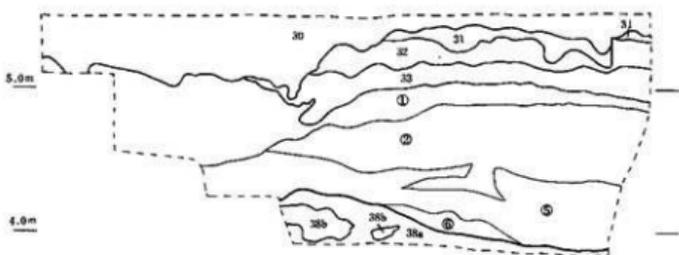
F-2G



3. 東壁

C-4G

D-4G



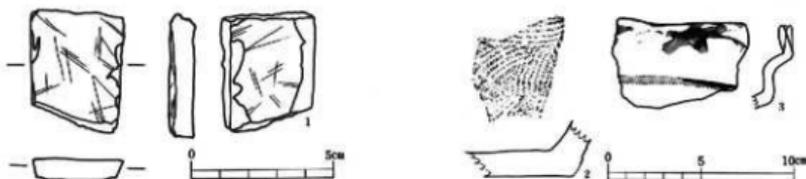
SR1 堆積土

①	オリーブ黒色	3 G Y 5/1	砂	鉄砂層・粘土層が分ち、 $\phi 3$ mmの炭化植物
②	オリーブ灰色	36 C Y 5/2	砂層	5cmの小礫粒化多量・腐植土の細い・多量、樹木片を含む炭化した炭物遺体多量
③	灰色	10 Y 5/1	砂質シルト	$\phi 3$ mmの炭化植物
④	灰色	7.5 Y 4/1	粘土	層中央が炭化植物の影響で黒色化
⑤	オリーブ黒色	5 Y 2/1	粘土	層中央が炭化植物の影響で黒色化
⑥	灰褐色	10 Y R 4/1	腐植土	細い・短手の骨多量・炭化10mm前後の樹木片・枝・骨片等の植物遺体多量
⑦	オリーブ灰色	2.34 G Y 4/1	砂	腐植層・土中に炭物遺体多量

0 2m

第64図 下層調査区西・南・東壁断面図

らは、剥片と石製品が各1点出土した。石製品（第65図1）は、砥石の一部と考えられる。なお、砥石は8層内攪乱より出土しており、上層からの混入の可能性もある。



探出番号	図録番号	遺構・層位	種類	名物	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	材質	備	考
第53回-1	写真79-6	2層落ち土	石製品	砥石?	36.5	32	6.5	7.4	粗粒灰質	裏面に磨痕、上層からの混入の可能性あり	

探出番号	図録番号	遺構・層位	種類	器種	遺存度	詳	備
第53回-2	写真79-2	2層	陶器	すり鉢	小破片	外面：鉄胎、産地不明、江戸時代初期?	
-3	写真79-5	2層	陶器	鉢	約1/4	外面：鉄胎、長石胎、薄厚不均、16c末	

第65図 出土遺物

4. 遺構の所属年代とまとめ

1. 検出遺構としては、3層・5層・6層・12a層・13層の5期の水田跡とSR1がある。また、水田跡の可能性のある層としては、基本層2・4・7層が上げられる。
2. 5期の水田跡の内、5層・6層の各水田跡は耕作土のみの検出である。しかし、両層は富沢遺跡北部A地区基本層序（佐藤：1992）の4a層・5層に対応し、この基本層序に包括される第53次調査区等で畦畔が検出されていることより水田跡と認定した。
3. 12a層水田跡と13層水田跡との関係であるが、12a層水田跡の大畦畔は、13層水田跡の東大畦畔の位置・方向を踏襲し作られている。しかしながら、南北大畦畔については踏襲せず、耕作域も南側のみで、区画方法・耕作域に変化が認められる。
4. 13層水田跡では、大畦畔2条と小畦畔1条からなる3区画の水田跡が検出された。これら区画は、その水田面の比高差より最終区画段階のものではないと推定される。
5. 南に隣接する第52調査区では、標高4.2~4.5mの間に位置する基本層30・31層より植物遺体が出土している。当該調査区34層検出のSR1の堆積土は標高3.9~5.0mに位置しており、多量の植物遺体を出土している。（中富：1990）。標高及び植物遺体の存在より、第52次調査区基本層30・31層はSR1の堆積土の可能性が高い。SR1の所属年代であるが、上層の29層以降年代が5,500年前と推定されている火山灰（山田・庄子：1988）が含まれることより、これより古い年代が与えられる。
6. 検出水田跡の所属年代であるが、出土遺物が皆無、あるいは数量的に乏しいことより、出

土遺物からの時代決定は困難であるが、5層中に灰白色火山灰が混じること、富沢遺跡北部A地区基本層序との層の対応関係が可能であったことより、以下のような所属年代が想定される。

- 3層水田跡-近世
- 5層水田跡-平安時代(灰白色火山灰降下以降)
- 6層水田跡-古墳時代以降、平安時代(灰白色火山灰降下以前)以前
- 12a層水田跡-弥生時代(柵形甕式期以降、十三塚式期以前)
- 13層水田跡-弥生時代(柵形甕式期)

7. 基本層1層から17層までは、富沢遺跡北部A地区基本層序との対応関係が認められる。その対応関係は以下のとおりである。

- | | | | |
|-----------------------|---------------|--------------|--------------|
| • 1層(富沢遺跡北部A地区基本層序1層) | • 2a・b層(同2層) | • 3層(同3a層) | |
| • 4層(同3b層) | • 5層(同4a層) | • 6層(同5層) | • 7層(同8a層) |
| • 8層(同8b層) | • 9層(同9b層) | • 10層(同10a層) | • 11層(同10c層) |
| • 12a層(同10d層) | • 12b層(同10e層) | • 13層(同11層) | • 14層(同12a層) |
| • 15層(同12b層) | • 16層(同13層) | • 17層(同14層) | |

第6節 富沢遺跡第84次調査

1. 調査方法

調査区の設定面積は約 $6.6 \times 4.6\text{m}$ (30.36m^2)である。調査は、盛土及び直下の1層中(旧水田耕作土)までを重機で排除し、以下は人力で行った。調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。13層までは調査区全面の精査を実施し、14層以下は $2 \times 2\text{m}$ の試験区を設けて掘り下げた。遺構の測量は、杭A・Bを基準にして実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している(杭A: $X = -197,652.37\text{m}$ $Y = +4,285.36\text{m}$ 杭B: $X = -197,652.92\text{m}$ $Y = +4,290.33\text{m}$)。

2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に18層が確認された。各層の土質は基本的に粘土が主体であるが粘性が非常に強い。17層からは泥炭質の粘土である。現代のものを除く水田土壌の可能性のあるのは4・6・7・8・10・13層である。6・7・8層で灰白色火山灰を検出している。6・7層では層中にブロック状に含んでおり下層からの巻き上げと考えられる。8層では層の上部に粒子状に含んでいる。全体的な層の傾きはほぼ水平である。



第66図 調査区位置図・設定図

3. 検出遺構と出土遺物

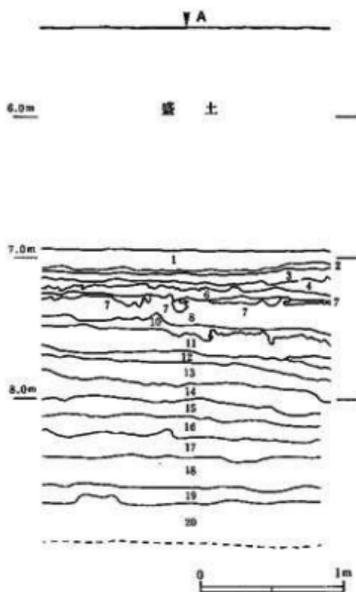
遺構は検出されなかった。遺物は1・3・4・6層中から陶磁器片、土師器等が計20点出土している。いずれも細片であり図示できるものはない。写真72は美濃産の緑釉碗で、時期は17世紀頃のものである。

4. 遺構の所属年代とまとめ

遺構・遺物ともに時期を決定できるものはなく、また、周辺調査区との層位の対応も困難であり、明確な年代は不明である。ただし、6～8層で灰白色火山灰を検出していることから以下のような所属年代の推定が可能である。

7層 平安時代(灰白色火山灰降下以降)～

8層 平安時代(灰白色火山灰降下以前)～



第67図 基本層序

層序	色	調	土質	容率	酸化係	遺 物	本田土層	備 考
1	黄褐色	10YR 5/1	粘土	14	点状	マンガン錠・灰化物片	○	現代の土師器作止
2	黄褐色	10YR 5/4	粘土	3	——	マンガン錠	——	——
3	黄褐色	2.5Y 3/1	粘土	10	点状	マンガン錠・灰化物	?	——
4	黄褐色	2.5Y 3/2	粘土	10	点状	5層をアゾック状	?	下面層しく凸出
5	黄褐色	2.5Y 3/3	粘土	6	——	——	——	——
6	灰色	5Y 4/1	粘土	8	点状	灰白色火山灰	?	——
7	オリーブ黄	5Y 3/1	粘土	8	——	灰白色火山灰(ゾック状)	?	下面凸出
8	にじみ黄褐色	10YR 5/4	粘土	20	点状	灰白色火山灰(層上面に散状)・マンガン錠	?	——
9	黄褐色	10YR 5/1	粘土	10	管状	マンガン錠	——	——
10	黄	10YR 5/1	粘土	10	管状	マンガン錠・11層をゾック状	?	下面凸出
11	黄褐色	10YR 5/6	粘土	18	管管状	マンガン錠少量	——	——
12	灰色	7.5Y 4/1	粘土	10	——	——	——	——
13	黄オリーブ灰	2.5Y 4/1	粘土	10	——	——	——	——
14	灰色	5Y 4/1	粘土	16	——	未分解の植物遺体	——	——
15	オリーブ灰色	5GY 5/1	粘土	10	管状	未分解の植物遺体・灰化物片	——	——
16	黄	7.5Y 2/1	粘土	10	——	未分解の植物遺体(点状)	——	黄にすり、灰色粘土の層
17	黄オリーブ灰	2.5G 4/1	粘土	15	——	未分解の植物遺体・灰化物片	——	——
18	黄オリーブ	7.5Y 4/2	粘土	22	——	未分解の植物遺体	——	——
19	黄オリーブ	5Y 3/1	シルト質粘土	10	——	植物遺体	——	黄色泥炭層粘土と互層
20	黄	10YR 1.7/1	泥炭質粘土	——	——	——	——	——

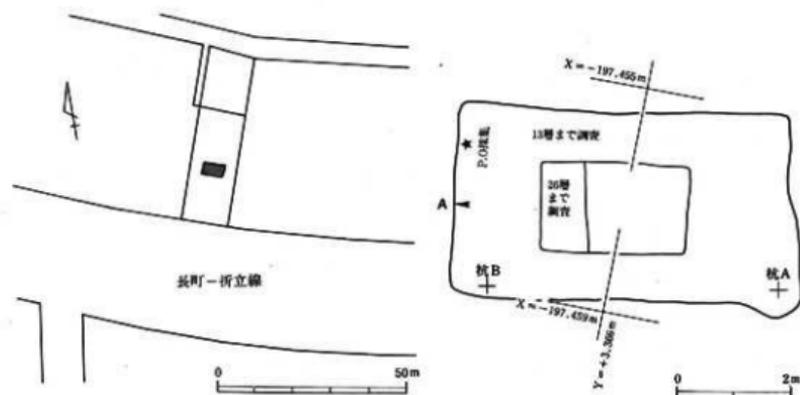
第7節 富沢遺跡第85次調査

1. 調査方法

調査区の設定面積は当初は 6×7 mであったが、南側に後世の攪乱を受けていることが判明したので約 6×3.5 m (21 m^2)で行った。調査は、盛土及び直下の1層中(旧水田耕作土)までを重機で排除し、以下は人力で行った。調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。13層までは調査区全面の調査を実施し、14層以下は 1.5×0.8 mの試験区を設けて掘り下げた。遺構の測量は、杭A・Bを基準にして実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している(杭A: X=-197,455.95m Y=+3,368.88m 杭B: X=-197,455.08m Y=+3,363.96m)。

2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に26層が確認された。各層の土質は基本的にシルト質粘土が主体であるが、5・6・11・15・19層は粘土、7層・10層は細砂になっている。17層以下はグライ化が顕著である。25層は腐食粘土層で枝、葉等を含んでいる。現代のものを除く水田土壌の可能性のあるのは、3・4・5・6・9層である。4層は下面の凸凹が著しく、層中に灰白色火山灰を含んでいるが下層からの巻き上げと考えられる。全体的な層の傾きはほぼ水平である。



第68図 調査区位置図

3. 検出遺構と出土遺物

(1) 3層上面

1号・2号土坑跡-SK1・2-

(第70図)

3層上面で検出した。いずれも不整楕円の平面形を呈しており、断面形はすり鉢状である。堆積土は1層で、遺物は出土しなかった。

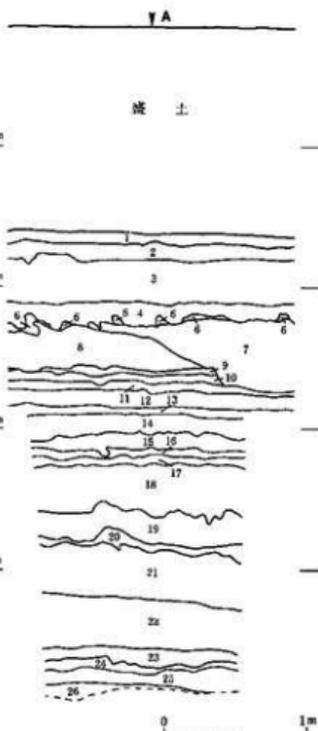
(2) その他の出土遺物

2・3・7・8層中から陶器片、磁器片、土師器片、須恵器片等が計10点出土しているが、図示できるものはない。磁器・陶器は2・3層中から7点出土しており、いずれも近世以降である。

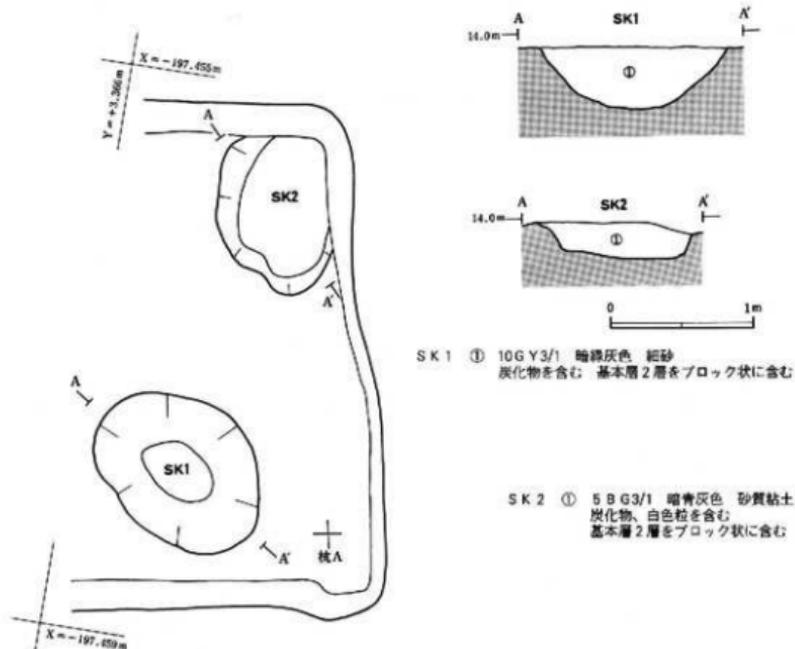
(3) 下層の調査

旧石器時代に相当する層の調査は、1.5×0.8mの調査区を設けて14層から26層まで実施した。しかし、縄文時代の遺物の出土や特徴的な層の確認もできなかったので、どの層から旧石器時代に相当するかは判断しがたいが、24層から腐食した植物遺体、25層から枝・葉を検出した。

第69図 基本層序



層序	色	調査	土質	層厚	特徴	出土物	水田跡	備考
1	オレンジ	7.5V3/1	砂質粘土	15	---	鉄	---	---
2	オレンジ	2.5Y2/2	砂質シルト	12	---	炭化物片・白色粒・もみがり片	(?)	初水田耕作
3	灰色	7.5V4/1	砂質シルト	30	水田跡	炭化物片・白色粒	---	土田耕作の開始
4	黒	2.5Y2/1	砂質シルト	14	点状	炭化物片・土層をブツブツ状マツコシ粒・白色粒・灰白色火山灰(粒状)	?	下層に凸凹
5	黒褐色	10Y R2/2	粘土	6	---	---	?	部分的分布
6	褐色	10Y R4/1	粘土	4	---	磁器片・マンガン粒	?	---
7	ぶどう色・黒褐色	10Y R5/2	砂質	15	腐葉土・腐花	炭化物(腐葉)・粘土	---	腐葉土に腐葉土が堆積
8	オレンジ	5Y2/2	砂質粘土	20	白色粒	---	---	堆積する堆積の黒色粒上
9	黒	5Y2/1	シルト質粘土	8	---	---	---	すりすり編み
10	オレンジ	10Y3/2	砂質	10	---	植物遺体・炭化物片・直径5mmの粘土塊をブツブツ状を含む	---	---
11	オレンジ	7.5Y4/2	粘土	6	---	植物遺体・マンガン粒	?	下層に凸凹・腐葉を腐葉土含む
12	黒	10Y R1.7/1	シルト質粘土	9	---	植物遺体・火山灰の粒	---	---
13	黒褐色	2.5Y3/1	シルト質粘土	3	---	植物遺体・火山灰の粒	---	---
14	黒褐色	2.5Y4/1	砂質シルト	14	---	植物遺体・炭化物片・もみ・黒色の砂質粒	---	---
15	灰色	5Y4/1	粘土	12	---	腐食植物遺体(多数)・磁器片・白色粒(多数)	---	---
16	黒褐色	2.5Y3/1	シルト質粘土	4	---	植物遺体・炭化物片・マンガン粒・もみ(多数)の砂質粒	---	---
17	オレンジ	2.5Y2/1	砂質シルト	5	---	植物遺体(多数)・磁器片・白色粒・マンガン粒	---	---
18	オレンジ	5Y6/1	砂質シルト	30	---	---	---	1層産腐葉土(粘土)・アライ化
19	緑褐色	10G5/1	粘土	20	---	植物遺体	---	層の下層に5-10mmの明瞭な粘土(130G2/1)をブツブツ状を含む・アライ化
20	暗褐色	10G Y5/1	シルト質粘土	6	---	植物遺体	---	アライ化
21	明緑灰色	10G3/1	シルト質粘土	33	---	植物遺体	---	アライ化
22	緑灰色	9G5/1	シルト	35	---	植物遺体・マンガン粒・炭化物片	---	非常に細かいシルト質粘土と砂質シルトの混層・アライ化
23	緑灰色	10G5/1	砂質シルト	10	---	植物遺体	---	非常に細かいシルト質粘土と砂質シルトの混層・アライ化
24	黄褐色	3.5Y6/1	シルト質粘土	8	---	腐食した木炭、植物遺体	---	腐食した木炭・植物遺体
25	灰オレンジ	7.5Y4/2	粘土	12	---	樹皮・枝・葉	---	アライ化
26	灰オレンジ	7.5Y3/2	シルト質粘土	---	---	植物遺体	---	アライ化



第70図 SK1・2平面図・断面図

4. 所属年代とまとめ

1. 検出遺構はSK1・2のみで、性格は不明である。他には層相観察より3・4・5・6・9層は水田土壌の可能性が考えられる。
2. 各層の所属年代であるが、出土遺物が少ないことや、周辺の調査区との対応も困難であるので、かなり時間的に幅のある想定しかできないが、以下のとおりである。
 - 2・3層 近世以降
 - 4層 平安時代（灰白色火山灰降下以降）～近世
3. 旧石器時代に相当すると考えられる層のうち、24・25層で植物遺体（枝・葉）が出土している。

第3章 分析

第1節 富沢遺跡（第78次調査）の花粉分析

守田 益宗

1. 分析試料について

富沢遺跡の第78次調査区は旧石器時代の遺物の出土した第30次調査区の北西に位置している。本調査区では、下層部より縄文時代の河川跡が見いだされ、その河川堆積物中からは樹木遺体も見つかっている。本報告は、当時の河川周辺の植生について、花粉分析の立場から検討を加えたものである。

花粉分析用試料は、18層、SD11層、21層よりそれぞれ1試料を採取した。試料の採取地点とその層位は第22図のとおりである。花粉・胞子の同定および出現率の算出は、これまでの報告と同様に行なった（守田、1988など）。

2. 結果および考察

検出された花粉・胞子は表4に示したように、高木花粉16種類、低木花粉11種類、草本花粉12種類、シダ胞子3種類である。

21層とSD11の花粉出現率は、*Quercus*が最優勢で*Fagus*、*Carpinus*、*Ulmus-Zelkova*がこれに次いで多い。こうした花粉組成は、いわゆる中間温帯と呼ばれる地域の落葉広葉樹林の特徴を示すものである。縄文時代と現在では気候条件が同じとは言えないが、また、植物の分布が全く異なるほど気候条件が違っていただけでもないで、検出された高木花粉のうち出現率の比較的高い*Fagus*、*Quercus*、*Carpinus*、*Ulmus-Zelkova*、*Aesculus*は、現植生と比較してそれぞれ以下の植物から由来したものと判断される。すなわち、*Fagus*はブナ、イヌブナ、*Quercus*の大部分はコナラ、ミズナラ、*Ulmus-Zelkova*はケヤキとハルニレからのものである。*Aesculus*はトチノキであり、この樹種は川や谷沿いなど傾斜のゆるい湿気のある肥沃地を好む傾向がある。*Carpinus*はイワシデを除く全てのシデ類が考えられるが、河道近くであることを考えるとサワシバの花粉を多く含んでいる可能性がある。したがって、当時の植生は、現在の中間温帯域丘陵地下部の小河川や小さな谷沿い付近のようにやや湿性な立地に見られる落葉広葉樹林が存在したと考えることができる。なお、SD11では*Thesium*と*Haloragis*が1粒ではあるが検出されている。これらは日当たりの良い生育密度の低い草地または半裸地に生育する植物であり、前者は半寄生植物で花粉生産量・散布力が極めて小さいと考えられるものである。したがって、当時、遺跡付近

にそのような土地があったことをうかがわせる。

18層では *Carpinus* が最優勢であるが、これの花粉塊がかなり認められたことから局所的に生育していたシデの影響と見ることができる。*Carpinus* を除けば他の樹種の花粉は 21・SD11層と同様な組成であることから、ほぼ同様な植生が18層堆積時にも存在していたとみて良いであろう。

引用文献

守田益宗 (1988) : 富沢遺跡 (第28次調査) の花粉分析, 「富沢遺跡第28次発掘調査報告書」
 仙台市教育委員会, 97~113.

学名	和名	18層		SD11		21層	
		個数	出現率	個数	出現率	個数	出現率
<i>Pinus</i>	マツ属	4	1.3%	7	2.4%	1	0.3%
<i>Abies</i>	モミ属	1	0.3%				
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	2	0.7%	2	0.7%	1	0.3%
Cupressaceae-Taxaceae	ヒノキ科・イチイ科	2	0.7%	1	0.3%	2	0.6%
<i>Pterocarya</i>	サワグルミ属	4	1.3%	2	0.7%	7	1.9%
<i>Juglans</i>	クルミ属	9	2.9%	3	1.0%	9	2.5%
<i>Betula</i>	シラカンバ属	5	1.6%			5	1.4%
<i>Carpinus</i>	クヌシ属	113	36.9%	47	16.3%	20	5.5%
<i>Fagus</i>	ブナ属	21	6.9%	13	5.2%	14	3.9%
<i>Quercus</i>	コナラ亜属	89	29.1%	143	49.7%	215	59.2%
<i>Cyclobalanopsis</i>	アカガシ亜属	2	0.7%	1	0.3%		
<i>Castanea</i>	クリ属	7	2.3%	7	2.4%	4	1.1%
<i>Ulmus-Zelkova</i>	ユレバシ・ケヤキ属	19	6.2%	10	3.5%	28	7.7%
<i>Celtis-Aphananthe</i>	ホノキ属・ムタノキ属			2	0.7%	2	0.6%
<i>Acer</i>	カエデ属	8	2.6%	5	1.7%	14	3.9%
<i>Aesculus</i>	トチノキ属	20	6.5%	43	14.9%	41	11.3%
<i>Myrica</i>	ヤブモヤシ属			1	1.5%		
<i>Corylus</i>	ハシバミ属			5	7.4%	2	3.2%
<i>Alnus</i>	ハンノキ亜属	10	10.9%	7	10.3%	8	12.9%
<i>Alnus</i>	ヤシブシロ亜属	1	1.1%	1	1.5%	4	6.5%
Theaceae	ツバキ科	16	17.4%			14	22.6%
<i>Fagrus</i>	サンショウ属			1	1.5%		
<i>Rhus</i>	ウルシ属	1	1.1%	3	4.4%		
<i>Ilex</i>	ホトトギス属		1.1%				
<i>Cornus</i>	コズキ属	1	1.1%			2	3.2%
Araliaceae	ウコギ科	5	5.4%	3	4.4%		
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	4	4.3%	1	1.5%	10	16.1%
Gramineae	イネ科	12	13.0%	13	19.1%	3	4.8%
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	1.1%	1	1.5%		
Liliaceae	ユリ科	1	1.1%				
Moraceae	タモ科	4	4.3%	3	4.4%		
<i>Thesium</i>	カナビネソウ属			1	1.5%		
Ronaceae	ミズナ科	1	1.1%	3	4.4%	1	1.6%
<i>Haloragis</i>	アリノトウグサ属			1	1.5%		
Umbelliferae	セリ科	1	1.1%			1	1.6%
Labiatae	シソ科			1	1.5%		
<i>Plantago</i>	オオバコ属			1	1.5%		
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	3	3.3%	6	8.8%	11	17.7%
other Compositae	他のヤブ科			2	2.9%		
1-lete type FS	単葉薄葉シデ胞子	19	20.7%	13	19.1%	5	8.1%
3-lete type FS	三葉薄葉シデ胞子	1	1.1%				
Osmundaceae	ゼンマイ科	1	1.1%	1	1.5%		
Trees	高木花粉	306	69.9%	288	71.5%	363	78.7%
Shrubs	低木花粉	47	10.7%	22	5.5%	41	8.9%
Herbs	草本花粉	24	5.5%	32	7.9%	16	3.5%
Ferns	シデ胞子	21	4.8%	14	3.5%	5	1.1%
Unknown	不明	40	9.1%	47	11.7%	36	7.8%

第5表 花粉・胞子出現表

第2節 富沢遺跡第78次調査放射性炭素年代測定

古環境研究所

富沢遺跡（第78次調査）から出土した試料について年代測定を行った。その結果を次表に示す。なお、年代値は1950年よりの年数（B.P.）である。

年代値の算出には ^{14}C の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用している。また、付記した誤差は β 線の計数値の標準偏差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代である。また、試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限の年代値（B.P.）として表示してある。また、試料の β 線計数率と現在の標準炭素（MODERN STANDARD CARBON）についての計数率との差が 2σ 以下のときは、Modernと表示し、 $\delta^{13}\text{C}\%$ を付記してある。

富沢遺跡（第78次調査）出土試料の放射性炭素年代測定結果

試料No.	出土地点	種類	年代値	コードNo.
	縄文時代の河川堆積土中	樹木	4540 \pm 100 (B. C. 2590)	Gak-16238

第3節 富沢遺跡第78次・80次～85次調査プラント・オパール分析

古環境研究所

1. はじめに

富沢遺跡第78次、80次、81次、82次、83次、84次、85次調査では、発掘調査において水田層および水田層と見られる土層が各々で検出されていた。この調査は、プラント・オパール分析を用いて、各調査について稲作跡の検証と探査を行ったものである。

2. 試料

試料は、遺跡の調査担当者によって採取され、当研究所に送付されたものである。なお、採取にあたっては容量50cm³の採土管が用いられた。図1に、土層断面図と分析試料の採取箇所を示す。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料土の絶乾（105℃・24時間）、仮比重測定
- (2) 試料土約1gを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm、約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
- (5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重と各植物の換算計数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁻⁶g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算計数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実重は1.03）、6.31、0.48である（杉山・藤原，1987）。

4. 分析結果

プラントオパール分析の結果を表1および図2、図3に示す。なお、稲作跡の探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウツクサ族、キビ族の主要な5分類群に限定した。巻末に各分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 考察

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、イネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と多量に検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、仙台市内の遺跡では、これまでの調査の結果、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出されていることから、ここでは判断の基準となる値を3,000個/gとした。なお、当該層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考え難くなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。この判断基準にもとづいて、稲作の可能性を3段階に区分して表2に示した。

(1) 第78次調査

本地点では、5層、6層、7層、8a層、13層、14層、15-1層、16層、18層から採取された試料について分析を行った。その結果、すべての試料からイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの各層で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、5層、14層、15-1層ではプラント・オパール密度が3,500～6,500個/gと高い値であり、それぞれピークが認められた。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。

(2) 第80次調査

本地点では、3a層、3b層、4層、8b層、9a-1層、9a-2層、9a-3層、9b-1層、9b-2層、10層から採取された試料について分析を行った。その結果、3a層、3b層、8b層、9a-1層、9a-2層、9a-3層においてイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの各層で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、9a-1層では密度が3,000個/g、9a-2層では密度が8,000個/gとそれぞれ高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(3) 第81次調査

No.1地点では、7層、8層、9層、10層、11層、12層、13層から採取された試料について分析を行った。その結果、7層を除く各層からイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの各層で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、9層、10層、11層では密度が3,200～4,500個/gと高い値であり、ピークが認められた。したがって、これらの

層で稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

№2地点では、7層、8層、9層、10層、11層、13層から採取された試料について分析を行った。その結果、7層、9層、10層においてイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの各層で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、9層では密度は2,900個/gと比較的高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって、同層で稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(4) 第82次調査

本地点では、1層、2層、3層、4層、5層、6層、7層、8層、9層、10層から採取された試料について分析を行った。その結果、6層と8層を除く各層からイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの各層で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、1層～3層で検出されたプラント・オパールは比較的最近の水田耕作によるものと考えられる。4層と9層では密度が5,000個/g以上と高い値であり、それぞれ明瞭なピークが認められた。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(5) 第83次調査

№1地点では、8層、9層、10層、11層、12b層、13層から採取された試料について分析を行った。その結果、8層、9層、13層においてイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの各層で稲作が行われていた可能性が考えられる。

№2地点では、6層、7層、8層、9層、10層、11層、12a層、13層から採取された試料について分析を行った。その結果、10層と11層を除く各層からイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの各層で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、6層と7層では密度が4,400個/g、5,000個/gと高い値である。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(6) 第84次調査

本地点では、3層、4層、5層、6層、7層、8層、9層、10層、11層、13層から採取された試料について分析を行った。その結果、5層を除く各層からイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの各層で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、3層では密度が12,400個/gと非常に高い値であることから、同層で稲作が行われていた可能性が極めて高いと考えられる。4層、6層、7層、8層、10層では、密度が3,000～7,600個/gと高い値であり、それぞれピークが認められた。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(7) 第85次調査

本地点では、2層、3層、4層、5層、6層、8層、9層、10層、11層から採取された試料

について分析を行った。その結果、2層～6層と9層においてイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの各層で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、2層で検出されたプラント・オパールは比較的最近の水田耕作によるものと考えられる。3層、4層、6層、9層では密度が3,400～5,200個/gと高い値であり、それぞれピークが認められた。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

6. まとめ

富沢遺跡の第78次、80次、81次、82次、83次、84次、85次調査についてプラント・オパール分析を行い、稲作跡の検証および探査を試みた。その結果、水田遺構が検出された第80次調査の9a-1層、第81次調査の11層、第83次調査の13層では、イネのプラント・オパールが多量に検出され、同遺構で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、水田の可能性が考えられていた層では、第80次調査の9a-2層と第85次調査の11層を除くすべての層で稲作が行われていた可能性が認められた。さらに、水田の可能性は考えられていなかったものの、78次調査の14層、81次調査の9層と10層、84次調査の3層と8層、85次調査の9層で稲作が行われていた可能性が高いと判断された。なお、第80次調査の9a-3層、第83次調査の8層および第84次調査の11層については、密度が600～800個/gと低い値である。プラント・オパール密度が低い原因としては、①稲作が行われていた期間が短かったこと、②土層の堆積速度が速かったこと、③上層もしくは近辺の水田からの混入によるものであること、などが考えられるが、ここでの原因は不明である。

参考文献

- 杉山真二・藤原宏志 (1987) 川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析. 赤山—古環境編—, 川口市遺跡調査会報告, 10: 281-298.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9: 15-29.
- 藤原宏志 (1979) プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ (*O. sativa* L.) 生産総量の推定—. 考古学と自然科学, 12: 29-41.
- 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—. 考古学と自然科学, 17: 73-85.

78次調査

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(物総量) t/10a	コシ属 個/g	タケ茎科 個/g	ウシタマシ族 個/g	キビ族 個/g
5	17	12	1.13	6,300	8.78	3,500	13,900	2,300	0
6	29	5	1.07	1,700	0.93	7,100	26,600	1,700	0
7	34	4	1.23	2,400	1.19	1,600	10,700	800	0
8	38	6	1.26	2,200	1.67	2,200	23,700	0	0
13	44	6	1.33	1,700	1.36	1,700	18,400	0	0
14	50	5	1.19	6,500	3.97	5,800	22,500	3,600	700
15 1	55	10	1.12	2,900	3.30	10,600	19,300	900	0
15 2	65	7	1.06	3,500	3.81	4,400	28,500	800	0
16	75	7	1.07	1,600	1.23	10,900	16,000	800	0
18	82	35	1.01	800	2.88	2,400	19,800	800	0

80次調査

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(物総量) t/10a	コシ属 個/g	タケ茎科 個/g	ウシタマシ族 個/g	キビ族 個/g
3a	18	5	0.50	2,400	0.62	6,600	800	0	0
3b	23	7	0.62	1,400	0.58	4,200	8,500	700	0
4	30	26	0.56	0	0.00	3,600	9,900	0	0
8b	56	4	0.21	800	0.04	4,300	2,600	0	0
9a-1	60	7	0.53	3,000	1.15	2,300	4,600	0	0
9a-2	67	3	0.50	8,000	1.21	7,100	5,200	800	0
9a-3	67	5	0.58	600	0.15	2,000	6,800	0	0
9b-1	69	3	0.45	0	0.00	2,200	3,700	0	0
9b-2	72	3	0.61	0	0.00	2,300	5,400	0	0
10	75	10	0.49	0	0.00	14,900	3,100	700	0

81次調査No.1

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(物総量) t/10a	コシ属 個/g	タケ茎科 個/g	ウシタマシ族 個/g	キビ族 個/g
7	29	15	0.42	0	0.00	3,600	6,500	0	0
8	44	4	0.41	700	0.08	4,300	6,800	0	0
9	48	14	0.13	3,500	0.58	4,200	4,200	0	1,400
10	62	4	0.34	4,500	0.62	6,800	1,500	700	0
11	66	2	0.30	3,200	0.19	11,300	3,200	0	0
12	68	4	0.23	700	0.04	11,400	3,500	0	0
13	72	13	0.20	1,400	0.27	37,200	2,900	0	0

81次調査No.2

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(物総量) t/10a	コシ属 個/g	タケ茎科 個/g	ウシタマシ族 個/g	キビ族 個/g
7	32	13	0.29	800	0.27	11,200	2,500	0	0
8	45	4	0.40	0	0.00	800	2,400	0	0
9	49	15	0.18	2,900	0.77	11,600	5,000	700	0
10	64	5	0.36	1,600	0.26	8,200	5,800	0	0
11	69	6	0.28	0	0.00	8,200	800	0	0
13	75	7	0.22	0	0.00	7,400	2,000	0	0

第6表 プラント・オパール分析結果(1)

82次調査

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(粉総量) t/10a	ロシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	ヤビ族 個/g
1	0	6	0.72	30,700	13.68	1,900	21,800	900	0
2	6	4	0.73	8,400	2.51	3,300	16,900	1,600	0
3	10	9	0.88	4,200	3.34	1,000	20,300	1,000	0
4	19	23	0.69	6,200	9.95	1,500	20,200	0	0
5	42	5	0.52	1,400	0.36	5,100	8,100	0	0
6	47	5	0.34	0	0.00	11,200	4,500	2,200	1,500
7	52	6	0.60	1,500	0.56	2,300	9,500	0	0
8	58	7	0.61	0	0.00	7,600	3,200	0	0
9	65	12	0.45	5,000	2.72	16,600	4,100	0	0
10	77	18	0.58	1,600	1.67	800	12,200	0	0

83次調査No 1

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(粉総量) t/10a	ロシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	ヤビ族 個/g
8	29	9	0.90	700	0.56	7,900	700	0	0
9	38	7	0.79	1,500	0.79	3,000	11,300	0	0
10	45	7	0.37	0	0.00	20,800	1,700	1,700	0
11	52	7	0.56	0	0.00	0	6,700	0	0
12b	59	6	0.72	0	0.00	3,300	12,600	0	0
13	65	5	0.40	2,200	0.41	8,300	8,300	1,500	0

83次調査No 2

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(粉総量) t/10a	ロシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	ヤビ族 個/g
6	30	3	0.90	5,000	1.36	3,600	7,900	700	0
7	42	7	0.87	4,400	2.74	1,400	8,100	0	0
8	49	4	1.83	800	0.58	2,600	5,200	0	0
9	53	7	0.89	1,600	1.01	800	16,000	0	0
10	60	7	0.73	0	0.00	7,900	12,300	800	0
11	67	6	0.77	0	0.00	1,500	5,200	0	0
12a	73	4	0.68	2,100	0.58	700	5,700	0	0
13	77	4	0.36	2,900	0.41	2,900	8,100	0	0

84次調査

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(粉総量) t/10a	ロシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	ヤビ族 個/g
3	14	6	1.00	12,400	7.66	0	15,000	0	0
4	20	5	0.85	6,800	2.94	2,500	17,200	0	0
5	25	4	0.80	0	0.00	1,700	6,200	0	0
6	29	7	0.85	3,800	2.31	3,800	11,500	700	0
7	36	5	0.90	3,700	1.70	3,700	10,400	0	0
8	41	10	0.92	3,000	2.78	700	12,300	0	0
9	51	12	0.94	2,800	3.21	0	9,900	0	0
10	63	11	0.91	7,600	7.82	3,300	13,500	0	0
11	74	20	0.96	800	1.44	0	13,400	0	0
13	94	10	0.87	2,500	2.16	4,200	10,200	0	0

85次調査

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(粉総量) t/10a	ロシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	ヤビ族 個/g
2	13	6	1.20	6,100	4.51	2,600	13,900	0	0
3-1	19	8	1.23	3,400	3.38	0	18,200	800	0
3-2	27	7	1.18	1,600	1.30	0	17,900	800	0
4	34	11	1.29	4,500	6.57	1,500	15,300	0	0
5	45	7	1.20	2,400	2.02	4,000	14,400	800	0
6	52	15	1.21	5,000	9.27	700	20,100	0	0
8	67	15	1.11	0	0.00	0	17,400	800	0
9	82	8	1.19	5,200	5.03	0	16,600	800	0
10	90	4	0.89	0	0.00	800	29,000	0	0
11	94	10	0.87	0	0.00	7,200	16,100	1,600	0

第7表 プラント・オパール分析結果(2)

〈記号説明〉

○印…3,000個/g以上（稲作の可能性大）

△印…3,000個/g未満（稲作の可能性有）

×印…検出されず

78次調査

層名	可能性	備考
5	○	水田?
6	△	
7	△	
8	△	水田?
13	△	
14	○	
15-1	△	水田?
15-2	○	
16	△	水田?
18	△	

80次調査

層名	可能性	備考
3 a	△	水田?
3 b	△	水田?
4	×	
8 b	△	
9 a-1	○	水田
9 a-2	○	水田?
9 a-3	△	水田?
9 b-1	×	水田?
9 b-2	×	
10	×	

81次調査No.1

層名	可能性	備考
7	×	
8	△	
9	○	
10	○	
11	○	水田
12	△	
13	△	

81次調査No.2

層名	可能性	備考
7	△	
8	×	
9	△	
10	△	
11	×	水田
13	×	

82次調査

層名	可能性	備考
1	○	旧水田
2	○	
3	○	水田?
4	○	水田?
5	△	
6	×	
7	△	水田?
8	×	
9	○	水田?
10	△	

83次調査No.1

層名	可能性	備考
8	△	
9	△	
10	×	
11	×	
12 b	×	
13	△	水田

83次調査No.2

層名	可能性	備考
6	○	水田
7	○	水田?
8	△	
9	△	
10	×	
11	×	
12 a	△	水田
13	△	

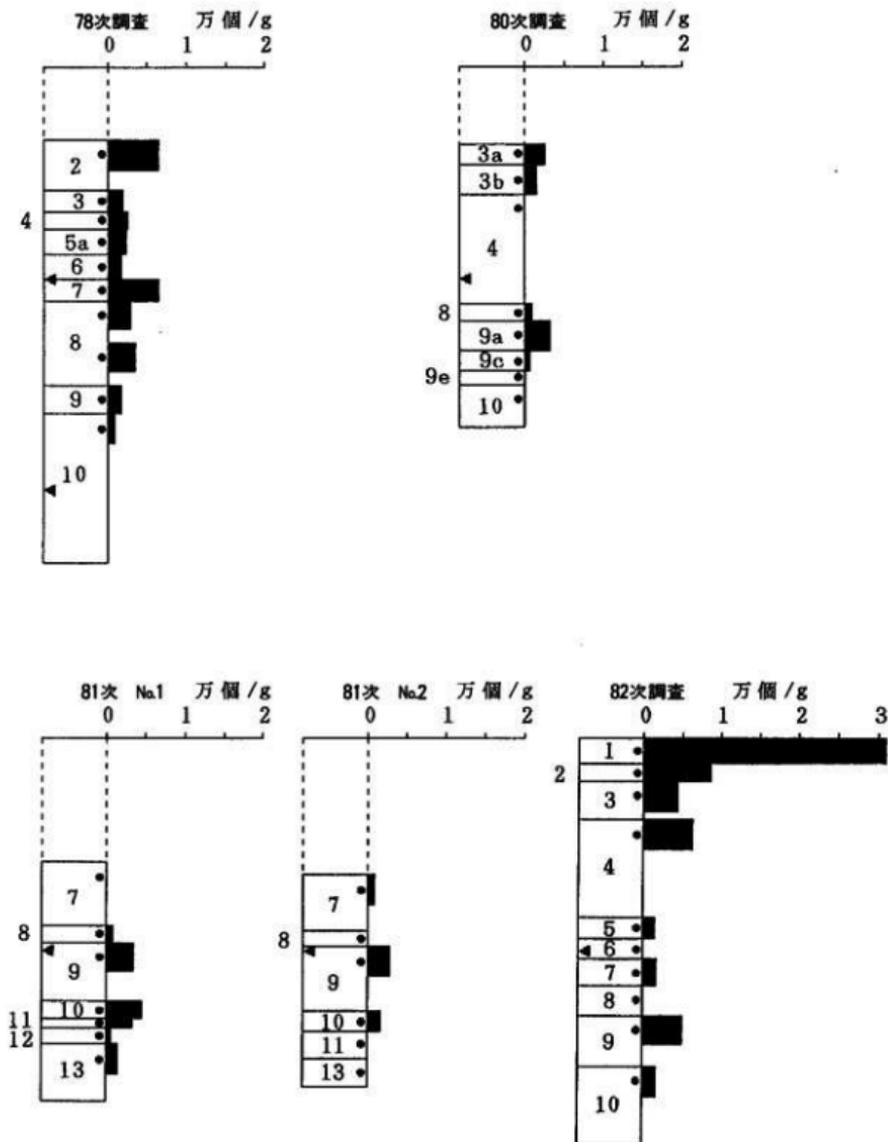
84次調査

層名	可能性	備考
3	○	
4	○	水田?
5	×	
6	○	水田?
7	○	水田?
8	○	
9	△	
10	○	水田?
11	△	
13	△	水田?

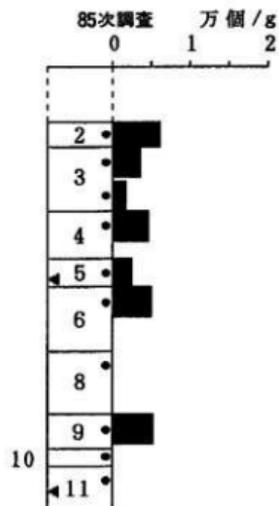
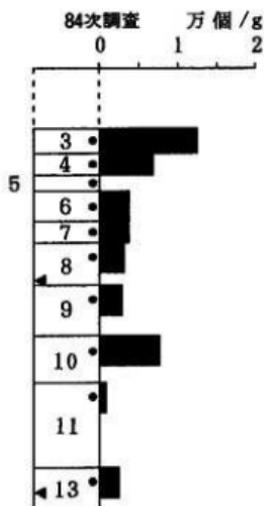
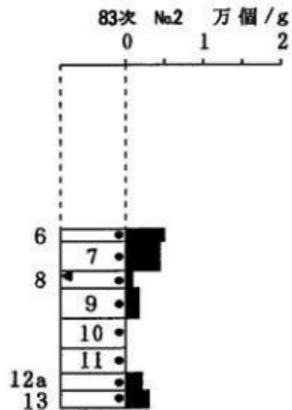
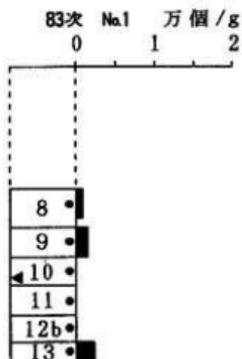
85次調査

層名	可能性	備考
2	○	水田?
3-1	○	水田?
3-2	△	
4	○	水田?
5	△	水田?
6	○	水田?
8	×	
9	○	
10	×	
11	×	水田?

第8表 各層におけるイネのプラント・オパール密度と稲作の可能性



第71図 イネのプラント・オパールの検出状況(1)
 (注) ◀印は50cmのスケール、●印は分析試料の採取箇所



第72図 イネのプラント・オバールの検出状況(2)
 (注) ◀印は50cmのスケール、●印は分析試料の採取箇所

第4章 まとめ

今年度は、富沢遺跡で7箇所で開催されている(78次調査は雑年の調査である)。それぞれの調査成果については第3章までに述べてきているが、ここではこれらの調査成果とこれまでの調査との関連性などについて述べることにする。

1. 旧石器時代

・旧石器時代に相当する層の調査は、第82次・85次調査で行われている。しかし、樹木や葉などの自然遺物が検出されているだけで(第85次調査)、遺構や人工遺物が検出されたわけではない。また、これらの層の年代は周辺の調査との対応関係からの想定であるので、後期旧石器時代に相当する層の可能性があるとだけ指摘しておきたい。

2. 縄文時代

- ・第78次調査で縄文時代の河川跡(SR1)が1条検出されている。出土した樹木から放射性炭素による年代測定が行われ、4540±100(B.P.)との年代が示されており、縄文時代後期頃の河川であると考えられる。
- ・第82次調査では、14層、15a層から磨石が出土している。これらは泥炭質粘土層からの出土で、隣接する第30次調査13・14・15層との対応が想定されている。

3. 弥生時代

・第80次調査、第81次調査、第83次調査で水田跡が検出されている。これらは、富沢遺跡北部A地区(佐藤:1992)に位置し調査件数の多い地区であり、各水田跡からは時代を決定遺物は出土していないが、これまでの調査成果からそれぞれの所属年代は次のように考えることができる。特に、第80次調査で検出された小区西水田は、この時期の特徴的な水田形態のひとつといえよう。

樹形甕式期

第81次調査11層水田跡・第83次調査13層水田跡

樹形甕式期～十三塚式期

第80次調査9層水田跡・第83次調査12a層水田跡

4. 古墳時代

・第78次調査では、明確な遺構は検出されなかったがTK216前後の須恵器甕が出土している。富沢遺跡では最も古い時期の須恵器であり、周辺の裏町古墳、大野田古墳群との関連が考えら

れている。

- ・第81次・83次調査では、古墳時代から平安時代（灰白色火山灰降下以前）と幅があるが水田跡が検出されている。
- ・第82次調査では、遺物の出土はみられなかったが第30次調査との関連から古墳時代と考えられる溝が検出されている。

5. 平安時代

- ・第81次・83次調査で平安時代（灰白色火山灰降下以降）の水田跡が検出されている。

6. 中・近世

- ・第78次調査では、5層上面で溝跡7条・土坑2基・河川跡1条が検出されている。これらの内溝跡は並行するものが多く水田に伴う水路の可能性が指摘されている。時期は遺物が少ないので幅を持ったものである。
- ・第81次調査では、近世頃と考えられる水田跡が検出されている。しかし、これは耕作土のみの検出であるが、富沢遺跡北部A地区基本層序との対応から水田跡と認定されている。
- ・第83次調査では近世に想定される水田跡が検出されている。

富沢遺跡第78次調査出土遺物集計表

遺構・層位	土器器	赤陶土器	灰土器	須恵器	瓦質土器	判別不能の 著述土器	陶器	磁器	瓦	土製品	石器	金属製品	杖	種子	その他
2層	1														
4層	1														
5層	6			6			1								
6層	3			3			1	1							
7層	3														
9層	13			25											
10層	1			1						1	1				1
12層	77			12											
15層															
18層	1														
19層	17														
20層	14			5											
21層	2														
22層										1					2
24層	1														
SD1	1									1					
SD2	1														
SD3	1			2			5	2	2		1				4
SD4	2														1
SD7	2														
SD8	55			8											
SD10	3														
SD11	1														
SD18	1									1					
SD22	1														
SD23	1														
SD28															
SK3				1											
SK7	2			1											
SK12	1														
SR2	10			4			7	3			2				
1層	5			11				6			2				
計	218			79			20	6	3	1	4	5	2	1	8

富沢遺跡第80次調査出土遺物集計表

遺構・層位	土器器	赤陶土器	灰土器	須恵器	瓦質土器	判別不能の 著述土器	陶器	磁器	瓦	土製品	石器	金属製品	杖	種子	その他
2層							2	1	1			1			
3層	3			1			3	5			3	4			1
9層															4
SD4	1						1	1						2	
計	4			1			6	7	1			5		2	5

富沢遺跡第81次調査出土遺物集計表

層位・遺構	土師器 (調査不明)	赤焼土器	須恵器	土師土器	陶	磁	石	瓦	鉄
1層	1			1	2	1			
2層			1						
3層水田跡		1	1						
4層水田跡	1		4						1
5層									
5a層							1		
計	2	1	6	1	2	2	1	1	1

富沢遺跡第82次調査出土遺物集計表

層位・遺構	須恵器陶	磁	石	製品
1層		2	4	1
4層	1			
14層				1
15a層				1
計	1	2	4	3

富沢遺跡第83次調査出土遺物集計表

層位・遺構	土師器 (調査不明)	須恵器	赤焼土器	須恵器	1層瓦(1部)	瓦類(1部)	陶	磁	瓦	土製品	石製品	古銭その他	木製品	鉄
1層	1			2	3	1	19	6	3	1				
2層	10	7	1	1			8				2	1	1	
3層水田跡	3	1		7			1							3
4層														
5層水田跡	9	1		2						1				
6層水田跡	3										1			
8層														
12層水田跡													1	
計	23	12	2	11	3	1	28	6	3	2	5	1	1	3

富沢遺跡第84次調査出土遺物集計表

層位・遺構	土師器 (調査不明)	陶	磁	石	鉄
1層			4	4	
3層	2	1		1	R
4層					
6層	7				
計	10	1	4	5	8

富沢遺跡第85次調査出土遺物集計表

層位・遺構	上須恵	須恵器陶	磁	石	鉄
1層			1	3	
2層			3	1	
3層		1			1
7層					
8層	1	1			
SK1					
計	1	2	5	5	1

—引用文献—

- 荒井 格 1984 「富沢水田遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第69集
仙台市教育委員会
- 大阪府教育委員会 『陶邑』Ⅰ～Ⅲ
- 太田昭夫他 1991 『富沢遺跡第30次発掘調査報告書—第1分冊縄文時代～近世—』仙台市文化財調査報告書第149集
仙台市教育委員会
- 金森安孝 1984 「富沢水田遺跡」『年報5』仙台市文化財調査報告書第66集 仙台市教育委員会
- 金森安孝 1984 「富沢水田遺跡・下ノ内浦地区」『仙台平野の遺跡群Ⅱ』仙台市文化財報告書第65集
仙台市教育委員会
- 金森安孝他 1987 『富沢遺跡—東北地方建設局長町宿舍建設工事に伴う発掘調査報告書—』
仙台市文化財調査報告書第104集 仙台市教育委員会
- 工藤哲司他 1984 『富沢水田遺跡—病院建設に伴う泉崎前地区の調査報告書—』仙台市文化財報告書第67集
仙台市教育委員会
- 工藤哲司・太田昭夫 1988 『富沢遺跡—24次調査 富沢中学校地区発掘調査報告書—』仙台市文化財報告書第113集
仙台市教育委員会
- 経済企画庁 1967 『地形・表層地質・土じょう 仙台』
- 斎野裕彦・荒井 格 1983 「鳥居原遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ』仙台市文化財報告書第56集
仙台市教育委員会
- 斎野裕彦 1984 「富沢水田遺跡・鳥居原地区」『仙台平野の遺跡群Ⅱ』仙台市文化財報告書第65集
仙台市教育委員会
- 斎野裕彦 1985 「富沢水田遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ』仙台市文化財報告書第82集
仙台市教育委員会
- 斎野裕彦他 1987 『富沢—富沢遺跡第15次発掘調査報告書—』仙台市文化財報告書第98集 仙台市教育委員会
- 佐藤甲二 1987 『富沢遺跡第28次発掘調査報告書』仙台市文化財報告書第114集 仙台市教育委員会
- 佐藤甲二 1989 「富沢・泉崎浦・山口遺跡」仙台市文化財調査報告書第128集 仙台市教育委員会
- 佐藤甲二 1990 「富沢・泉崎浦・山口遺跡(2)」仙台市文化財調査報告書第135集 仙台市教育委員会
- 佐藤甲二 1991 「第4章第2節 富沢遺跡北部A地区」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(3)』
仙台市文化財調査報告書第152集 仙台市教育委員会
- 佐藤 隆 1983 「泉崎浦遺跡」『年報4』仙台市文化財報告書第57集 仙台市教育委員会
- 佐藤 洋 1988 『富沢遺跡—第34次発掘調査報告書—』仙台市文化財調査報告書第118集 仙台市教育委員会
- 佐藤 洋 1991 『富沢・泉崎浦・山口遺跡(3)』仙台市文化財調査報告書第152集 仙台市教育委員会
- 上浜光朗 1988 『富沢遺跡—第33次発掘調査報告書—』仙台市文化財調査報告書第117集 仙台市教育委員会
- 主浜光朗 1988 『泉崎浦遺跡—発掘調査報告書—』仙台市文化財調査報告書第119集 仙台市教育委員会
- 白鳥良一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅵ』宮城県多賀城調査研究所
- 仙台農耕文化勉強会 1990 「水田跡の基本的理解—仙台市における水田跡の検出と認定—」
『第3回東日本の水田跡を考える会—資料集—』東日本の水田跡を考える会
- 田中則和 1985 「富沢水田遺跡」『仙台平野の遺跡群Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第75集 仙台市教育委員会
- 中富 洋 1990 「第2章第3節 富沢遺跡第52次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(2)』
仙台市文化財調査報告書第135集 仙台市教育委員会
- 中村 浩 『須恵器』柏書房
- 平岡亮輔 1989 『富沢遺跡第35次調査報告書』仙台市文化財調査報告書第150集

藤原宏志・佐々木 章・長野敏子 1989 「先史時代水田の区画規模決定要因に関する検討」『考古学と自然科学』

第21号 日本文化財科学会

松本清一 1987 「富沢遺跡」『仙台平野の遺跡群Ⅴ』仙台市文化財調査報告書第97集 仙台市教育委員会

雄山園 1992 『土器器と須恵器』古墳時代の研究6

雄山園 1993 『須恵器の編年とその年代』季刊考古学第42号

吉岡・藤原 1989 「富沢遺跡・泉崎補遺跡—仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅰ」仙台市文化財報告書第126集

発掘調査参加者

相原友子	青山諒子	赤井沢サダ子	赤井沢千代子	阿部洋子
小野辰夫	金正男	泉美恵子	板橋栄子	板橋静江
板橋スエノ	板橋孝子	伊藤房江	岩井レイ子	植野敏江
植野美登子	大槻明美	大友鶴雄	大山由紀子	工藤糸なよ
黒沢幸子	小林テル	桜井芳子	西条裕子	佐々木洋介
佐竹カツヨ	佐竹さく子	佐藤ちよし	佐野弘	島崎なつ子
菅井君子	菅谷裕子	菅原弘	庄子かつえ	鈴木かつ子
高橋勝恵	高橋美香	富田是	永沢幸枝	永田英明
永野泰治	沼田綾子	蓮沼英子	蓮沼秀子	畠中真知子
早川裕子	樋口より子	日野きみ子	松野順子	松本和美
水野信子	宮嶋都	森みほ子	山田沢子	山田やす子
横山美智子	渡辺イテ子	渡辺幸子	渡辺洋子	渡部麗子

写 真 图 版



富沢遺跡第78次調査
写真1
I区北壁断面

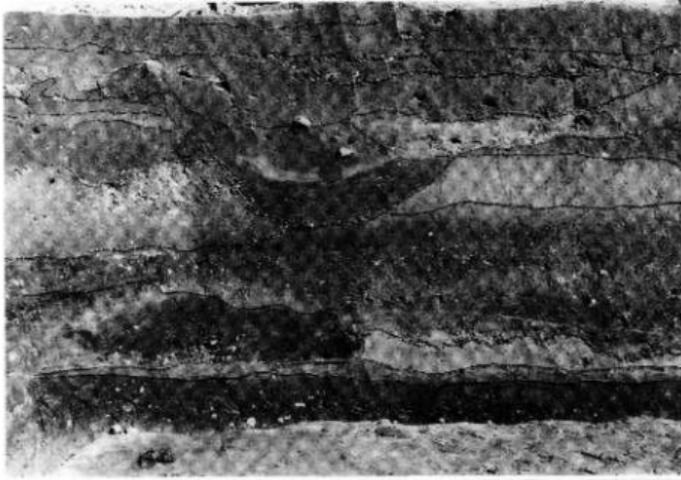


写真2
III区東壁断面

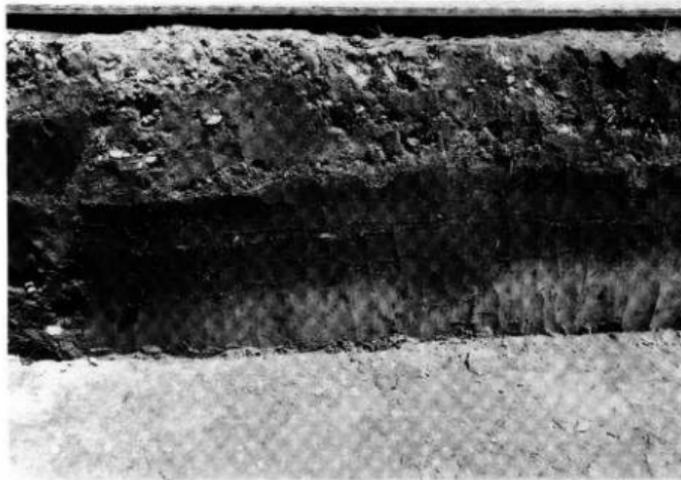


写真3
III区南壁断面

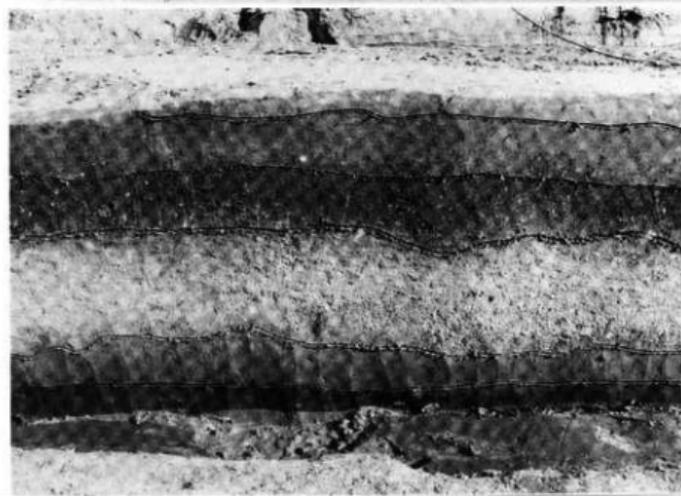




写真4
I区 SD8
土師器出土状況

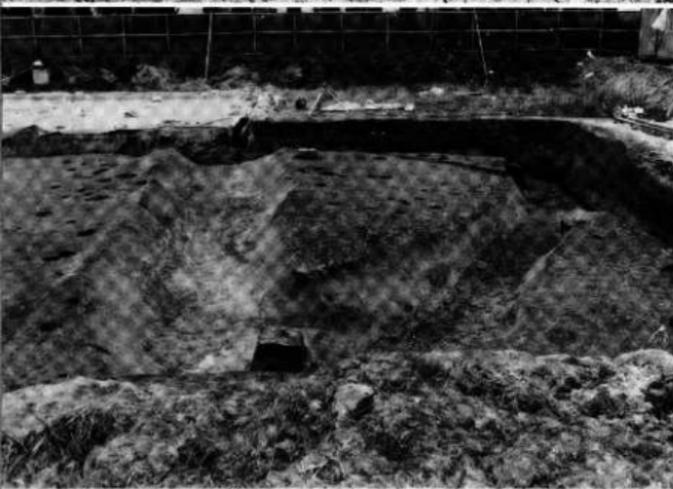


写真5
I区 SD11・13
完掘状況(東から)



写真6
II区 SD3
木製品出土状況

写真7
II区 SD4・SR1
完形状況(北から)

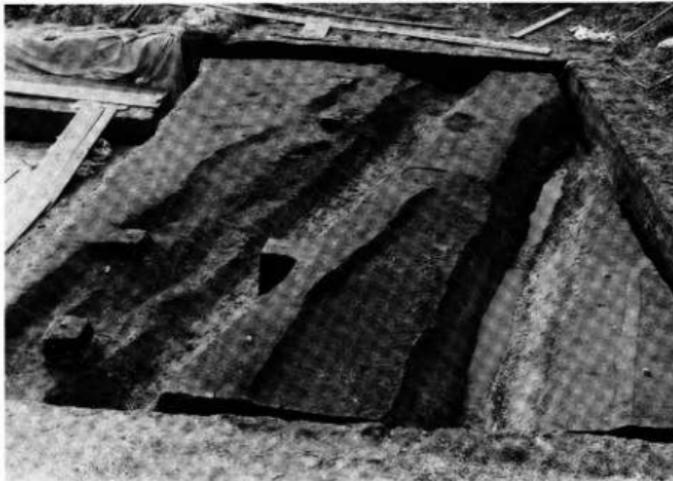


写真8
I区 SR1
樹木出土状況



写真9
SR1 断面
(南から)

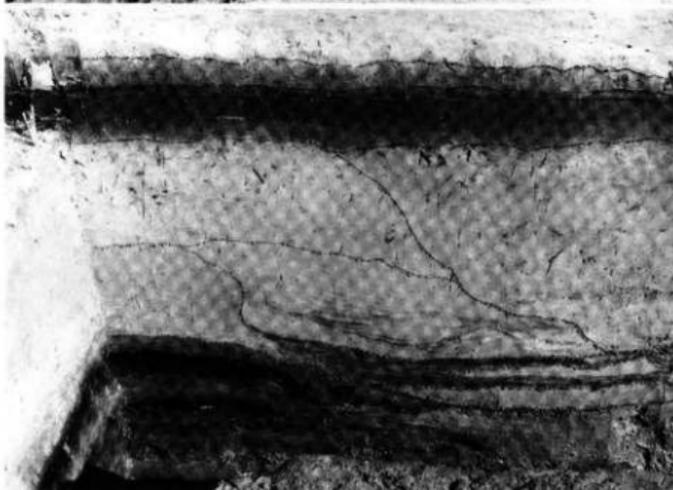




写真10
Ⅲ区 S D26
検出状況（西から）

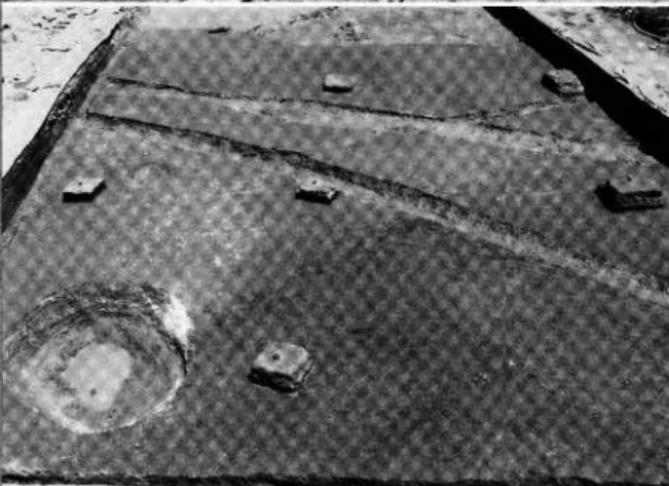


写真11
Ⅲ区 S D26、S K12
完掘状況
（南から）

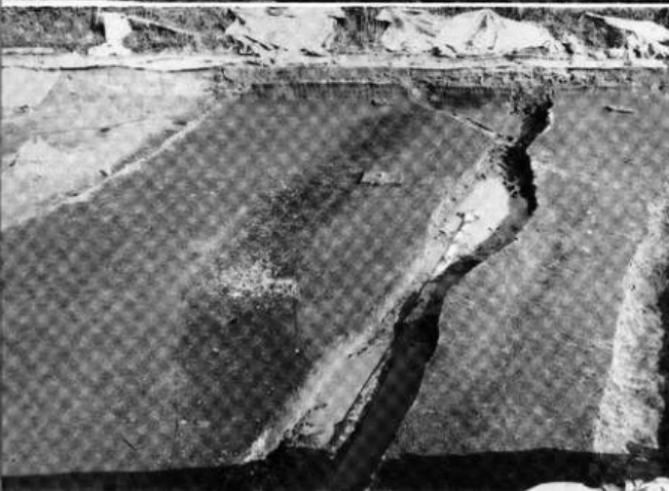


写真12
Ⅲ区 S D28
検出状況（西から）

宮沢遺跡第80次調査
写真13
西壁断面

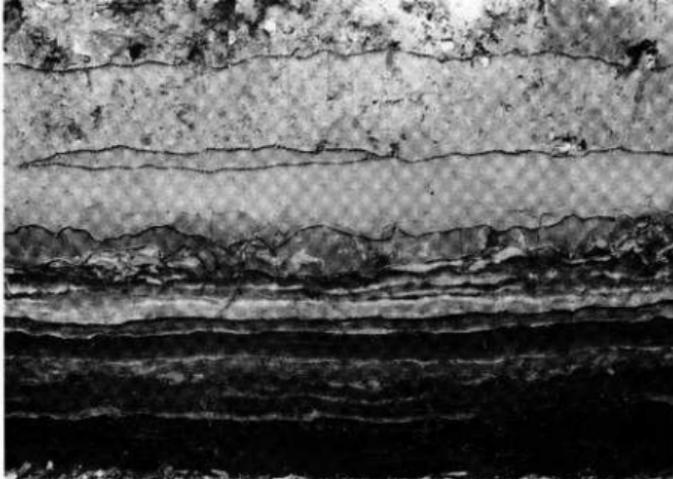


写真14
東壁断面 (2段目)

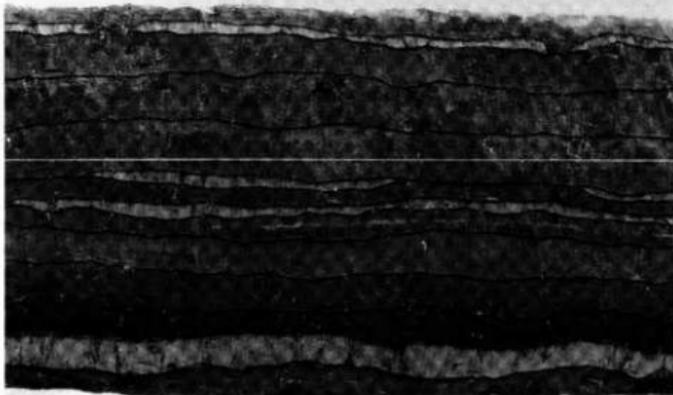
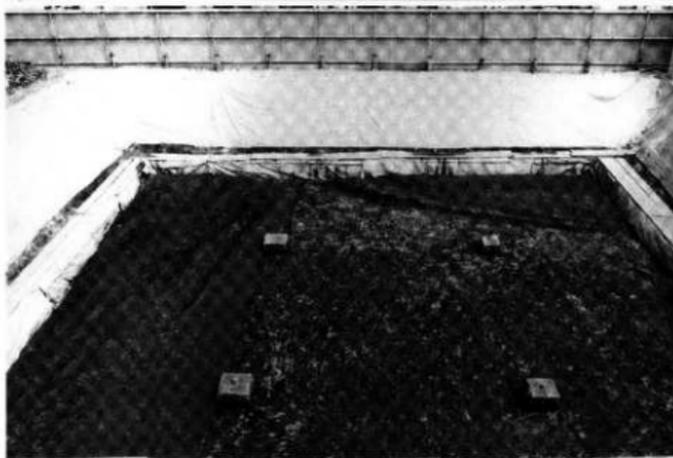


写真15
SD 2・4
完整状況 (南から)



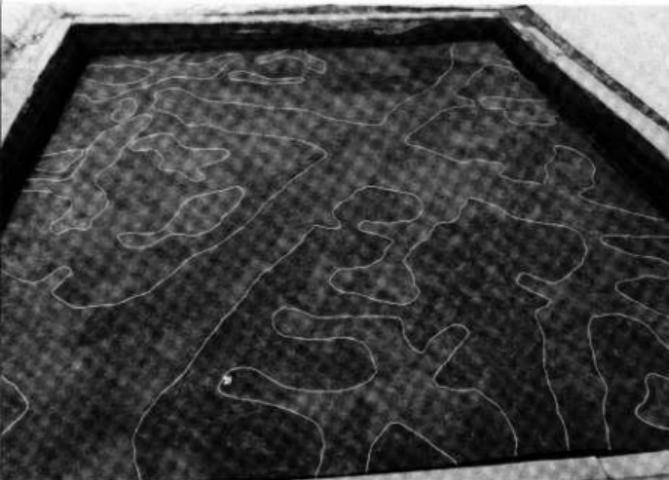


写真16
9層水田跡検出状況
(東から)



写真17
9層水田跡検出状況
(西から)

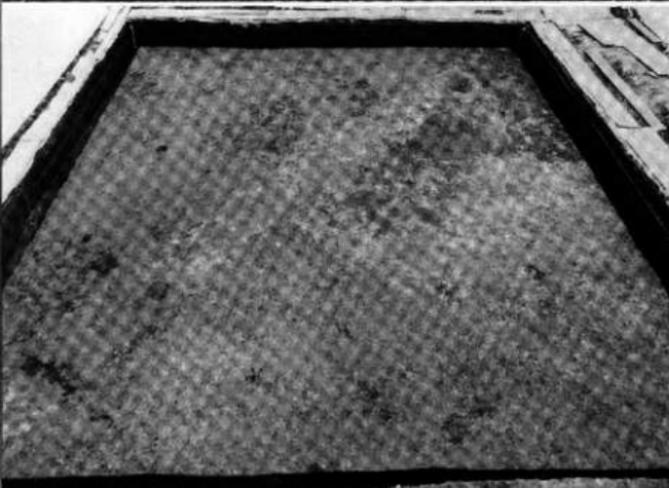


写真18
9層水田跡疑似畦畔B
検出状況(西から)

富沢遺跡第81次調査
写真19
4層水田跡疑似畦畔B
検出状況(南から)



写真20
SK1 完掘状況
(南西から)

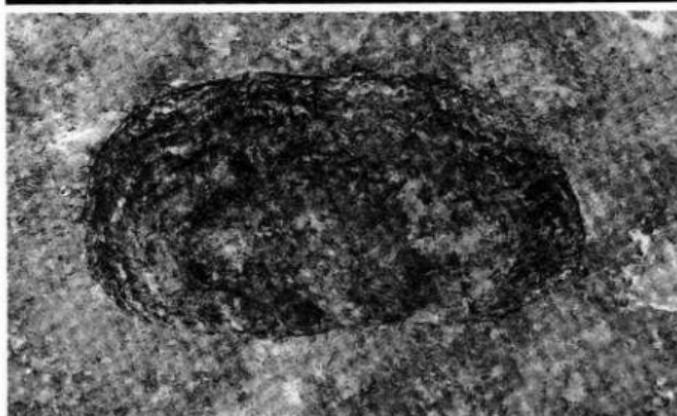
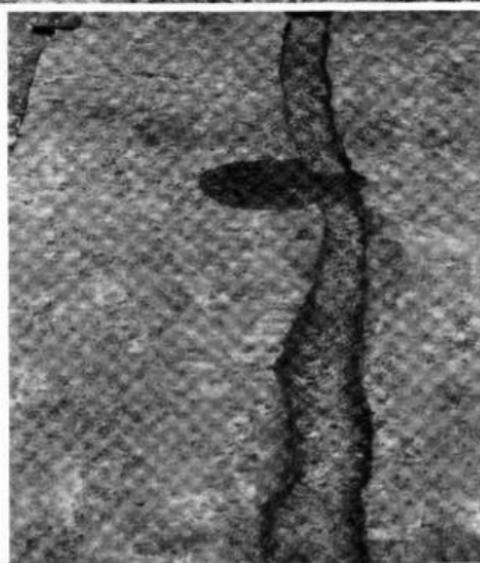


写真21
SD1 完掘状況
(西から)



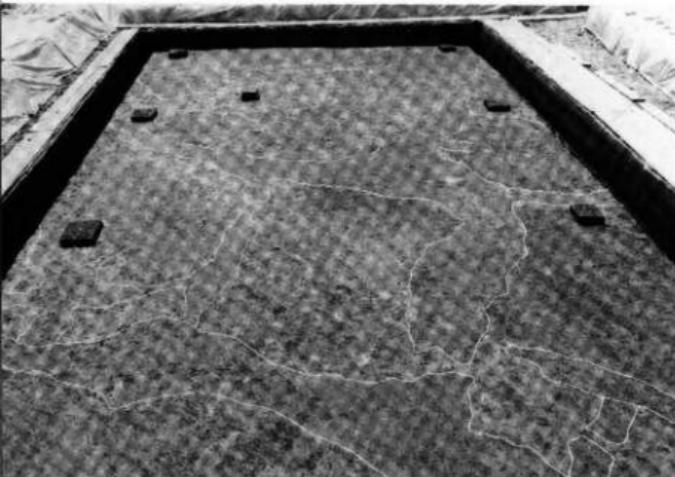


写真22
11層水田跡検出状況
(北から)

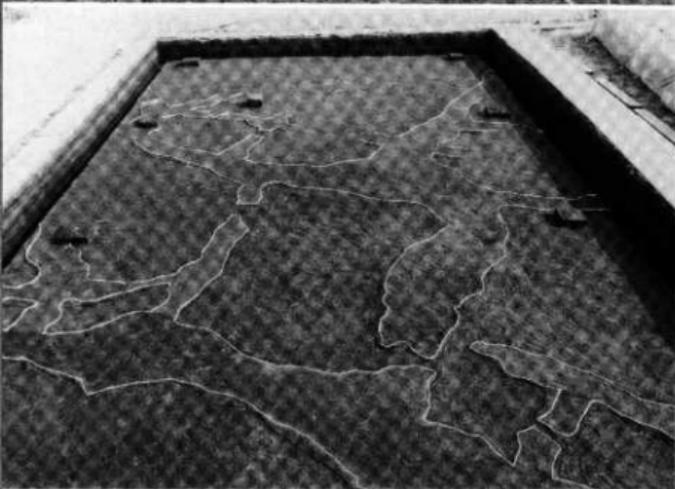


写真23
11層水田跡完掘状況
(北から)

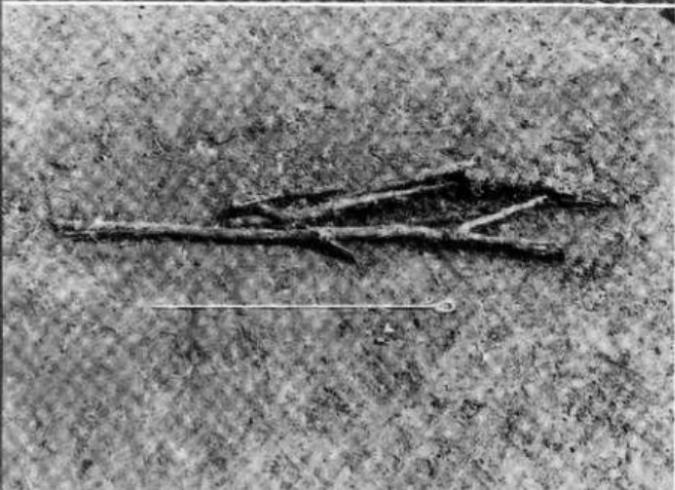


写真24
14層上面樹木片集中状況
(南西から)

写真25
4層水田跡
疑似畦畔B断面
(北壁A-2グリッド)

4層

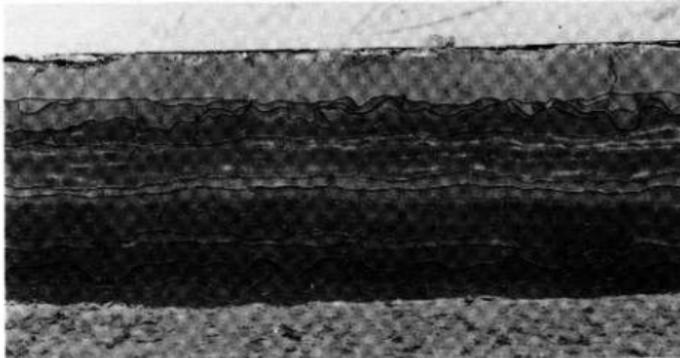


写真26
11層水田跡畦畔(畦畔1)断面
(北壁A-1グリッド)

11層

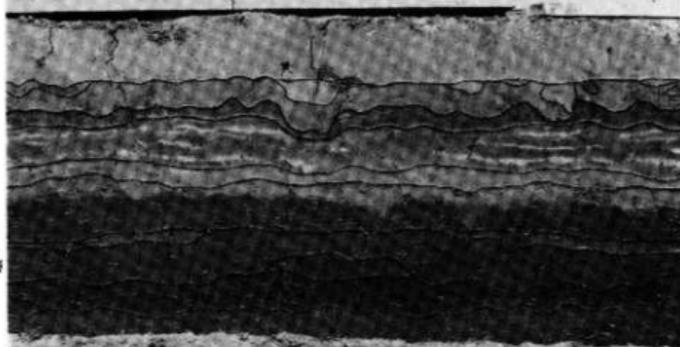


写真27
11層水田跡畦畔(畦畔2)断面
(西壁B・C-1グリッド)

11層

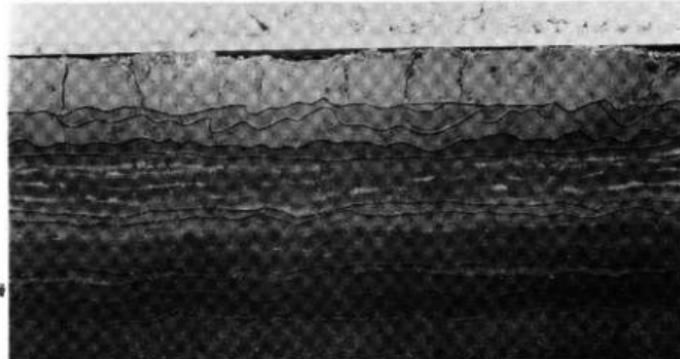
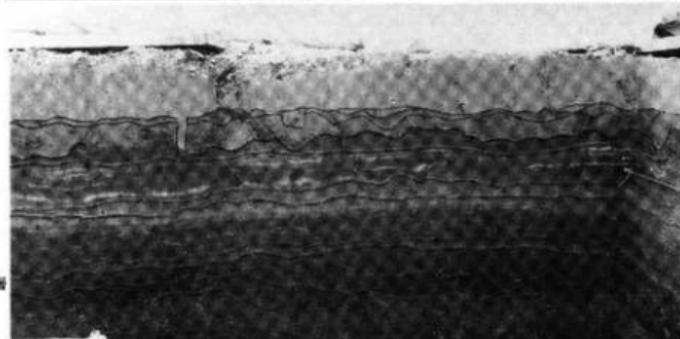


写真28
11層水田跡畦畔断面
(西壁A-1グリッド)

11層



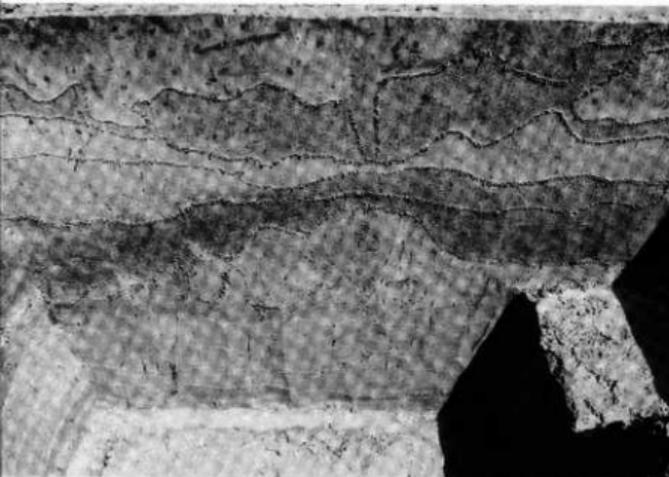


写真29
下層調査区断面（東壁）

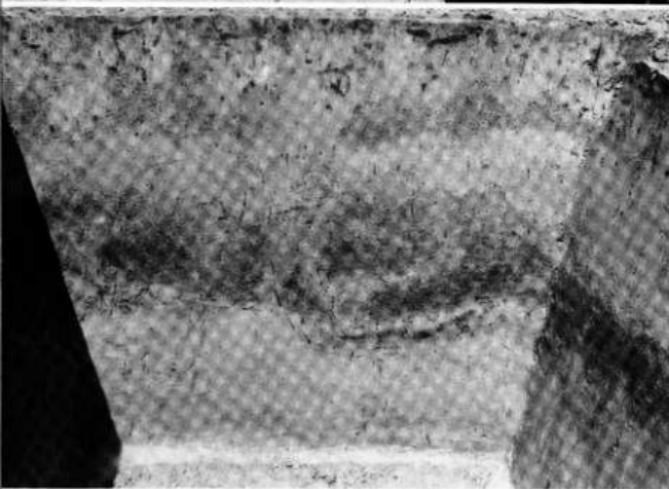


写真30
下層調査区断面（北壁）

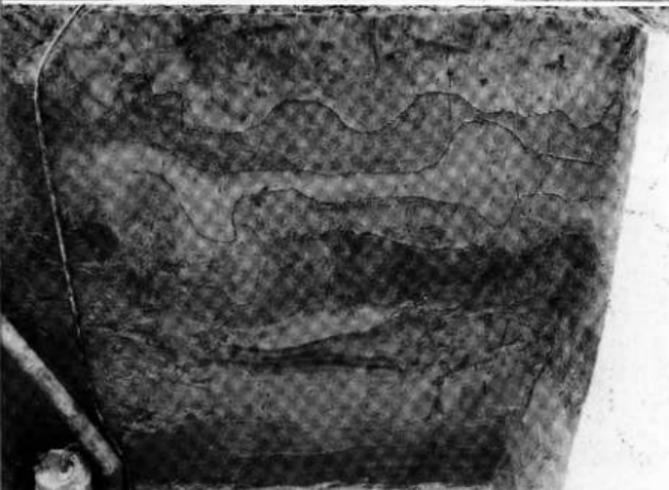


写真31
下層調査区断面（西壁）

富沢遺跡第82次調査
写真32
東壁断面

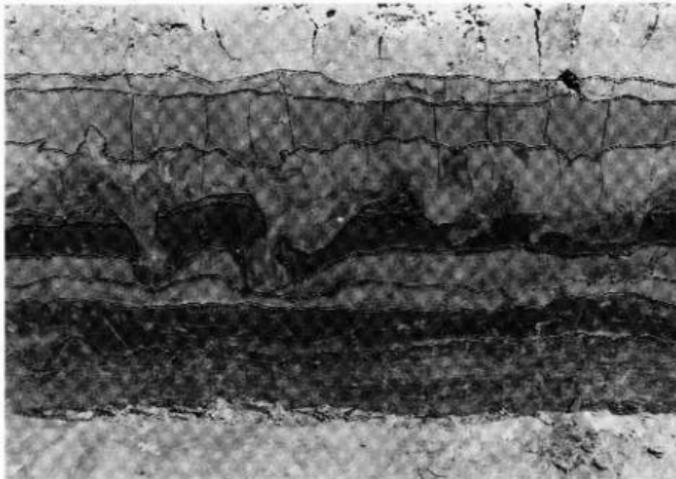


写真33
SD1 完掘状況
(西から)

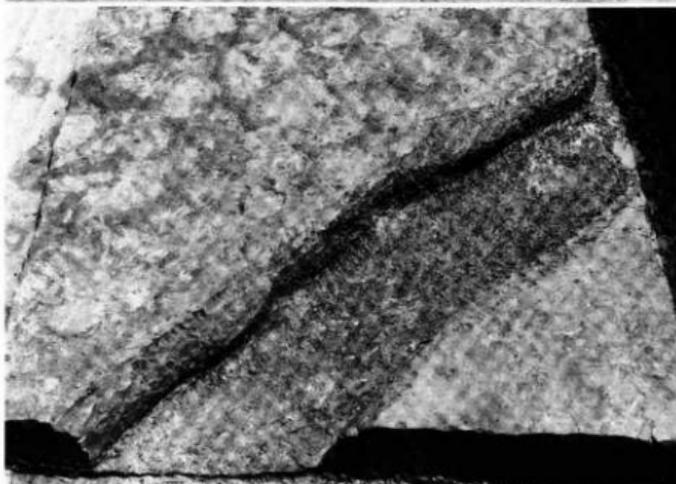


写真34
15層遺物出土状況



宮沢遺跡第83次調査

写真35

3層水田跡完掘状況
(南から)



写真36

3層水田跡水口状況
(北から)

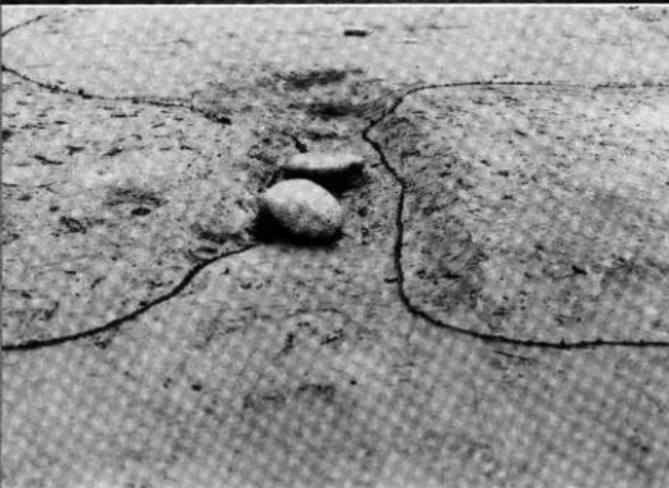


写真37

5層分布域及び上面
自然流路 (西から)

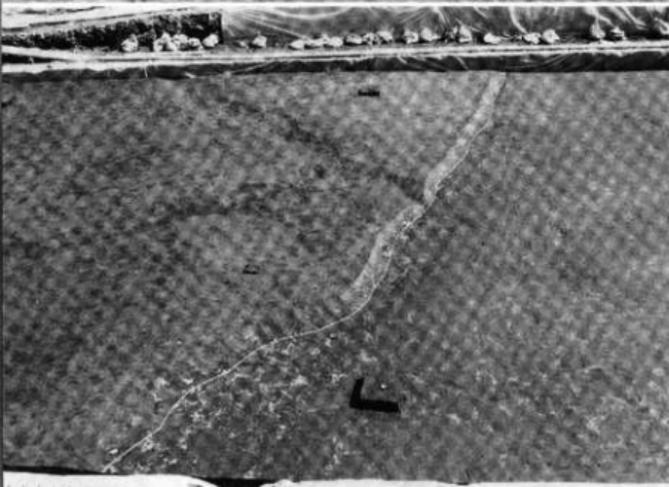


写真38
6層分布域（8層上面）
（南から）

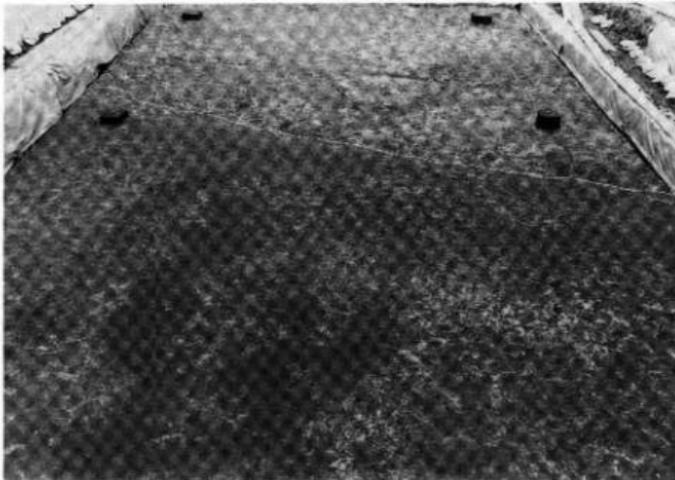


写真39
6層分布域（9層上面）
（南から）

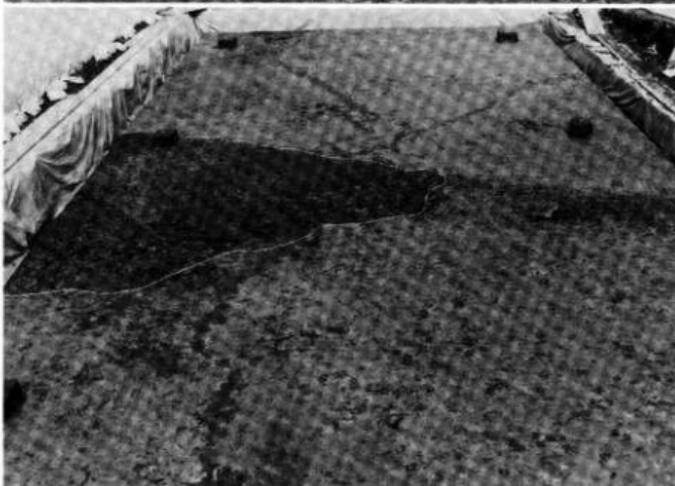


写真40
12 a 層水田跡検出状況
（南から）



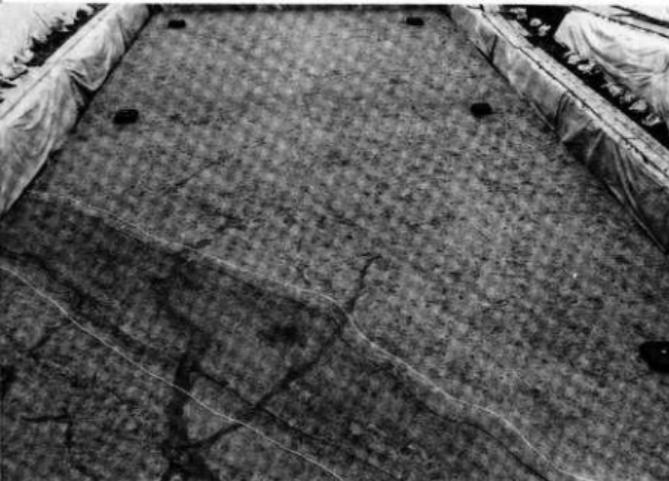


写真41
12a層水田跡完掘状況
(南から)



写真42
13層水田跡大畦畔
検出状況(南から)



写真43
13層水田跡小畦畔
検出状況(北から)

写真44
13層水田跡完掘状況
(南から)

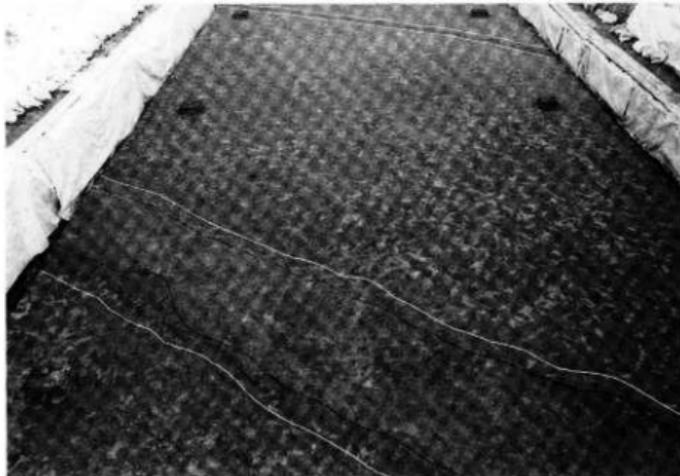


写真45
13層水田跡完掘状況
(北から)

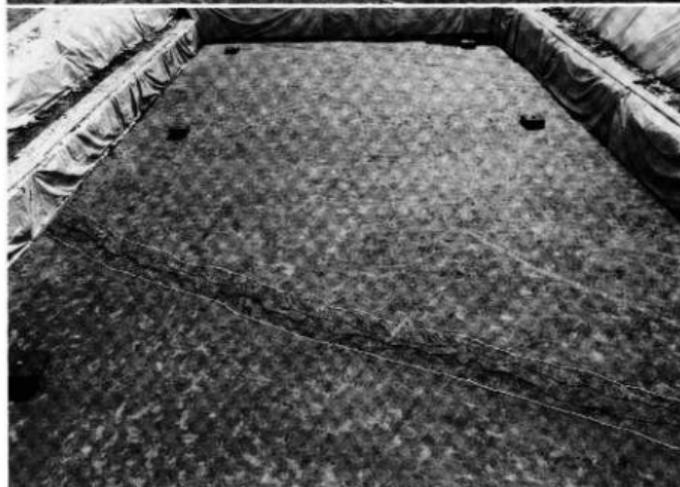


写真46
13層水田跡完掘状況
(北西から)

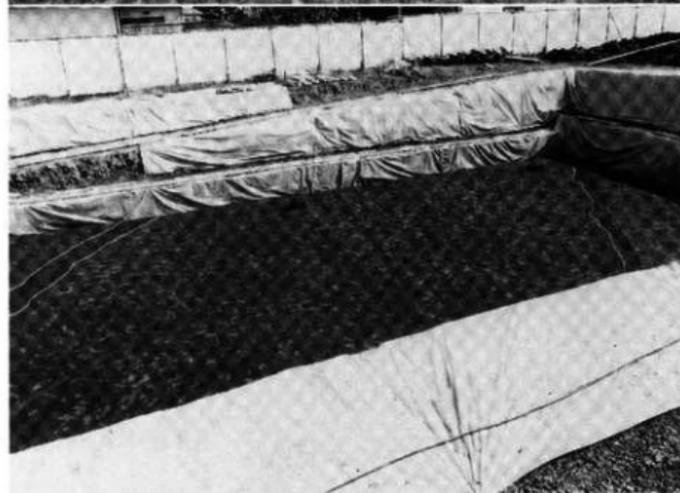


写真47
3層水田跡段差断面
(東壁 C-4グリッド)

3層

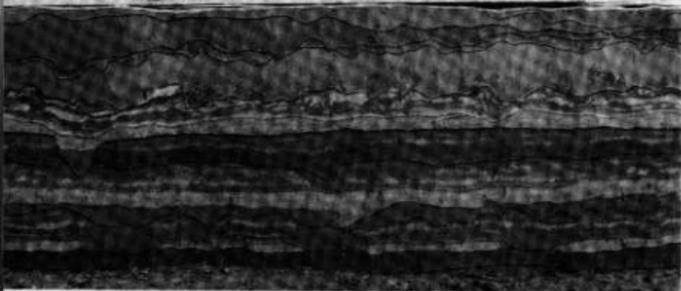


写真48
3層水田跡畦畔断面
(東壁 D-4グリッド)

3層

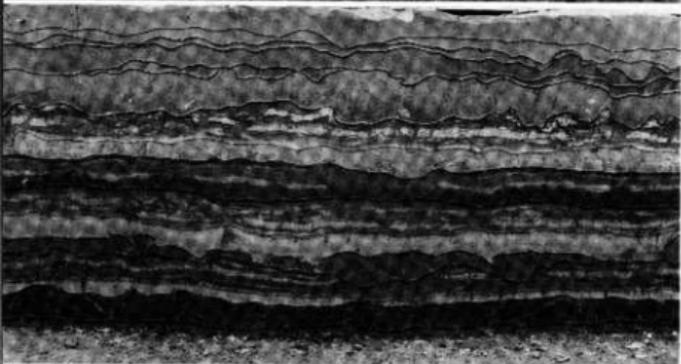


写真49
3層水田跡畦畔断面
(西壁 C-1グリッド)

3層

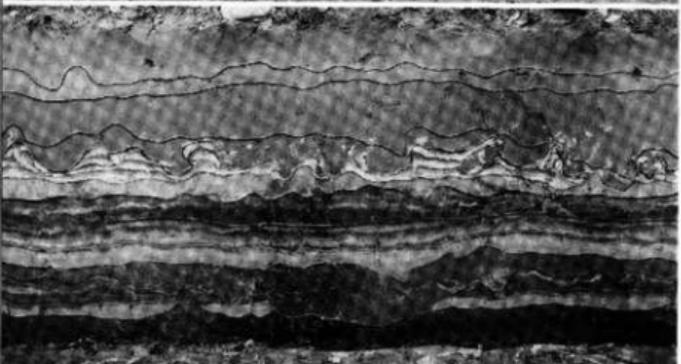


写真50
5・6層分布域断面
(東壁 D-4グリッド)

3層

6層

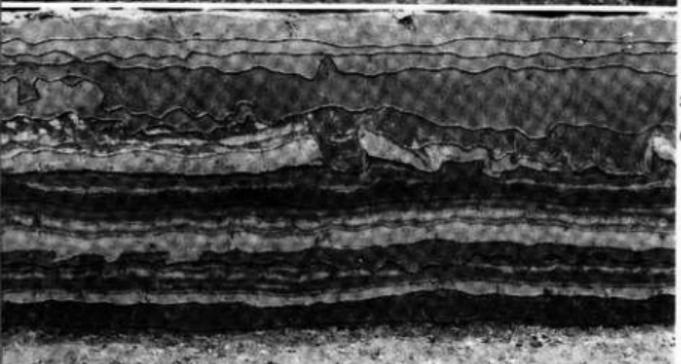


写真51
12a・13層水田跡
大畦畔断面
(南壁 F・3・4グリッド)

12b
13層

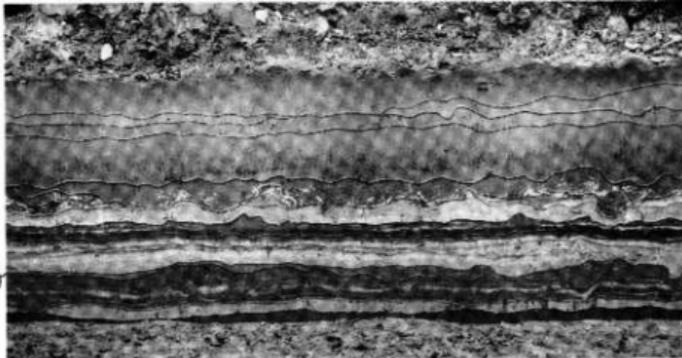


写真52
12a・13層水田跡
大畦畔断面
(西壁 D・E-1グリッド)

12a層
13層



写真53
13層水田跡小畦畔断面
(北西コーナー)

13層

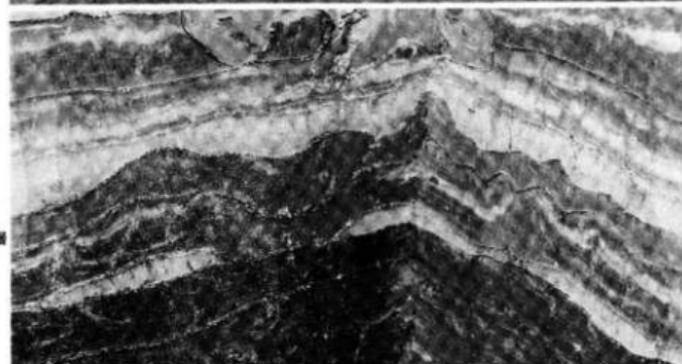
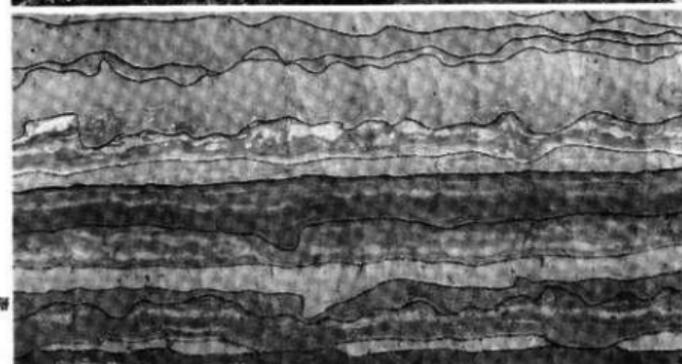


写真54
13層水田跡小畦畔断面
(東壁 B・C-4グリッド)

13層



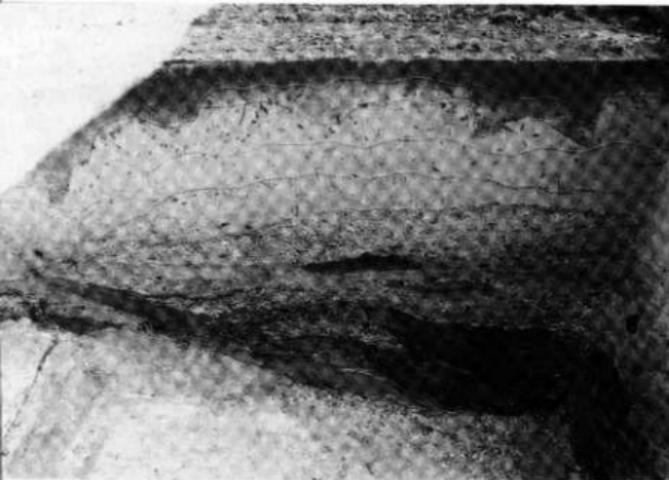


写真55
下層調査区断面（東壁）

30層

31層

32層

33層

SRI堆積土

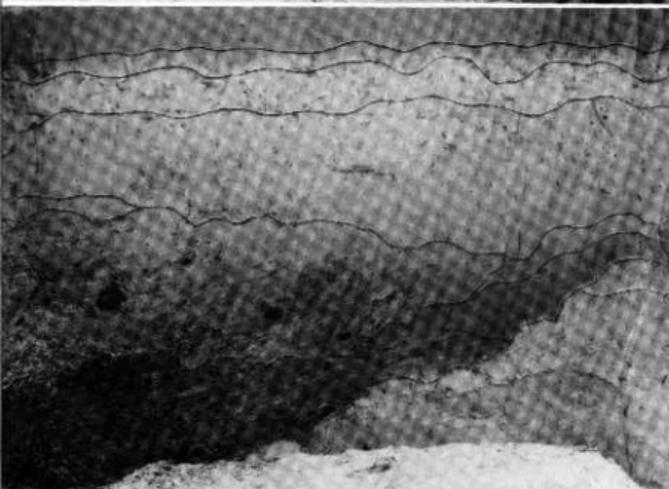


写真56
下層調査区断面（南壁）

31層

32層

33層

SRI堆③

SRI堆④

35層

37層

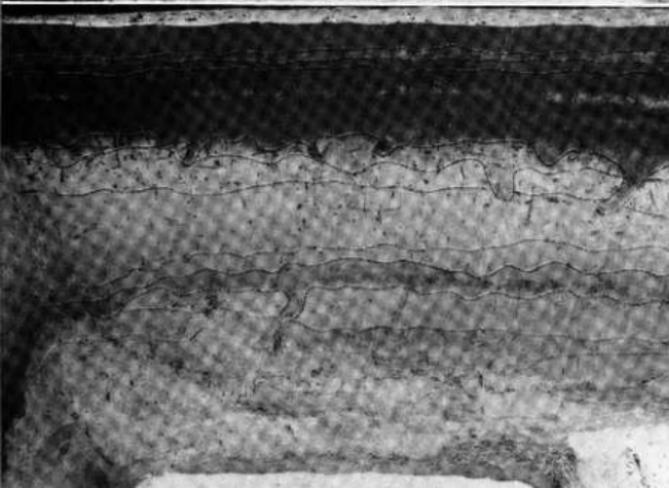


写真57
下層調査区断面（西壁）

29層

30層

31層

32層

33層

SRI堆③

SRI堆④

34層

35層

36層

37層

38層

富沢遺跡第84次調査
写真58
北壁断面

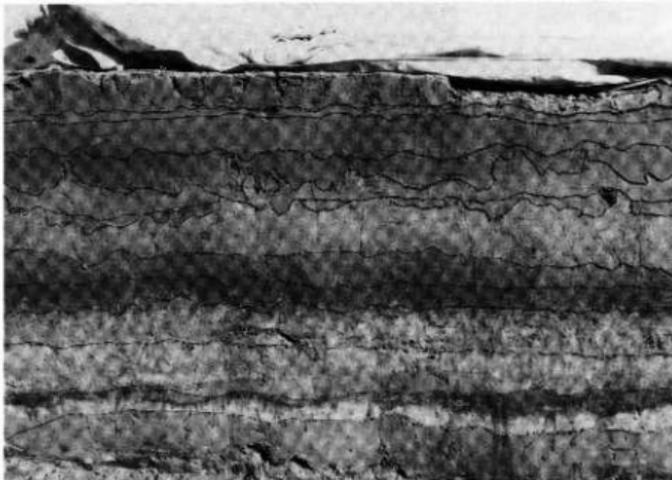


写真59
西壁断面

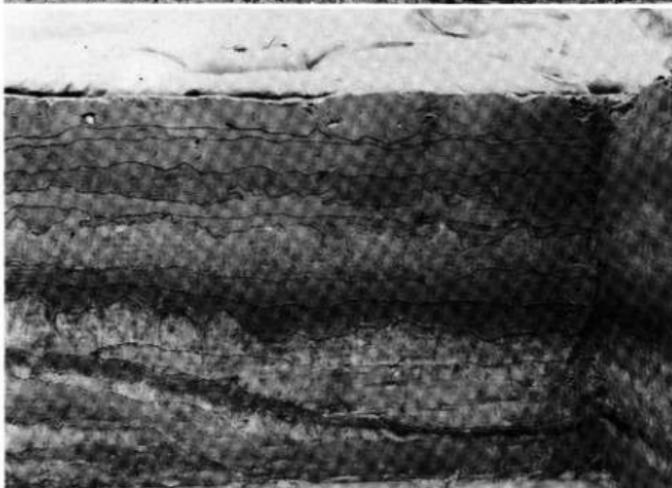


写真60
南壁断面

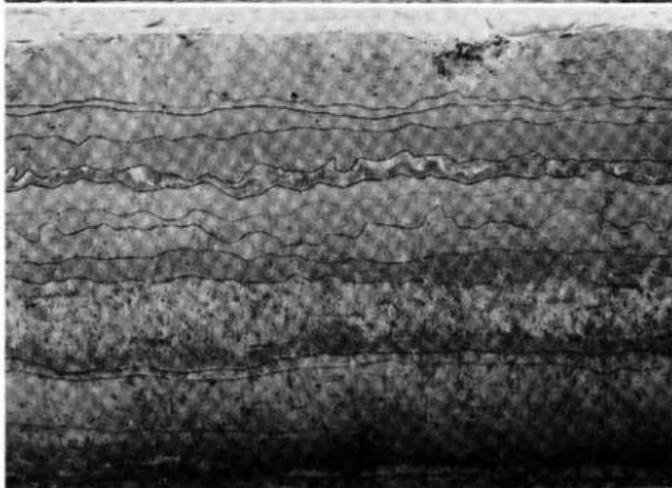


写真61
北壁断面

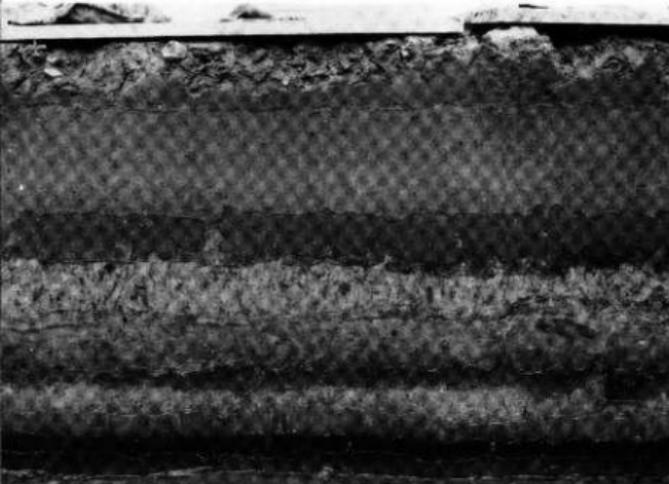


写真62
東壁断面

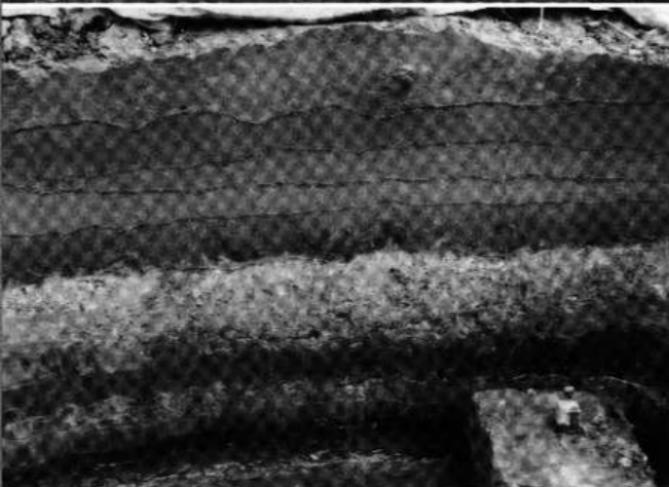
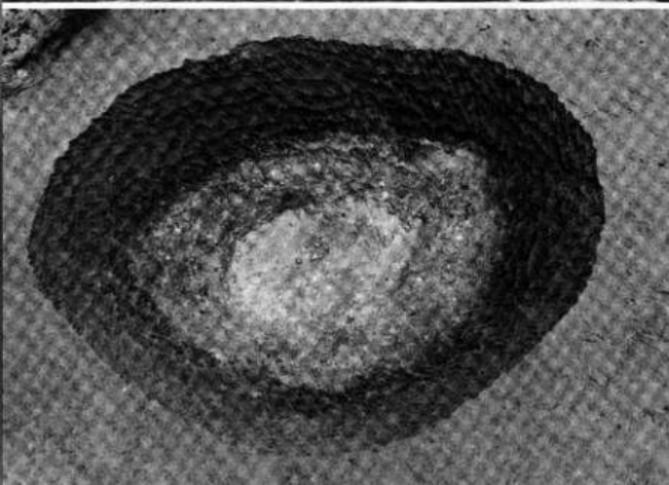


写真63
SK1 完掘状況
(北から)



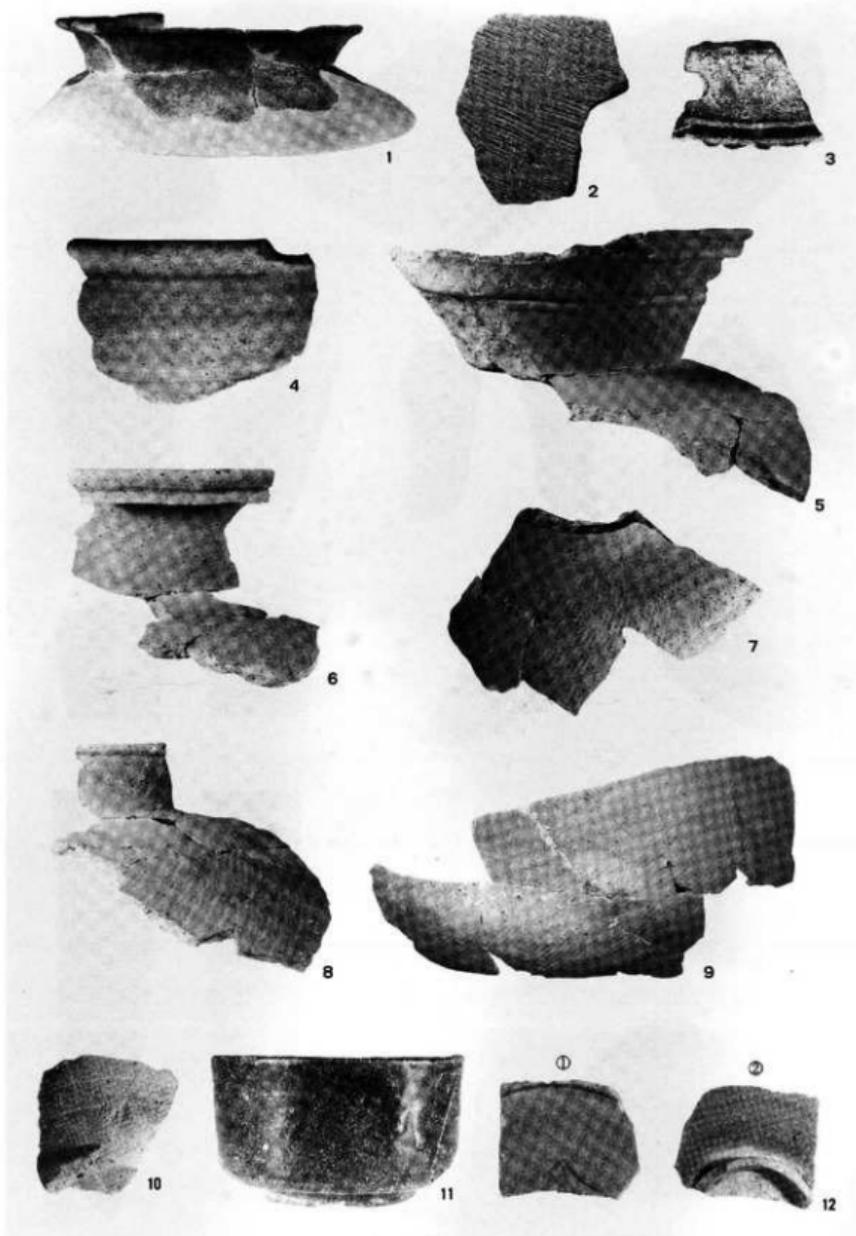


写真64 富沢遺跡第78次調査 出土遺物(1)

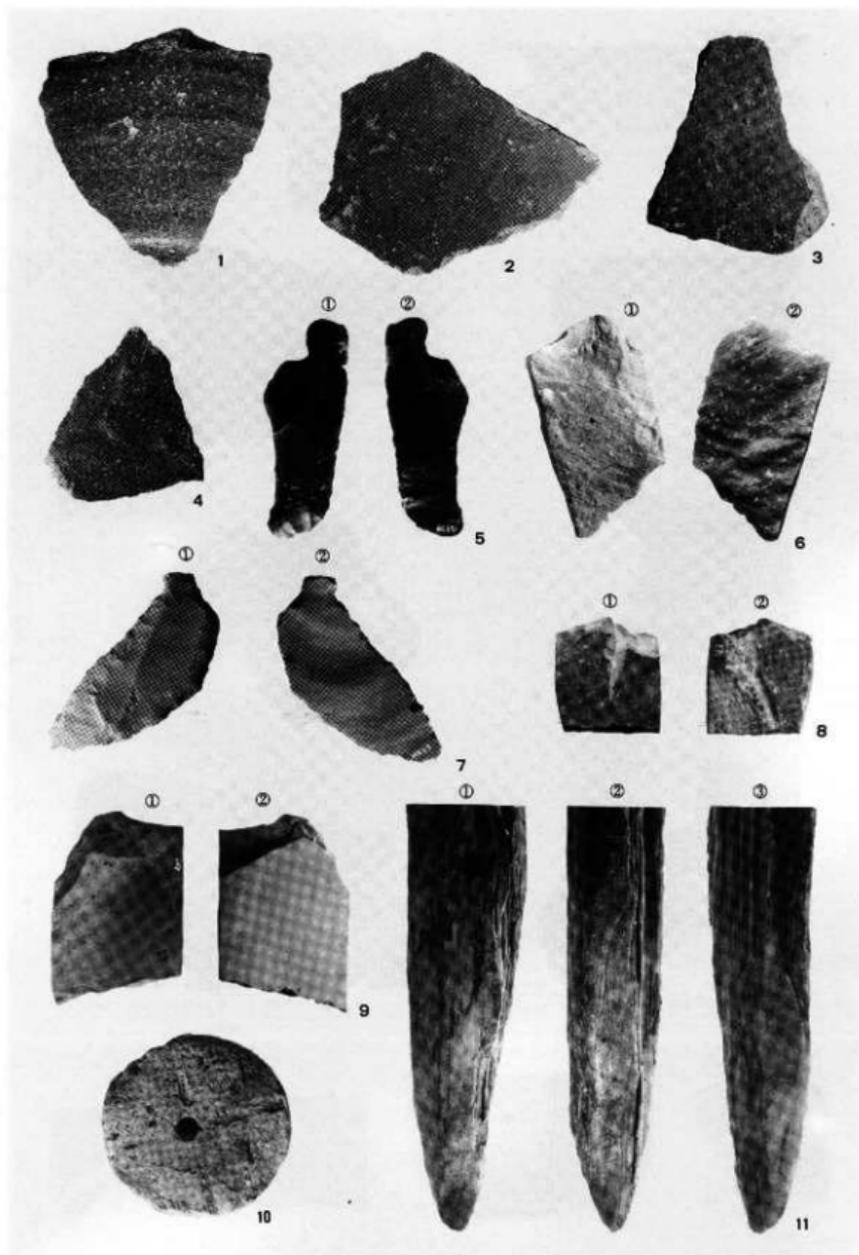


写真65 富沢遺跡第78次調査 出土遺物(2)

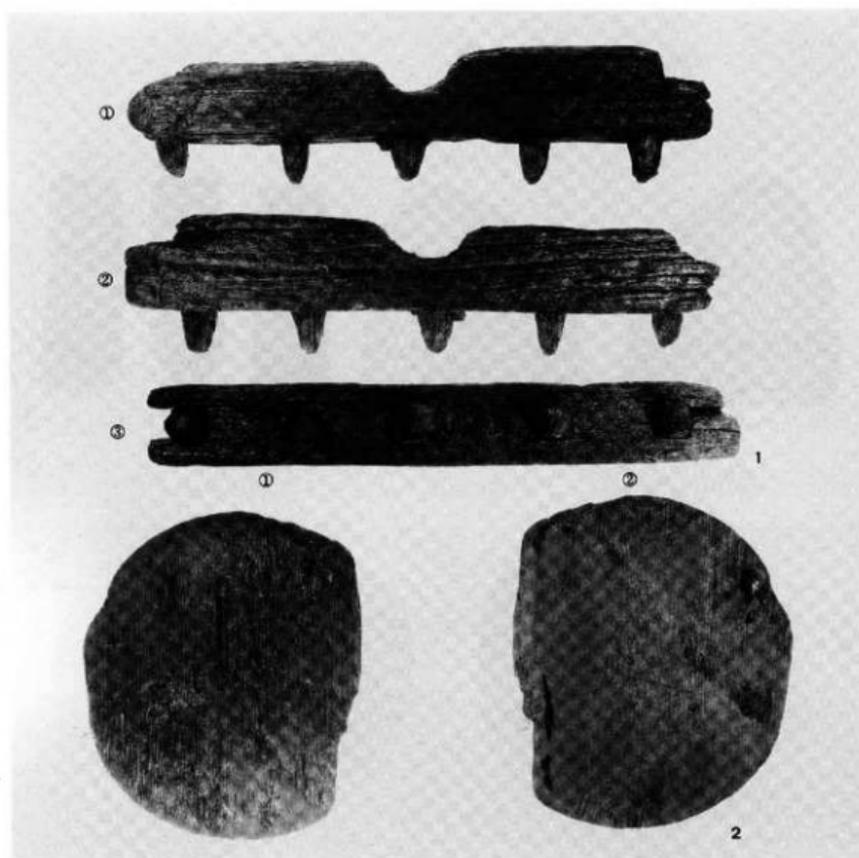


写真66 富沢遺跡第78次調査 出土遺物(3)



写真67 富沢遺跡第80次調査 出土遺物

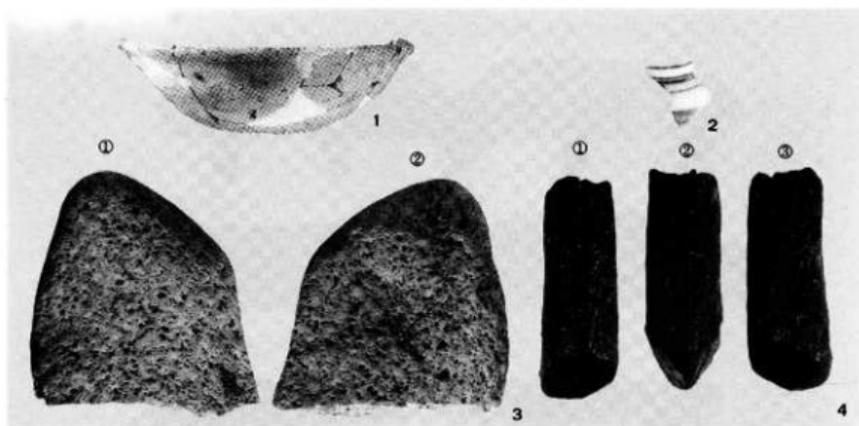


写真68 富沢遺跡第81次調査 出土遺物

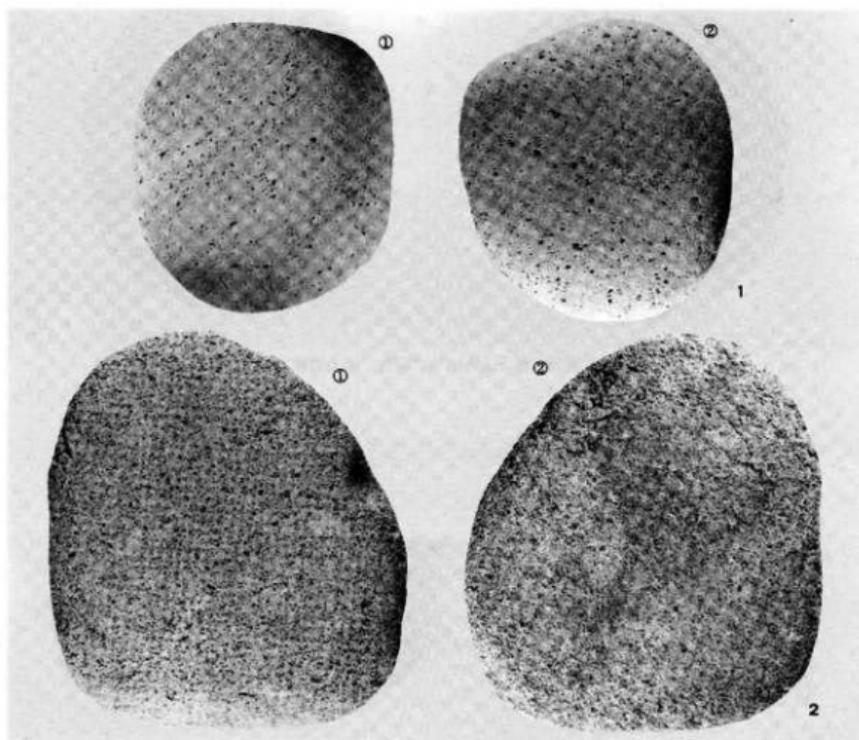


写真69 富沢遺物第82次調査 出土遺物

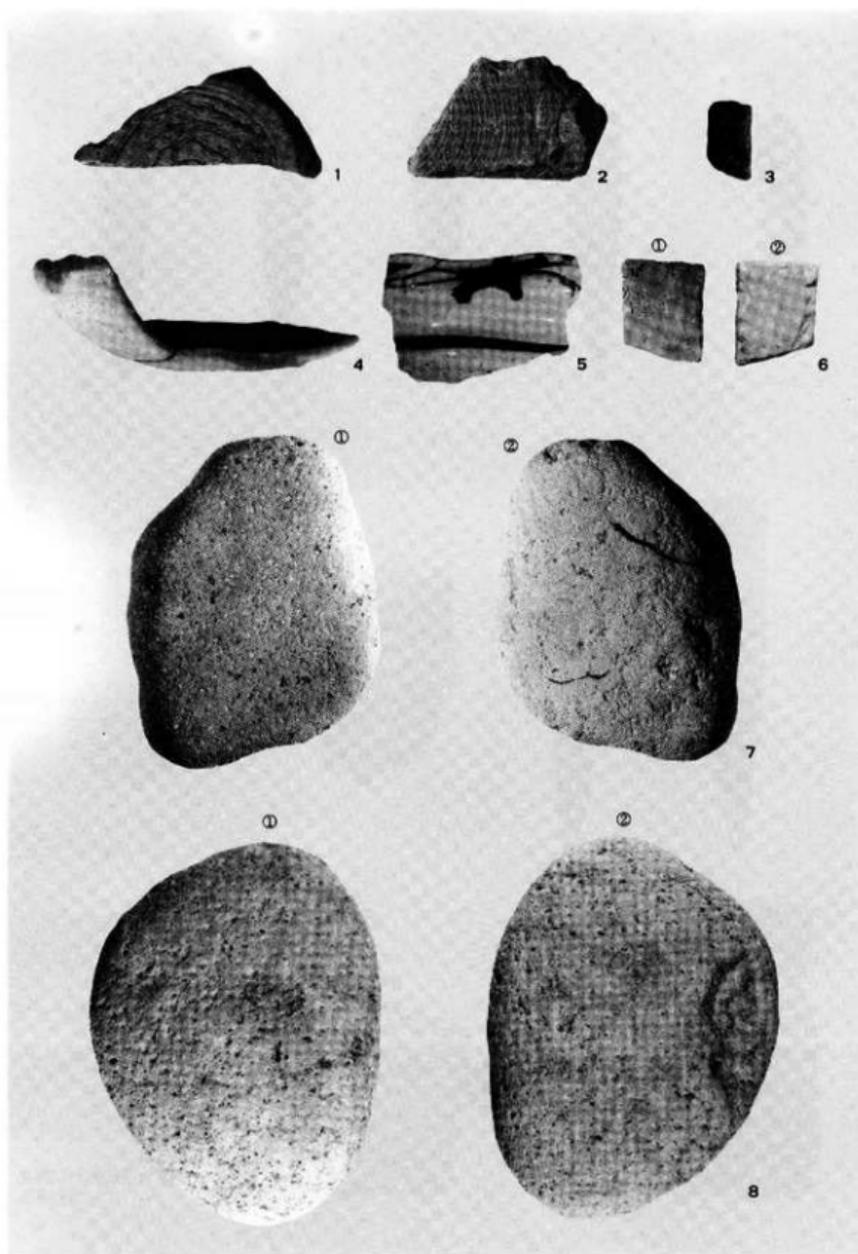


写真70 富沢遺跡第83次調査 出土遺物(1)

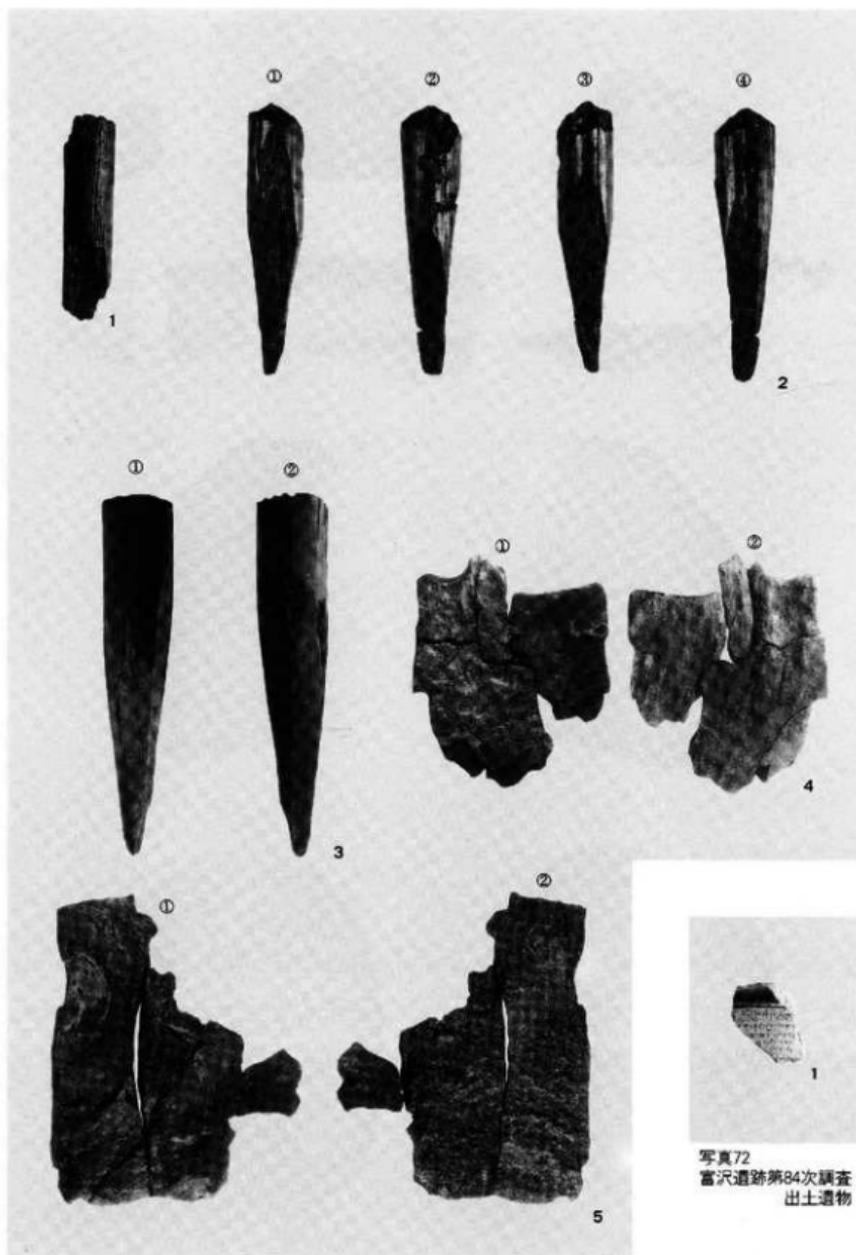


写真71 富沢遺跡第83次調査 出土遺物(2)

写真72
富沢遺跡第84次調査
出土遺物



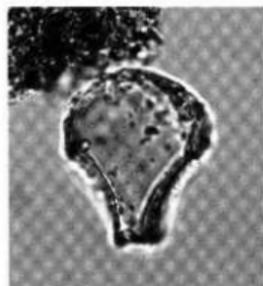
1. 富沢78次 14層 イネ



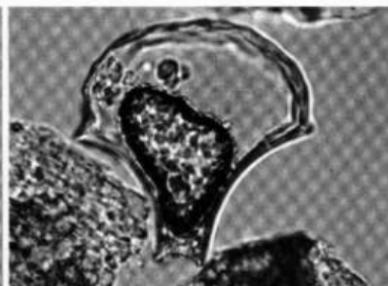
2. 富沢80次9a-2層 イネ



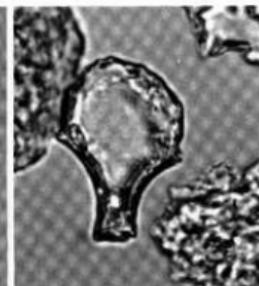
3. 富沢81次11層 イネ



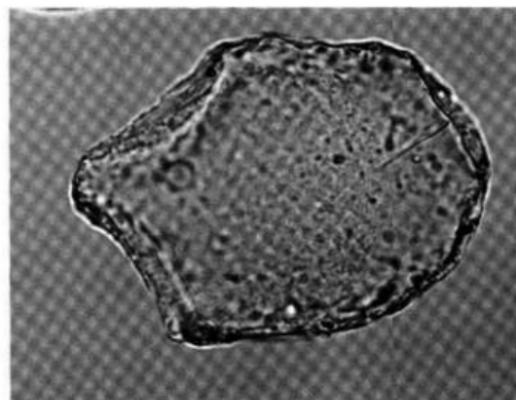
4. 富沢82次 9層 イネ



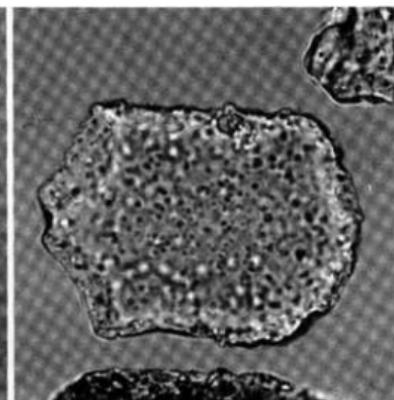
5. 富沢84次 10層 イネ



6. 富沢85次 9層 イネ

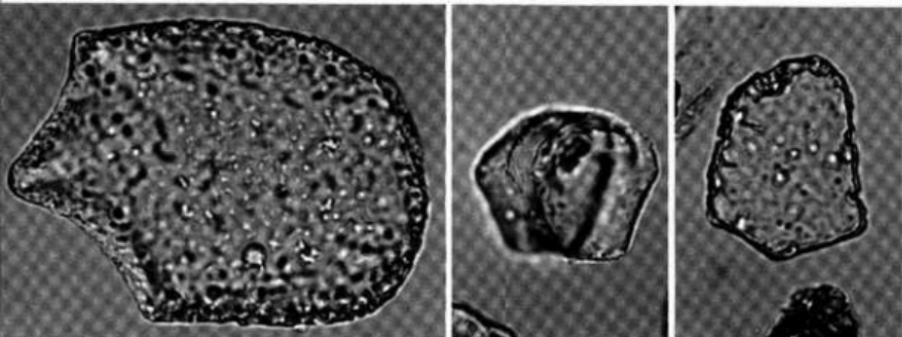


7. 富沢80次 9 a-2層 ヨシ属



8. 富沢82次 9層 ヨシ属

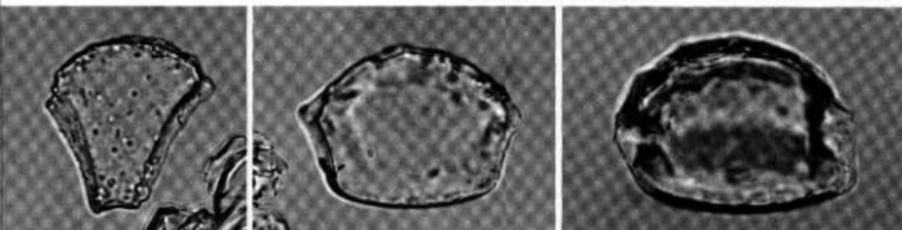
※ 倍率はすべて400倍



9. 富沢85次 2層 ヨシ属

10. 富沢84次 13層
タケ亜科 (ネザサ節など)

11. 富沢85次 5層
タケ亜科 (クマザサ属)



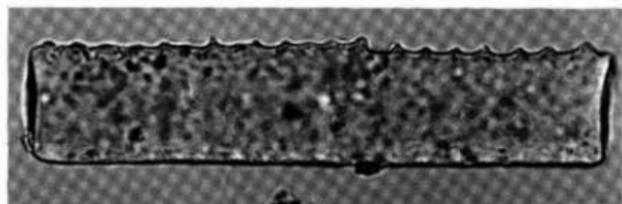
2. 富沢85次 6層 タケ亜科

13. 富沢81次10層 ジュズダマ属

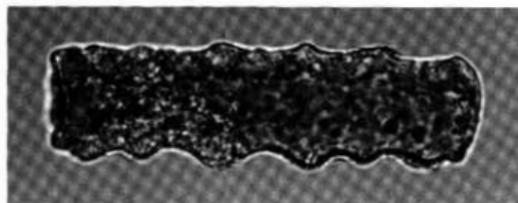
14. 富沢85次 5層 ジュズダマ属



15. 富沢78次14層 不明



17. 富沢85次 11層 棒状珪酸体



18. 富沢85次 11層 棒状珪酸体



16. 富沢83次 13層 不明

130

※ 倍率はすべて400倍

文化財課職員録

課長 白鳥良一		
管理係	調査第一係	調査第二係
係長 菅原澄雄	係長 加藤正範	係長 田中則和
主事 佐藤正幸	主任 結城慎一	教諭 太田昭夫
” 高橋三也	教諭 佐藤好一	主事 佐藤甲二
” 庄子 厚	主任 村上道子	” 渡部弘美
” 佐藤寿江	” 篠原信彦	” 斎野裕彦
	” 木村浩二	” 荒井 格
	” 佐藤 洋	” 中富 洋
	主事 吉岡恭平	” 平間充輔
	” 金森安孝	教諭 五十嵐康洋
	教諭 小川淳一	” 菅原裕樹
	主事 工藤哲司	主事 渡部 紀
	” 主浜光朗	教諭 熊谷裕行
	” 長島栄一	
	” 工藤信一郎	
	教諭 神成浩志	
	” 竹田幸司	
	” 稲葉俊一	
	主事 佐藤 淳	
	教諭 川名秀一	

仙台市文化財調査報告書第171集

富沢・泉崎浦・山口遺跡(5)

——富沢遺跡第78次・80～85次発掘調査報告書——

平成5年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区四分町3-7-1
仙台市教育委員会文化財課

印刷 株式会社 共新精版印刷

仙台市宮城野区口の出町2-4-2
TEL 236-7181

